

津谷遺跡

発掘調査報告書

1997

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

津^つ谷^や遺跡

発掘調査報告書

平成9年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査区全景（上空南より）



道跡遺景（上空東より）



石鏃



SP1259出土遺物

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、津谷遺跡の調査成果をまとめたものです。

津谷遺跡は山形県の北部、新庄盆地の西端に位置する戸沢村にあります。戸沢村は、日本三大急流の一つである最上川の船下りでよく知られているところです。

この度主要地方道新庄戸沢線道路整備事業に伴い、工事に先立って津谷遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、県道予定部分約2,000㎡から1,600基を数える遺構が検出され、縄文時代の石器、土器片などの遺物も多数出土しました。中でも色とりどりの石材で作られた石鎌や、鮭川を遡上する鮭を捕る網に使ったと考えられる石錘などは、豊かな縄文時代の食文化を思い起こさせるものです。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成9年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場清耕

例 言

- 1 本書は、主要地方道新庄戸沢線道路整備事業に係る「津谷遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県土木部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名	津谷遺跡 (B T Z T Y)	遺跡番号	1 0 9 9
所 在 地	山形県最上郡戸沢村大字津谷字鞭打野		
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
調 査 期 間	平成 8 年 4 月 1 日～平成 9 年 3 月 31 日		
現 地 調 査	平成 8 年 5 月 7 日～平成 8 年 7 月 18 日		
調 査 担 当 者			

調査第二課長	野尻 侃
主任調査研究員	尾形 與典
調査研究員	小関 真司 (現場主任)
嘱託職員	渡辺 薫

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県土木部新庄建設事務所、戸沢村教育委員会、最上教育事務所等関係機関の協力を得た。また出土した石器などの石材鑑定については山形県立博物館・長澤一雄氏より御指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は、小関真司、渡辺 薫が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人、飯塚 稔、豊野調子が担当し、全体については野尻 侃が監修した。
- 6 委託業務は下記の通りである。

遺構写真実測	アジア航測株式会社
一部の遺物写真実測	株式会社シン技術コンサル
自然科学分析	バリノ・サーヴェイ株式会社

- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

ST…竪穴住居跡	SK…土坑	SD…溝跡
SG…河川跡	SP…ピット	SX…性格不明遺構
EU…埋設土器	RP…土器・土製品	RQ…石器・石製品
P…土器	S…土器	

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記の通りである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N-6°30'-Wである。
- (3) 遺構実測図は1/10、1/20、1/40、1/60、1/200で採録し、図毎にスケールを付した。
- (4) 遺物実測図・拓影図は1/2、1/3、1/4で採録し、おのおのスケールを付した。遺物図版については1/3を基準とするが、一部任意の縮尺とした。
- (5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (6) 遺構観察表・遺物観察表中の()内数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。
- (7) 遺構覆土などの色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」によった。
- (8) 石器属性表について

(表5、6石器属性表の注をスペースの関係でここに掲載した。)

- ① 長、幅、厚はそれぞれ全長、最大幅、最大厚を測定した。折損品については()を付し、残存値を示した。石器、掘器、削器の場合は見かけの長さ、幅となる。
- ② 石鏃の場合、抉深は無茎の石鏃の柄縁りの深さ、茎長は最大幅の位置より下位の長さを測定した。前者には-、後者には+を付して示した。
- ③ 石鏃の場合最大幅の位置は、尖頭部にあるものをA、基部、脚部にあるものをBとして示した。
- ④ 石鏃の場合側縁の形態を直線上のa、凸弧のb、凹弧のc、「く」の字状に曲がるdに分けて示した。
- ⑤ 石鏃の場合折損部位は、尖頭部先端をa、図左の脚部をb、図右をc、円基部分をdとして示した。
- ⑥ 石鏃の場合、尖頭部長は尖頭部の長さ、幅は尖頭部の中間位置における幅、厚は先端部から5mmの位置で計測した。断面形もこの位置で観察したが、折損のものは折れ口で観察した。
- ⑦ 石鏃の場合の尖頭部加工は、先端部を下に向けて置いたときの右側をa、左側をb、裏面の右側をc、左側をdとし、加工のあるものに○印を付した。
- ⑧ 石鏃、掘器、削器の場合加工部位の表し方は、表面の左側をa、右側をb、裏面の左側をc、右側をd、表面の下縁をe、その背面をfとした。先端の尖るものはe、f欄に×、加工のないものは-を記した。加工の種類は 1：通常刻離 2：フルーティング様刻離 3：奥行き2mm前後の微細な刻離の3種類に分けた。縁辺の全長にわたるものについてはA、縁辺の1/3以上が加工されているものはB、1/3未満はCとした。異なる加工が一縁辺にある場合は上から順に記した。加工が素材の中央部に達する面的加工は数字を○で囲んだ。
- ⑨ 残存部位は上部をA、中央部をB、先端部をCとした。

目 次

I	調査の経緯	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の経過	1
II	遺跡の立地と環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	3
III	検出された遺構	7
1	遺構の分布	7
2	立石遺構	8
3	土坑	8
4	ピット	20
5	埋設土器	20
6	竪穴住居跡	22
7	河川跡	22
IV	出土した遺物	25
1	土器・土製品	25
2	石器・石製品	45
V	まとめと考察	60
	報告書抄録	62
	付編	巻末
	「津谷遺跡の自然科学分析」	

表

表 1	遺構観察表	24
表 2	土器計測表	43
表 3	土器底部観察表	43
表 4	土製品計測表	44
表 5	石器属性表(1)	57
表 6	石器属性表(2)	58
表 7	石器・石製品計測表	58

挿 図

第1図 遺跡位置図 …………… 2	第21図 縄文土器(7) …………… 35
第2図 調査区概要図 …………… 4	第22図 縄文土器(8) …………… 36
第3図 遺構配置図・基本層序断面図 … 5	第23図 縄文土器(9) …………… 37
第4図 S P 1697・1350・835立石遺構 S K 1180・1185土坑 …………… 10	第24図 縄文土器(10) …………… 38
第5図 S K 456土坑・S P 1154ピット S K 1210・1017土坑 …………… 11	第25図 縄文土器(11) …………… 39
第6図 S K 1035・1610土坑 S P 1478ピット …………… 12	第26図 縄文土器(12) …………… 40
第7図 S K 948・949土坑 …………… 13	第27図 土製品(1) …………… 41
第8図 S K 1075・665土坑 …………… 14	第28図 土製品(2) …………… 42
第9図 S K 1084・1483土坑 …………… 15	第29図 石鏃・石錐 …………… 47
第10図 S K 1455・1134・371土坑 …… 16	第30図 石錐・石匙 …………… 48
第11図 S K 1623土坑 …………… 17	第31図 搔器・削器 …………… 49
第12図 E U 1024・1533埋設土器 …… 19	第32図 削器 …………… 50
第13図 S T 1 竪穴住居跡 …………… 21	第33図 打製石斧・磨製石斧 黒曜石石片 アスファルト付着石片 …… 51
第14図 S G 1 河川跡 …………… 23	第34図 線刻石製品・石鏃 円盤状石製品 …………… 52
第15図 縄文土器(1) …………… 29	第35図 円盤状石製品 浮石・凹石 …………… 53
第16図 縄文土器(2) …………… 30	第36図 凹石・磨石 …………… 54
第17図 縄文土器(3) …………… 31	第37図 磨石・敲石 …………… 55
第18図 縄文土器(4) …………… 32	第38図 石皿・砥石 …………… 56
第19図 縄文土器(5) …………… 33	
第20図 縄文土器(6) …………… 34	

図 版

巻頭図版1 調査区全景

遺跡遠景

巻頭図版2 石鏡

S P 1259出土遺物

図版1 調査区全景

図版2 遺構空中写真

図版3 B区包含層調査風景

小学校見学会他

図版4 遺構検出状況・基本層序他

図版5 S P 1697土層断面他

図版6 S K 1035発掘状況他

図版7 S K 949遺物出土状況他

図版8 S K 1343土層断面他

図版9 R P 25出土状況他

図版10 E U 1024埋設土器断面他

図版11 S T 1 竪穴住居跡

図版12 S G 1 河川跡

図版13 出土遺物・土器(1)

図版14 出土遺物・土器(2)

図版15 出土遺物・土器(3)

図版16 出土遺物・土器(4)

図版17 出土遺物・土器(5)

図版18 出土遺物・土器(6)

図版19 出土遺物・土器(7)

図版20 出土遺物・土器(8)

図版21 出土遺物・土器・土製品

図版22 出土遺物・土製品

図版23 出土遺物・石器(1)

図版24 出土遺物・石器(2)

図版25 出土遺物・石器(3)

図版26 出土遺物・石器製品

図版27 出土遺物・石器(4)

図版28 出土遺物・石器・石器製品

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

津谷遺跡は昭和53年発刊の「山形県遺跡地図」に遺跡番号1099、旧石器から縄文時代前・中・後期の遺跡として登録されている。この辺りは昔から石器、土器片などが地元の人々によって数多く採集されていた地域で、遺跡の存在は古くから知られていた。その範囲は東西約100m、南北約500m、面積およそ50,000㎡にのぼると推定される。

この遺跡範囲内を通る形で主要地方道新庄戸沢線整備事業が計画された。そのため平成4年山形県教育委員会文化課（現文化財課）により試掘調査が実施され、その際、出土した石器、土器片、検出した遺構などから縄文時代後期の集落跡があることがわかった。文化財課は事業主体である山形県土木部新庄建設事務所との間で、現状保存の可能性や施工方法の検討なども含めて調整協議をおこなった。その結果やむをえず壊されると判断された2,080㎡について、同じように道路用地にかかっていた北隣の向名高遺跡とともに、図面、写真などによる記録保存を目的とした緊急調査を実施することになった。平成5年度調査の運びになっていたが、調査環境が整わず延期されていた。

その後平成7年度、向名高遺跡については文化財課の手により記録保存調査がおこなわれた。そしてこのたび津谷遺跡についても、財団法人山形県埋蔵文化財センターが主体となって調査を実施する運びとなったものである。

2 調査の経過

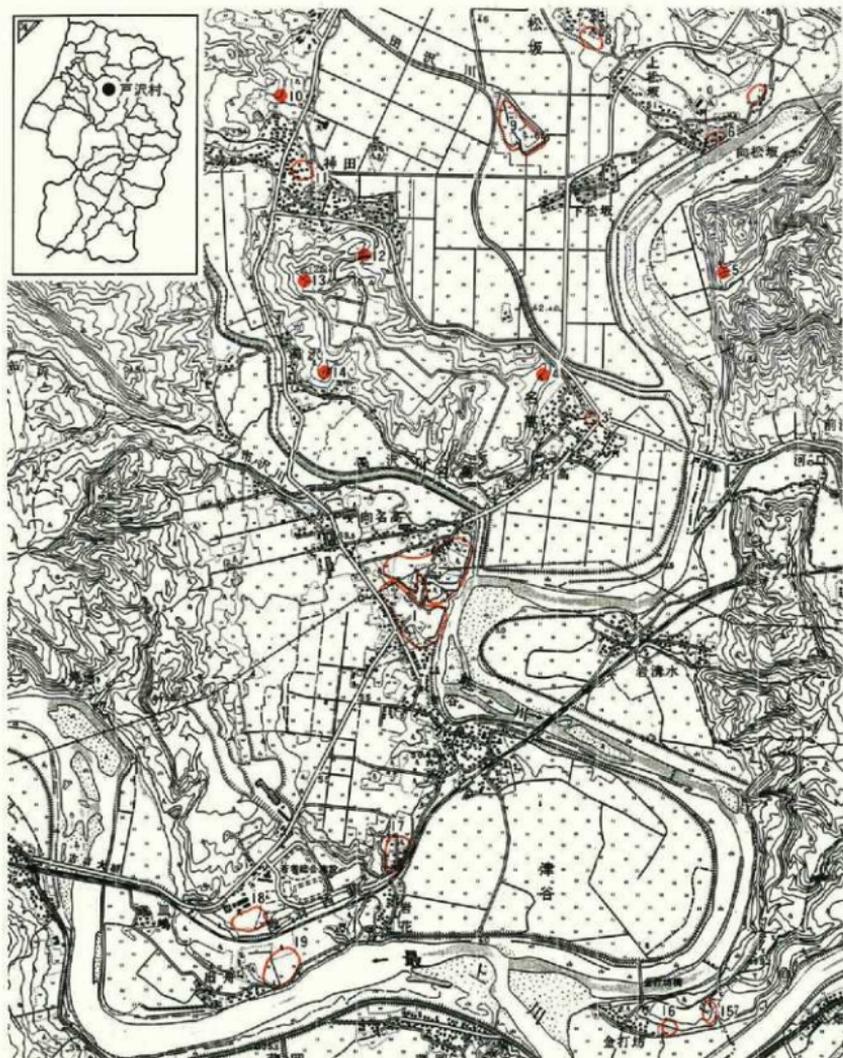
今回の発掘調査は、約50,000㎡と推定されている津谷遺跡の約4%にあたる2,080㎡について実施された。5月8日の発掘器材搬入、現地調査事務所設置後の作業は次の通りである。

- (1) 道路の計画図に基づいて調査区を設定し、環境整備の後縦横にトレンチを設定。
- (2) その断面などから覆土の堆積状況を把握し、その土を重機によって除去。B区の遺物包含層は、スコップ、移植篋等を使い手掘りにて表土除去を行う。
- (3) 出土した遺物や検出された遺構を正確に記録するため、調査区内に5m四方のグリッドを測量機器を使用して設定。
- (4) ジョレンで土の表面を削って滑らかにし、遺構を見つけやすくする。（面整理）
- (5) 整理した面から遺構や遺物を見つけだし、石灰などでマーキングする。（遺構検出）
- (6) 移植篋等を使って遺構の掘り下げと遺物の検出、取り上げを行う。（遺構精査）

場所や遺構の状況によっては(4)～(6)を何回も繰り返した。発見された遺構、遺物は図面や写真に慎重に記録し、記録保存としての客観的な資料となるよう努めた。

調査の成果を地域の住民の方々に広く知らせ、埋蔵文化財についての理解を深めていただくため、7月11日現地にて調査説明会を開催した。地元戸沢村の全面的な協力もあって、120名を超える参会者を得た。さらに小中学生を対象にした説明会を別に設け、村の全学校の子供たちに津谷遺跡を紹介することができた。

7月18日予定通り調査器材、事務所を撤収し、現地での調査を終了した。



- 1 津谷(旧石器・縄文) 2 向名高(縄文) 3 名高(縄文) 4 弥次右エ門館(中世) 5 諏訪館(中世) 6 上松坂(縄文)
 7 エビ野(縄文) 8 野呂田A(縄文) 9 里の館(縄文・中世) 10 本城館(中世) 11 神田(縄文) 12 左館(中世)
 13 大館(中世) 14 梨ノ木館(中世) 15 ドゥアン館(縄文・中世) 16 金打坊(縄文・中世) 17 岩鼻館(中世)
 18 上の山(縄文) 19 出舟(縄文・中世)

第1図 遺跡位置図(国土地理院発行 2万5千分の「古口」羽根沢温泉)を使用)

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

津谷遺跡はJR津谷駅の北方約750m、標高はおよそ53mを測る、鮭川に張り出した舌状台地に位置している。この大字津谷字鞭打野の地からは縄文時代よりさらに古い時代の石器（丈の長い優美な有舌尖頭器など）もまとめて出土しており、現在は福島県須賀川市立博物館の所蔵となっている。

戸沢村域は角川を中心とした南部地域、古口を中心とした最上川流域の中部地域、津谷を中心とした北部地域に分けられるが、そのほとんどを出羽山地の中に含んでいる。その中の数少ない平地の多い地域が、鮭川流域とその支流である濁沢川、田沢川よりなる北部地域の氾濫原と河岸段丘である。早くから耕地として開け、松坂、神田、名高、津谷等の集落が形成されてきた。

しかし津谷遺跡の存在する鞭打野河岸段丘は現川面から10～20m上の砂礫層で、取水工事などで田畑が開かれるまでは、かなりの部分が荒地、雑木林であったと考えられる。しかし水はけは良かったと考えられ、縄文のムラにとっては都合良い立地条件であったといえる。さらにすぐ近に流れる鮭川の存在は、様々な面でムラの生活を支える基盤となっていたことは、想像に難くない。

2 歴史的環境

戸沢村内には50カ所以上の登録遺跡があるが、特に縄文時代と中世に属する遺跡の数が多し。また角川地域と古口地域、それに津谷を含む北部地域に集中する傾向にある。

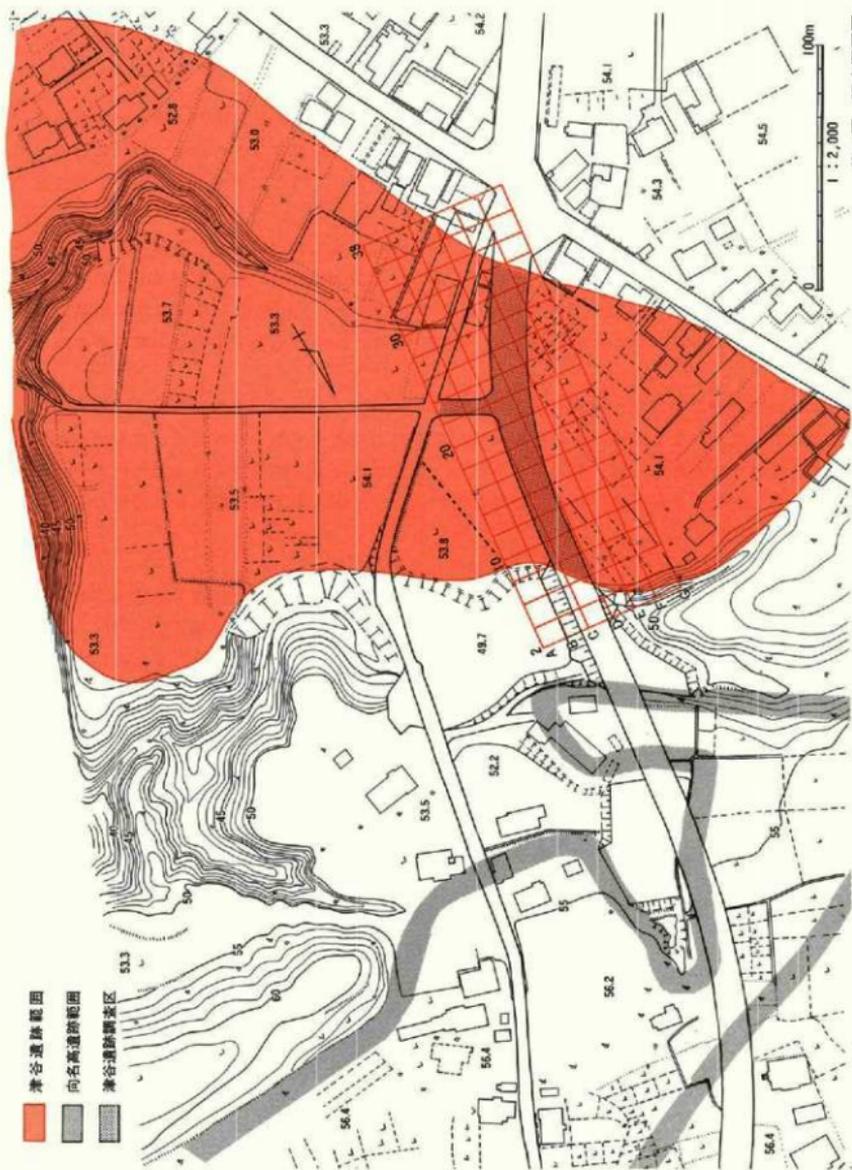
前述のとおり津谷遺跡からは、旧石器時代の終末期を画す石器である有舌尖頭器が出土している。出土地点や包含層を明らかにすべく発掘調査も行われているが、現在のところ特定には至っていない。しかしながら他の遺跡の存在と併せて考えると、この地には遙か旧石器時代から、断続的であっても集落が営まれてきた地域であると考えられる。

津谷遺跡の南、鮭川と最上川の合流点近くに、出舟遺跡がある。開田事業のため大規模に破壊されてしまったが、その際縄文時代中期の大木7b、8a式と考えられる土器片や、石器が大量に出土している。漁労に使用したと考えられる石錘も数多く出土している。さらに津谷遺跡と沢を挟んで北隣には、昭和63年に登録された向名高遺跡がある。平成7年に道路部分の発掘調査が行われ、その結果複式炉を伴った住居跡や縄文時代中期後半の大木9式に属すると考えられる土器片が出土している。

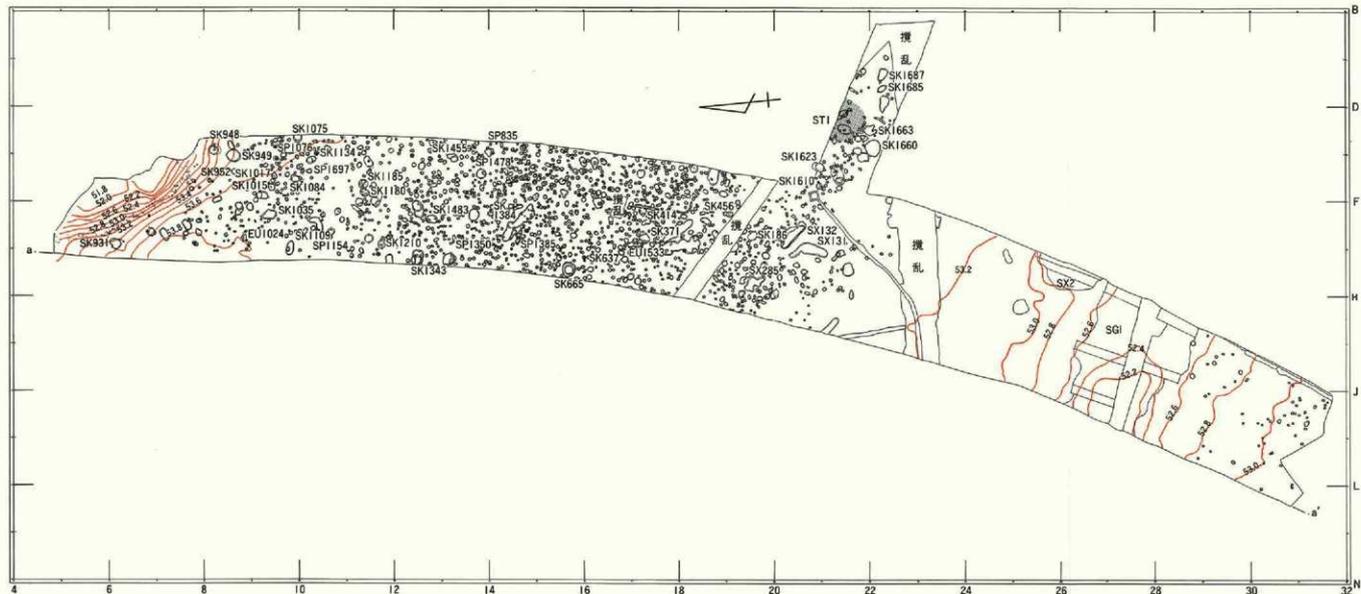
津谷遺跡よりさらに鮭川の上流右岸段丘上に野呂田A遺跡が所在し、やはり開田事業の際夥しい数の土器片、石器が出土した。前期から晩期まで続く大規模集落と考えられ、特に晩期前葉大洞B C式にあたる時期が中心になると考えられている。一方出舟遺跡の背後の段丘上、戸沢中学校の敷地付近に上の山遺跡がある。晩期終末期大洞A式ないし同A'式に分類される土器が出土する地域である。

後期については、戸沢村内ではほとんど記録がなく、今回の調査は貴重な資料となろう。

II 遺跡の立地と環境



第2図 調査概要図

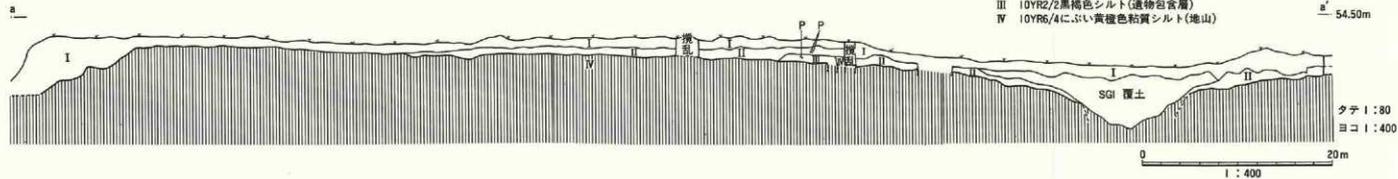


A区基本層序

- I 10YR3/1 黒褐色シルト(耕作土)
- II 10YR3/3 暗褐色粘質シルト(遺物を少量含む)
- III 10YR2/2 黒褐色シルト(遺物包官層)
- IV 10YR6/4 に近い黄褐色粘質シルト(地山)

A区 基本層序断面図

1/54.50m



第3図 遺構配置図・基本層序断面図



III 検出された遺構

1 遺構の分布

本調査区は県道の整備事業に伴う工事であったため、北から南に向かって約15m幅でやや西に傾きながら約150mのびている。そしてその中程から東に向かって幅5m長さ15m程の取り付け道路が計画されており、この部分も調査区となる。本道部分を便宜上調査A区、取り付け道路部分を調査B区と名付けた(第3図)。A、B両区をあわせた発掘面積は合計2,080㎡となる。

調査区の現況は大部分が畑でその一部はごく最近まで耕作が行われていた。南端に近い部分は住宅となっており土台や建築資材の瓦礫などが散乱していた。事前の試掘などで攪乱が確認された部分からは調査区となっていない。

調査区の層序を表すエレベーション(第3図下)によると、地山層IVは北端で大きく落ち込み、南側ではSG1河川跡によって深く抉られている。その上にB区を中心とした極めて限られた部分のみ遺物を多量に含んだ包含層IIIが残存していた。

II層は畑の基盤層と考えられる。A区中央部よりやや北側からII層内に多くの礫が含まれていたが、かなり動かされているようであり詳しい性格は不明である。下の地山層まで入っている礫は遺構として記録した。

I層は現在の表土であり大部分は畑の耕作土である。SG1河川跡より南端は宅地になっていたため表層付近はかなり攪乱されてしまっている。

遺構検出面は主としてIV層上面である。II、III層においても面整理を行ったが、遺構の検出はできなかった。検出した遺構にはすべて番号をうったが、その総計は1,600基を超えた。

北端部落ち込みは向名高遺跡との間を隔てる沢による浸食である。この浸食状態は新しいものであり、少なくとも縄文時代にあつてはこのようなはっきりした落ち込みはなかったものと考えられる。なぜなら向名高遺跡においては沢によって住居跡が半分削られており、津谷遺跡においても沢に近い土坑で同様の浸食が見られるからである。この地点においては畑地拡張のためブルドーザーによって表土が大量に押し出されて積んであつた。それとともに運ばれてきたと思われる土器片などは若干あつたものの、土器捨て場のような大量の遺物出土地点は今回は発見されなかった。

A区の中心部と北端部の間は耕作土直下が地山という状況になっており、ブルドーザーによる耕地整理の際かなり遺構面が削平されているものと思われた。中心部、特にB区とB区の付け根付近は包含層がやや残っている地域である。しかしここにも墾打野開拓事業に伴う送水管が敷設されており、そのための大きな攪乱が少なくとも2箇所確認された。

遺構の粗密は場所によって差がありA区中央部(X軸10~20の間)付近が極めて密に検出された。特にピットの数が極めて多い(第3図)。北に行くにつれて密度は低くなるが主としてピットの減少であり、相対的に土坑の比率が高くなっている。貯蔵穴と考えられる土坑SK949等は北端が落ち込み始めたあたりに位置している。一方B区の付け根付近から急激に遺構

III 検出された遺構

が減少する。河川跡SG1を越えたところにまた若干のピットが検出されるが明瞭なものではない。またA区中央部付近数カ所に不定形の落ち込み遺構が検出された。この地域の開墾時、樹木の抜根を行った跡ではないかとも考えられる。埋設土器はA区から2基検出された。

B区は東端を前述の用水管理設工事による攪乱で三角状に断ち切られている。地山層IVの上に遺物包含層IIIが広がりがかなりの量の遺物が出土した。III層のものでは遺構は検出できず除去後IV層で遺構を検出した。B区には竪穴住居跡が検出されているが平面プランは明瞭でなく、断面からの検出となった。

2 立石遺構

覆土内に立石が入っているピットを便宜上、立石遺構と呼ぶ。この立石は遺構を掘り込んだ人々が、何らかの意志を持って据えたものと考えられる。津谷遺跡では不明瞭なものも含めて10基検出された。すべてA区である。この中から特に4基を掲載した。

SP 835 (第4図・図版5)

A区中央東部グリッド14-Dで検出された遺構である。棒状の河原石がやや西よりに40度程度傾いて底部まで入っている。平面形は楕円形で大きさは長径48cm、短径28cm、検出面から底面までの深さは9cmを測る。覆土は1層で黒褐色シルト。理化学分析による覆土のリン酸含有量は、基本層序資料の分析値から算定した標準値を上回っており、遺体埋納の可能性が指摘できる。

SP 1350 (第4図・図版5)

A区北東部グリッド13-Fで検出された遺構である。酸化して脆い赤褐色砂岩がやや北寄り傾いて入っているが、底面までは12cmほど残している。平面形は楕円形で大きさは長径56cm、短径26cm、検出面から底面までの深さは22cmを測る。覆土は1層で炭混じりの黒褐色シルト。この遺構も理化学分析による覆土のリン酸含有量は、基本層序資料の分析値から算定した標準値を上回っており、遺体埋納の可能性が指摘できる。なお本遺構の立石になっていた赤褐色砂岩と同質の礫は数多く調査区内から出土している。

SP 1478 (第6図・図版6)

A区北部グリッド13-Eで検出された遺構で、SP 1701に重複している。平面形は不正円形で大きさは長径80cm、短径40cm、検出面から底面までの深さは31cmを測る。覆土は黒褐色シルトの単層である。覆土内から大きな砥石石皿兼用品(149)が出土している。149は細粒砂岩で縦長に入っているが、立石の意味として入れられたのかどうかは不明である。

SP 1697 (第4図・図版5)

A区北東部グリッド10-Eで検出された遺構である。長さ40cm幅18cm程の河原石がほぼまっすぐに底面近くまで入っている。平面形は円形で大きさは長径25cm、短径22cm、検出面から底面までの深さは28cmを測る。覆土は炭混じりの灰黄褐色粘質シルトの単層である。

3 土坑

SK 371 (第10図・図版9)

A区中央部グリッド17-Fで検出された遺構。平面形は不正方形で、大きさは長軸130cm、

短軸100cm、深さは22cmを測る。北西角でピットと重複している。覆土は4層に分かれ小礫を多く含んでいる。遺構の外辺に近い覆土内から深鉢（第19図・22）が出土した。遺構検出面からの出土で、重機などで上側面を削られた状態であった。

S K 374 （第12図）

A区中央部グリッド17-Fで検出された遺構。平面形は楕円形で、大きさは長径118cm、短径58cm、深さは30cmを測る。土坑内は段付きになっておりピットと土坑が重複しているとも考えられる。E U 1533に隣接しており覆土1、3とも理化学分析によるリン酸含有量が、基本層序資料の分析値から算定した標準値をかなり上回っている。遺体埋納の可能性が高く、特にリン酸値の高い位置は遺体の埋納位置とも考えられる。

S K 456 （第5図）

A区中央部グリッド19-Fで検出された遺構。平面形は楕円形で、大きさは長径68cm、短径60cm、深さは15cmを測る。S P 455と重複している。覆土上部に長さ40cm幅25cm厚さ10cm程の河原石が横に入っている。

S K 665 （第8図・図版8）

A区中央部グリッド15-Gで検出された遺構。平面形は円形で、大きさは長径155cm、短径138cm、深さは94cmを測る。検出面から10cmぐらいまでが一回り広くなり、そこからほぼ円筒状に落ち込み、若干フラスコ状に広がっている。底面はほぼ円で平坦である。貯蔵穴とも考えられるが覆土内に遺物、礫などはほとんど検出されていない。

S K 948 （第7図・図版7）

A区北部グリッド8-Dで検出された遺構。平面形は円形で、大きさは長径97cm、短径90cm、深さは53cmを測る。検出面から10cmぐらいからフラスコ状に広がっており、底面はほぼ平坦である。石鏃（16）が覆土4層から出土し、土器片、礫等も多く出土した。

S K 949 （第7図・図版7、9）

A区北部グリッド8-Eで検出された遺構。平面形は楕円形で、大きさは長径150cm、短径130cm、深さは48cmを測る。底面はほぼ平坦。S K 948に隣接した遺構で、同じように貯蔵穴だったのではないかと考えられる。石鏃(6)、土器（第15図1・4、第16図6・7）等の遺物が多く出土し、上層を中心に多くの礫が入っている。貯蔵穴として使われた後、意図的に廃棄され、埋められたと思われる。

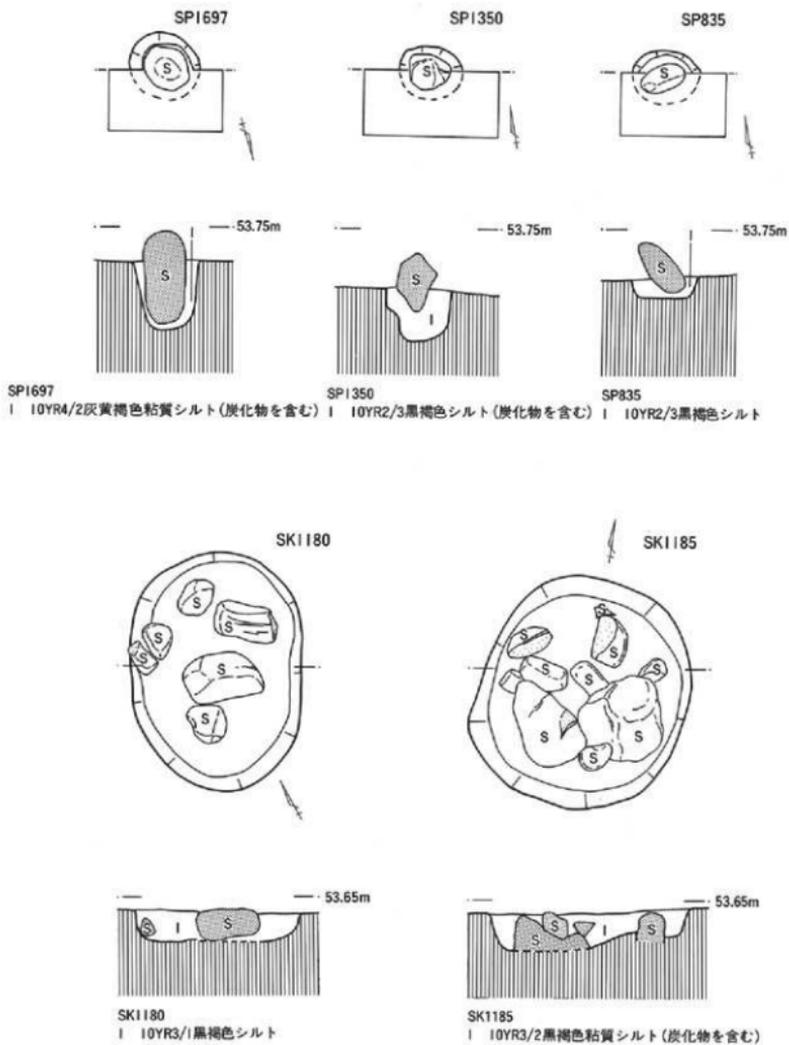
S K 969

A区北部グリッド8-Fで検出された遺構。平面形は楕円形で、大きさは長径140cm、短径74cm、深さは27cmを測る。理化学分析による覆土のリン酸含有量は、基本層序資料の分析値から算定した標準値を上回っており、遺体埋納の可能性が指摘できる。

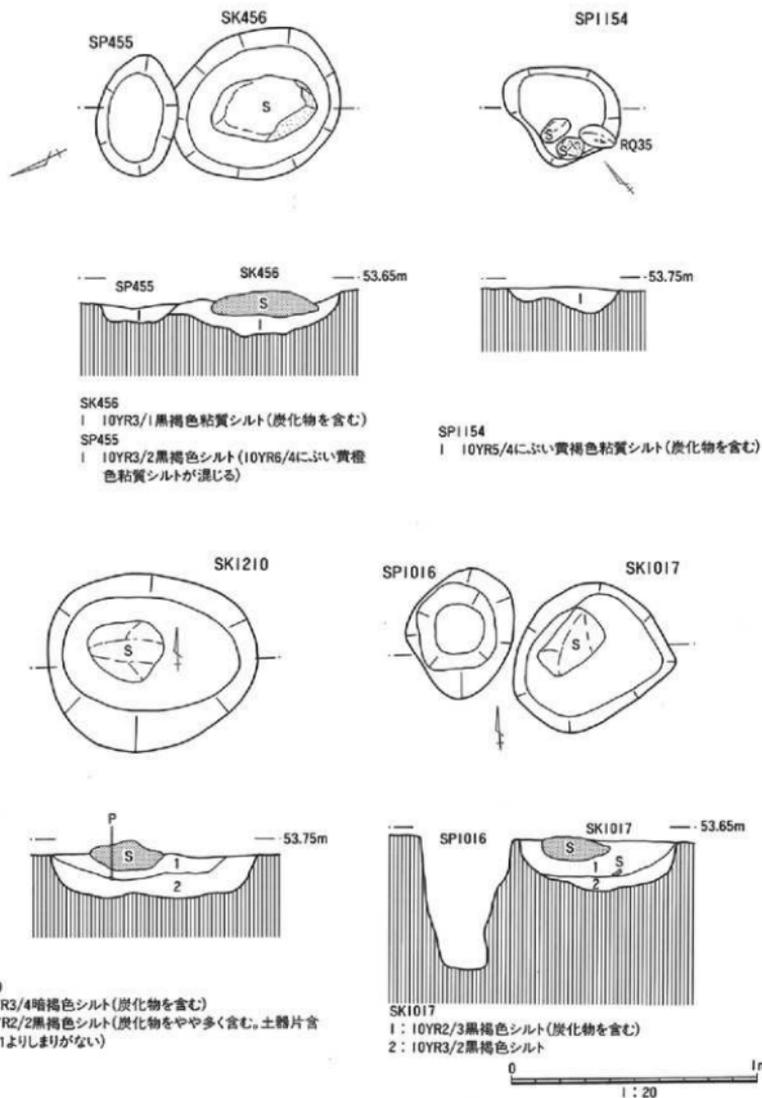
S K 1017 （第5図）

A区北部グリッド10-Fで検出された遺構。平面形は不正円形で、大きさは長径53cm、短径48cm、深さは21cmを測る。覆土1には炭化物が混じっており、自然石が入っている。覆土1、2とも理化学分析によるリン酸含有量が、基本層序資料の分析値から算定した標準値をかなり

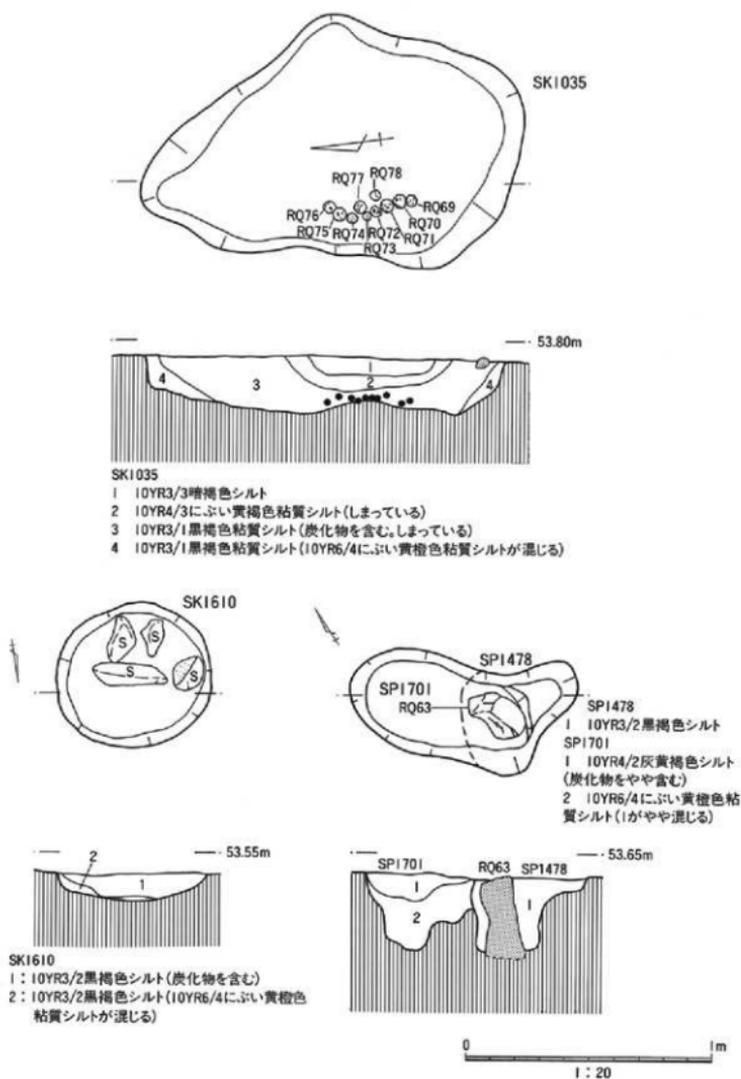
III 検出された遺構



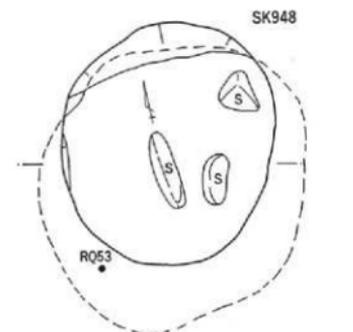
第4図 SP1697・1350・835立石遺構・SK1180・1185土坑



第5図 SK456土坑・SP1154ピット・SK1210・1017土坑

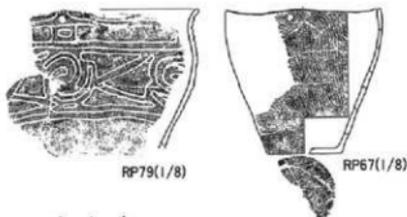
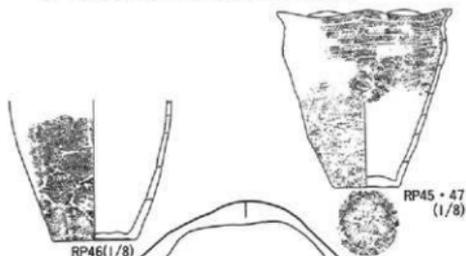
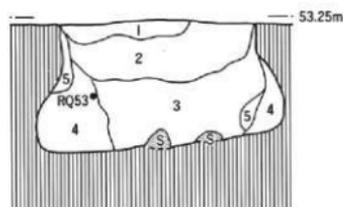


第6図 SKI035・1610土坑・SPI478ピット



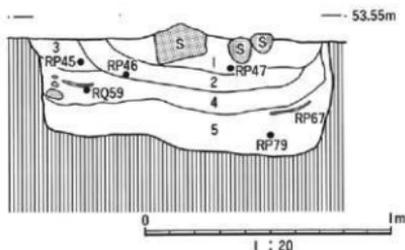
SK948

- 1 10YR3/1黒褐色シルト
- 2 10YR3/1黒褐色粘質シルト(白色微砂混じり,炭化物を含む)
- 3 10YR2/2黒褐色粘質シルト
- 4 10YR2/2黒褐色粘質シルト(10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトがブロックで混じる)
- 5 10YR6/4にふい黄褐色粘質シルト(壁の崩落土)

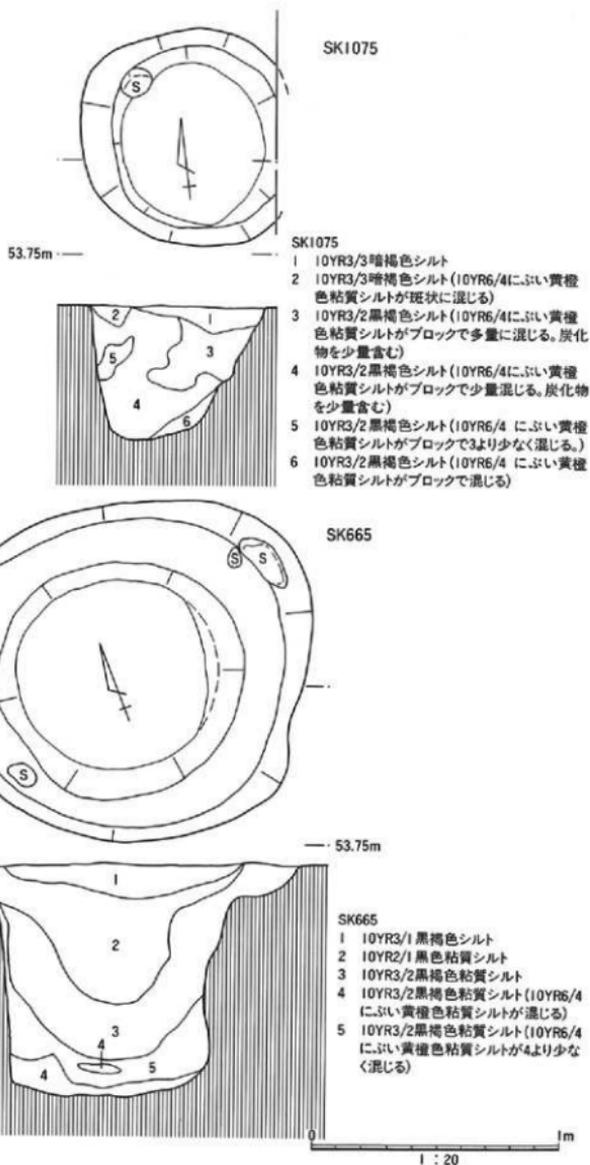


SK949

- 1 10YR3/2黒褐色粘質シルト(確混じり,炭化物を含む)
- 2 10YR4/3にふい黄褐色シルト(10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトがブロックで多く混じる)
- 3 10YR3/2黒褐色シルト(確混じり,炭化物を含む)
- 4 10YR2/3黒褐色シルト(遺物多く含む,炭化物を含む)
- 5 10YR3/2黒褐色粘質土(土器片・炭化物を含む)

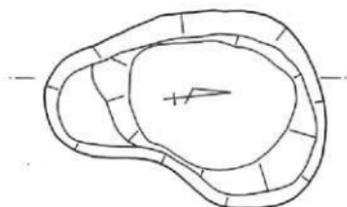


第7図 SK948・949土坑



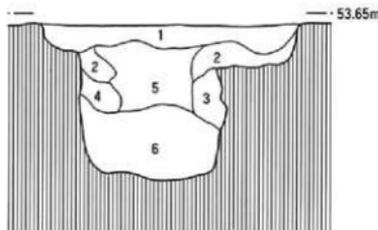
第8図 SK1075・665土坑

SK1084

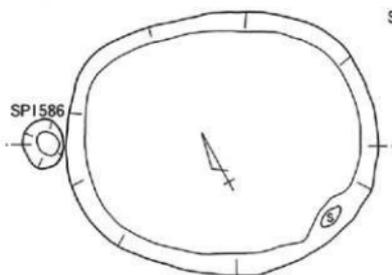


SK1084

- 1 10YR3/3暗褐色シルト(炭化物を少量含む)
- 2 10YR3/3暗褐色シルト(10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトがブロックで混じる。炭化物を含む。かた(しまっている。炭化物を含む。かた(しまっている)
- 3 10YR2/2黒褐色シルト(10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトが現状に混じる。かた(しまる)
- 4 10YR3/2黒褐色シルト(10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトが2より多くブロックで混じる。炭化物を少量含む)
- 5 10YR3/2黒褐色シルト(10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトがブロックでこく少量混じる。炭化物を少量含む)
- 6 10YR3/2黒褐色シルト(10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトがらより多くブロックで混じる。炭化物を少量含む)



SK1483



SPI586

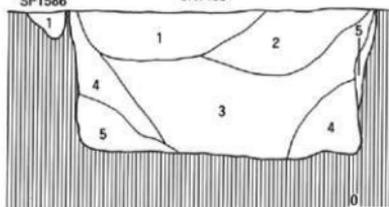
SK1483

SK1483

- 1 10YR4/2灰黄褐色シルト(炭化物をやや含む)
- 2 10YR4/3にふい黄褐色シルト(細砂混じり。炭化物を多く含む)
- 3 10YR3/2黒褐色粘質シルト(細砂混じり。炭化物をやや含む)
- 4 10YR3/2黒褐色粘質シルト(細砂混じり。炭化物を3より多く含む)
- 5 10YR3/2黒褐色粘質シルト(4に近いが、10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトがかなりの比率で混じる)

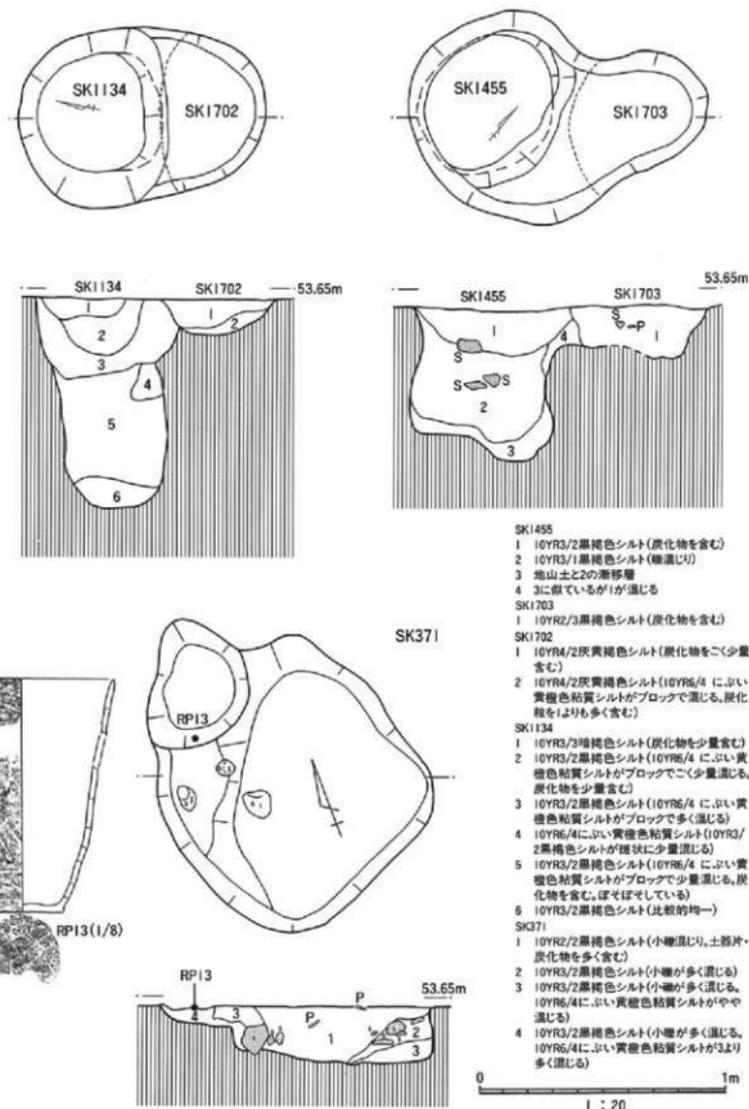
SPI586

- 1 10YR3/2黒褐色粘質シルト(3.2よりも炭化物が少ない)



1 : 20

第9図 SK1084・1483土坑



第10図 SK1455・1134・371土坑

III 検出された遺構

上回っている。遺体埋納の可能性が高く、特にリン酸値の高い覆土2は遺体の埋納位置とも考えられる。

S K 1035 (第6図・図版6)

A区北部グリッド9-Fで検出された遺構。平面形は不正方形で、大きさは長軸150cm、短軸98cm、深さは20cmを測る。覆土3からは多数の浮石(118~127)があたかも並べたように出土した(図版6)。覆土3は理化学分析によるリン酸含有量が、基本層序資料の分析値から算定した標準値を上回っている。遺体埋納の可能性が指摘できる。

S K 1075 (第8図・図版8)

A区北部グリッド9-Dで検出された遺構。平面形は円形で、大きさは長径90cm、短径76cm、深さは55cmを測る。壁面に自然石が入っていた。

S K 1084 (第9図・図版7)

A区北部グリッド9-Eで検出された遺構。平面形は略楕円形で、大きさは長径115cm、短径82cm、深さは63.5cmを測る。検出面から20cmあたりまでは広くそこから一回り小さくなり円筒状に落ち込んでいる。

S K 1109

A区北部グリッド10-Fで検出された遺構。平面形は楕円形で、大きさは長径80cm、短径48cm、深さは15cmを測る。底面から石籬(14・20)石籬(29)が出土。覆土は単層で理化学分析によるリン酸含有量が、基本層序資料の分析値から算定した標準値をやや上回っている。

S K 1134 (第10図・図版8)

A区北部グリッド10-Eで検出された遺構。平面形は楕円形で、大きさは長径100cm、短径72cm、深さは86cmを測る。S K 1702と重複している。検出面から約40cm付近よりややプラスチック状に広がっている。

S K 1180 (第4図・図版6)

A区北部グリッド11-Eで検出された遺構。平面形は楕円形で、大きさは長径96cm、短径70cm、深さは13cmを測る。底面はほぼ平坦である。小集石が入っており、大きな礫は横にした形で入っている。覆土は単層で理化学分析によるリン酸含有量が、基本層序資料の分析値から算定した標準値を上回っている。遺体埋納の可能性が指摘できる。

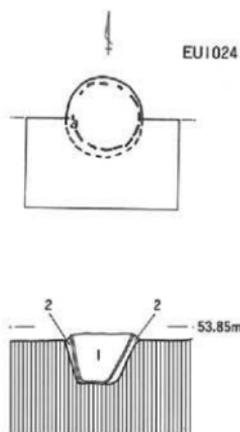
なおここでいう小集石とは、いわゆる集石が人為的に並べたものを指すのに対して、例えば盛り土上の礫が後に土坑内に落ち込んだという場合も含めるという意味で、仮に呼称したものである。

S K 1185 (第4図・図版6)

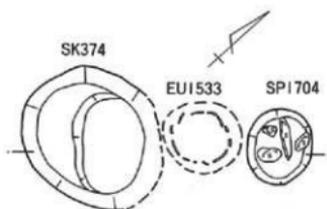
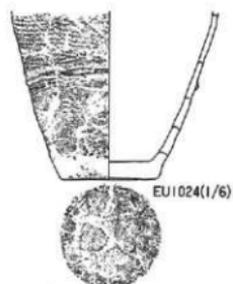
A区北部グリッド11-Eで検出された遺構。平面形は略円形で、大きさは長径95cm、短径90cm、深さは14cmを測る。小集石が入っている。

S K 1210 (第5図・図版6)

A区北部グリッド11-Fで検出された遺構。平面形は楕円形で、大きさは長径91cm、短径72cm、深さは18cmを測る。覆土上部に長さ30cm幅25cm厚さ10cm程の河原石が横位置で入っている。



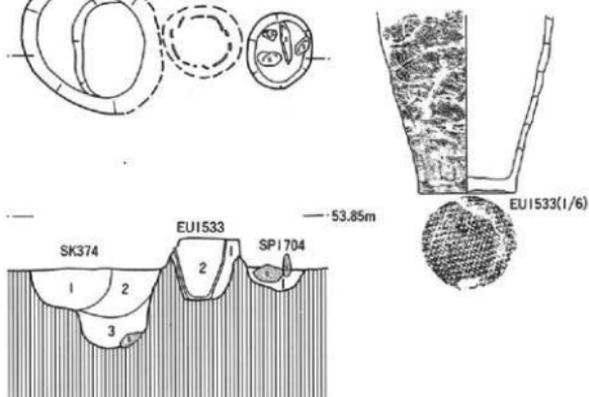
EU1024
 1 10YR2/2黒褐色シルト
 2 10YR3/4暗褐色シルト



- SK374
- 1 10YR2/3黒褐色粘質シルト(10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトがブロックで少量混じる。炭化物をやや含む)
 - 2 10YR2/3黒褐色粘質シルト(10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトがブロックで1より多く混じる。やわらかい)
 - 3 10YR2/3黒褐色粘質シルト(10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトがブロックで2より多く混じる。やわらかい)

- EU1533
- 1 10YR3/2黒褐色粘質シルト
 - 2 10YR2/2黒褐色粘質シルト(10YR6/4にふい黄褐色粘質シルトがブロックで少量混じる。炭化物を少量含む)

- SP1704
- 1 10YR2/3黒褐色粘質シルト



0 1m
 1 : 20

第12図 EU1024・1533埋設土器

III 検出された遺構

S K 1343 (図版 8)

A区北部グリッド12-Gで検出された遺構。平面形は不正円形で、大きさは長径156cm、短径120cm、深さは44cmを測る。覆土内に礫を多く含む。

S K 1455 (第10図・図版 8)

A区中央北部グリッド13-Eで検出された遺構。平面形は楕円形で、大きさは長径120cm、短径86cm、深さは61cmを測る。S K 1703と重複。検出面から20cmぐらいからプラスチック状に広がっており、礫が含まれている。

S K 1483 (第9図・図版 7)

A区中央北部グリッド13-Fで検出された遺構。平面形は楕円形で、大きさは長径130cm、短径108cm、深さは58cmを測る。底面は平坦。石錐(30)が出土している。

S K 1610 (第6図・図版 6)

B区グリッド20-Eで検出された遺構。平面形は円形で、大きさは長径63cm、短径60cm、深さは11cmを測る。小集石が入っている。ただし本遺構の場合いわゆる集石として捉えられる可能性が感じられる。

S K 1623 (第11図・図版 9)

B区グリッド21-Eで検出された遺構。平面形は略円形で、大きさは長径94cm、短径88cm、深さは15cmを測る。覆土1に炭化物の層が含まれる。深鉢(第17図・17)が礫とともに出土。

4 ビット

S P 1154 (第5図・図版 6)

A区北部グリッド10-Fで検出された遺構。平面形は不正円形で、大きさは長径64cm、短径55cm、深さは10cmを測る。小集石が入っている。

S P 1259 (図版 9)

A区北部グリッド12-Eで検出された遺構。平面形は円形で、大きさは径30cm、深さは17cmを測る。覆土内に底面まで小礫が充填している。礫が多く含まれる遺構はいくつかあったが、本遺構のように高密度で充填していた例は津谷遺跡では珍しい。小型土器(第17図・10)、小型壺(第17図・11・12)が出土している。

S P 1704 (第12図・図版10)

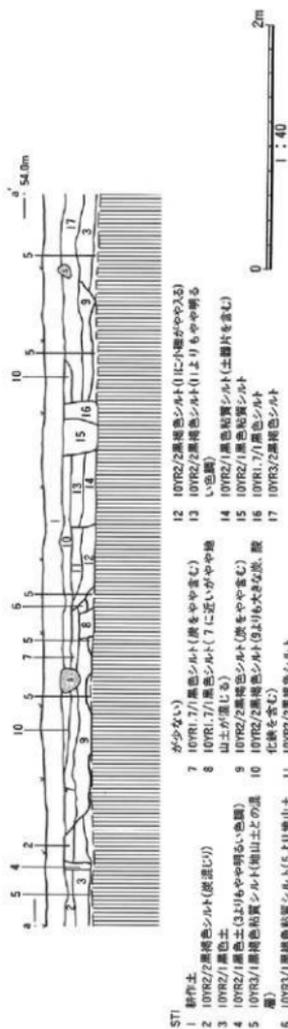
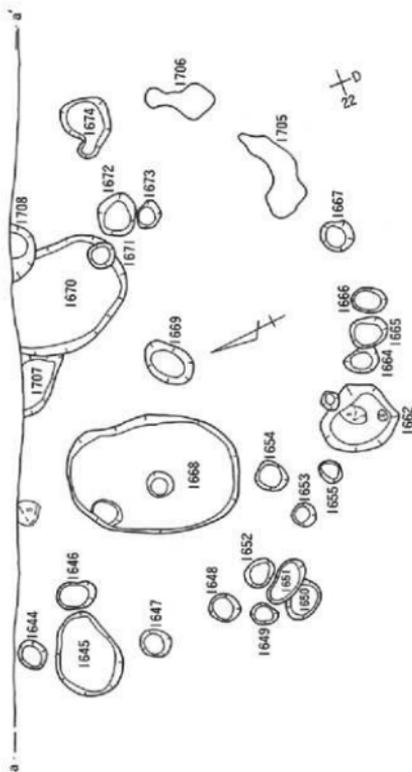
A区中央部グリッド17-Fで検出された遺構。E U 1533に隣接している。平面形は円形で、大きさは長径30cm、短径25cm、深さは10cmを測る。小集石(?)を覆土内に多く含む。

5 埋設土器

本遺跡の埋設土器はどちらも正位置で、口縁部を削られた状態で出土した。耕地整理の際の重機による破損であろうと考えられる。

E U 1024 (第12図・図版10)

A区北部グリッド8-Fで検出された遺構。検出面での平面形は円形で、大きさは径46cmである。埋設土器に対してあまり余裕のない掘り方である。土器内部の覆土は理化学分析によるリン酸含有量が、基本層序資料の分析値から算定した標準値を上回っており、遺体埋納の可能



第13図 ST1竪穴住居跡

III 検出された遺構

性が指摘できる。埋設されていた深鉢は体部下半に隆帯が巡らされているもので、縄文時代後期初頭の門前式に併行するものと考えられる。

E U 1533 (第12図・図版10)

A区中央部グリッド17-Fで検出された遺構。検出面での平面形は円形で、大きさは径20cmである。埋設土器に対してE U 1024よりは余裕のある掘り方である。土器内部の覆土は理化学分析によるリン酸含有量が、基本層序資料の分析値から算定した標準値をかなり上回っており、遺体埋納の可能性が強く指摘できる。同じくリン酸値が高かったS K 374が隣接している。埋設されていた深鉢は燃糸地文が施されたもので、縄文時代後期初頭～前葉と位置づけられよう。

6 竪穴住居跡

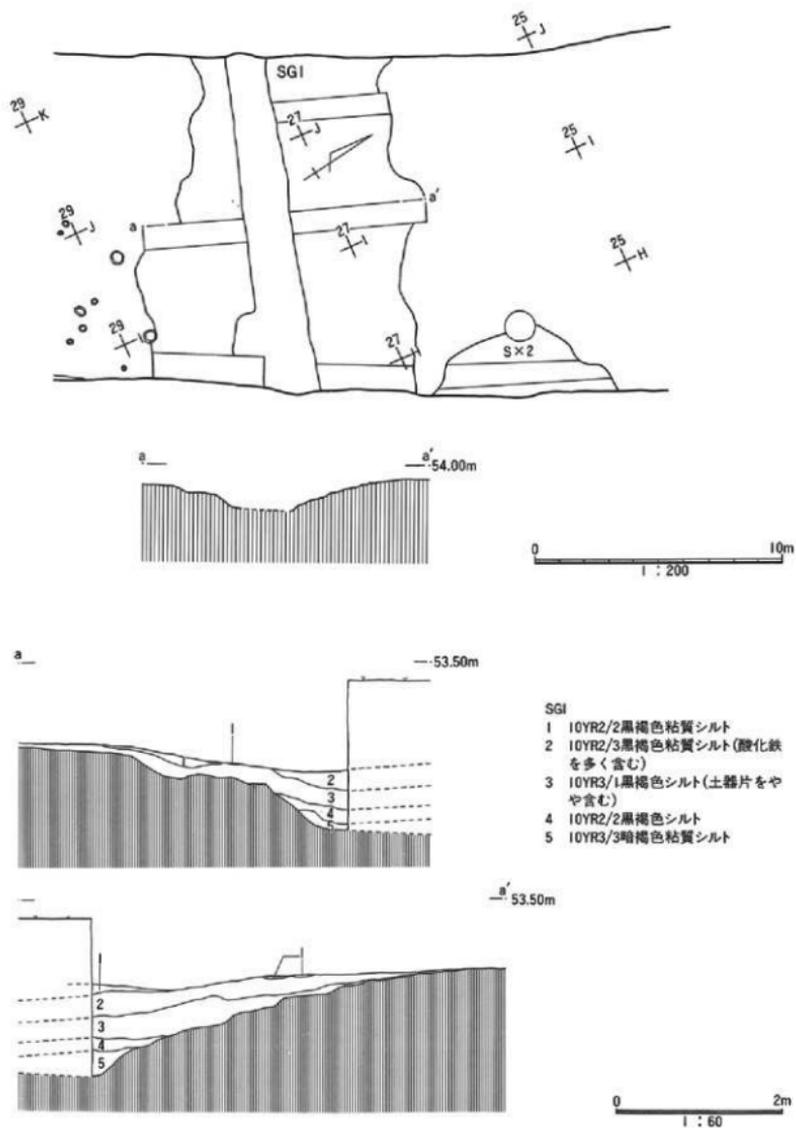
S T 1 (第13図・図版11)

B区グリッド21-Fで検出された遺構。前述の通り平面プランは検出できず、断面とピットによる検出である。土坑の重複もあり明瞭な形ではとらえにくい。S T 1の北側は調査区外に続いており調査できなかった。炉跡、床面なども明瞭でない。

7 河川跡

S G 1 (第14図・図版12)

A区南側グリッド26-J～28-Hを横切る、現在も地下水の流れる沢跡である。水は西から東に向けて流れ、やがて沢として顔を出し鮭川に落ちる。この地を整地するためごく近年人工的に埋め立てたものである。古い時期の遺物は全く出土しなかった。この河川跡付近には遺構が極めて少ない。



第14図 SG1河川跡

III 検出された遺構

表1 遺構観察表

遺構番号	種 別	検出地区	平 面 形	長軸×短軸(m)	深さ(m)	備 考	跡図	図版
ST 1	竪穴位階跡	21-F	楕円形	径230	22			13 11
SG 1	河川跡	26-J~28-H	-	-	80	14		12
SK371	土坑	17-F	不正方形	130×100	22	R P 13出土		10 9
SK374	土坑	17-F	楕円形	118×58	30	リン酸値特が高い		12
SP455	ピット	18-F	楕円形	50×35	7	SK456と重複		5
SK456	土坑	19-F	楕円形	68×60	15	覆土上部に河原石		5
SK665	フラスコ状土坑	15-G	円形	155×138	94			8 8
SP835	立石遺構	14-D	楕円形	48×28	9			4 5
SK948	フラスコ状土坑	8-D	円形	97×90	53	RQ53出土		7 7
SK949	土坑	8-E	楕円形	150×130	48	RQ59, R P 46, 47, 67, 79出土		7 7, 9
SK969	土坑	8-F	楕円形	140×74	27	リン酸値高い		
SP1016	ピット	10-F	略楕円形	54×42	54	SK1017に隣接		5
SK1017	土坑	10-F	不正円形	53×48	21	覆土上部に河原石リン酸値特が高い		5
EU1024	埋設土器	8-F	円形	径46	20	リン酸値高い		12 10
SK1035	土坑	9-F	不正方形	150×98	20	浮石多数出土リン酸値高い		6 6
SK1075	土坑	9-D	円形	90×76	55			8 8
SK1084	土坑	9-E	略楕円形	115×82	63.5			9 7
SK1109	土坑	10-F	楕円形	80×48	15	底面に石礫リン酸値高い		
SK1134	フラスコ状土坑	10-E	楕円形	100×72	86	SK1702と重複		10 8
SP1154	ピット	10-F	不正円形	64×55	10	小泉石		5 6
SK1180	土坑	11-E	楕円形	96×70	13	小泉石リン酸値高い		4 6
SK1185	土坑	11-E	略円形	96×90	14	小泉石		4 6
SK1210	土坑	11-F	楕円形	91×72	18	覆土上部に石		5 6
SP1259	ピット	12-E	円形	径30	17	小泉光満 R P 49, 50, 51出土		9
SK1343	土坑	12-G	不正円形	156×120	44	壘を多く含む		8
SP1350	立石遺構	13-F	楕円形	56×26	22	リン酸値高い		4 5
SK1455	フラスコ状土坑	13-E	楕円形	120×86	61	SK1703と重複		10 8
SP1478	立石遺構	13-E	不正円形	80×40	31	RQ63出土		6 6
SK1483	土坑	13-F	楕円形	130×108	58	RQ31出土		9 7
EU1533	埋設土器	17-F	円形	径20	25.5	リン酸値特が高い		12 10
SP1588	ピット	13-F	円形	18×14	11	SK1483に隣接		9 10
SK1610	土坑	20-E	円形	63×60	11	泉石か		6 6
SP1622	ピット	21-E	円形	27×24	12	SK1623と重複		11 9
SK1623	土坑	21-E	略円形	94×88	15	R P 25出土		11 9
SP1697	立石遺構	10-E	円形	25×22	28			4 5
SP1701	ピット	13-E	不正円形	92×40	30	SP1478と重複		6 6
SK1702	土坑	10-E	楕円形	65×45	13	SK1134と重複		10 8
SK1703	土坑	13-E	楕円形	102×55	20	SK1455と重複		10 8
SP1704	ピット	17-F	円形	30×25	10	EU1533に隣接		12 10

IV 出土した遺物

1 土器・土製品 (第15～第28図、図版13～21)

今回の調査によって出土した遺物の総数は整理箱にして64箱であるが、その内土器・土製品は38箱を数える。その大半はB区から出土したものであり、遺物がややまとまって出土した遺構としてはSK949があげられる。その他の遺構からは小片や細片が多く、全体の器形が分かるものは少ない。これらの土器を文様や施文手法等からI～VI群に大別して、以下に概述する。

第I群土器 (第18図19、第19図23、第20図28、第21図64～79)

隆帯やボタン状貼付文等によって特徴づけられる土器群である。すべて破片で器形が分かるものはない。3類に細分した。

1類：隆帯をもつものを一括した。隆帯のほとんどは口頸部に認められる。連鎖状隆帯になるもの(64)や隆帯上に刺突文を施すもの(65、66)が特徴である。23は体部から口縁にかけてゆるく内弯する器形であり、口縁は波状をなす。縦位にLR縄文が施文される。土器の体部下半に隆帯がめぐり、隆帯下は磨かれて無文となる。19も同様に体部下半に隆帯がめぐらされる。

2類：ボタン状貼付文を有するもの(28、76、77)である。76、77は磨消縄文を描く沈線の屈折部分にボタン状貼付文が施される。28は76などの文様をもつ深鉢の口縁に付される突起と考えられる。

3類：沈線区画の中に刻目文を施すもの(78、79)である。

第II群土器 (第17図13、第21図56～58、第21図80～82、第22図83～111、図版14、18、19)

比較的大柄な磨消縄文を描くものであり、沈線が、逆三角形状や倒卵形の区画を作る土器群である。第I群にみられた隆帯やボタン状貼付文は認められず、S字状沈線や円形の刺突文を有するものなど、基本的に沈線を主体として施文されるものである。地文は縄文と擦糸文の二種がある。

1類：橋状把手を有すると思われるもの(80～82)である。82の把手には円形の刺突文が施される。本群または第III群土器に含まれる土器群であろう。

2類：磨消縄文を描く沈線の末端にS字状や渦巻き状の沈線を描くもの(83～89)を一括した。86、89にはボタン状貼付文から変化したと思われる凹文が付されている。

3類：逆三角形状や倒卵形などの比較的大柄な磨消縄文を有するもの(90～101)を一括する。98は厥手状文であるが本類に含めた。

4類：沈線による文様をもつもの(13、102～111)を一括した。地文上に沈線で文様が描かれるが、沈線が多条化していない点で第III群土器とは区別される。105は一応本群に含めたが、口縁部文様帯に弧線文を描いており、第III群の118とも類似している。

第III群土器 (第17図16、17、第20図36、46、第21図52、55、56、第23図112～137、図版15、17～19)

基本的に地文上に数条の沈線によって縦位・斜位の弧線文様を描く土器群である。文様は縦位に構成されるが、中にはさらに沈線で文様を加えて、横へ連結させるものもみられる。器形

的には、屈曲して外傾する口縁部をもつ深鉢や、体部がややふくらみ、頸部から口縁部にかけてゆるく外反する深鉢が認められる。地文は縄文、燃糸文の二種があるが燃糸文がやや多い。

口縁は波状になるものと平縁のものがある。頸部には沈線が施されて口縁部が無文帯となるもの(117、124)や、口縁部文様帯と体部文様帯が連結するもの(118)、また、口縁部に縦位の短沈線列が施されるもの(36、120)、あるいは口縁部に弧状に沈線がめぐるもの(17、119)などがある。17は波状口縁をもち、口縁がゆるく外反する深鉢である。燃糸地文上に4本の沈線によって縦位に弧状の文様が描かれている。113~115には多条沈線間にS字状沈線文を簡略化したと思われる円文が細い沈線で付加されている。また131、136は沈線間に斜位に短沈線が施されているものである。16は沈線が多条化していないものの、131のように斜位の沈線により文様を連結する点が類似しているため、本類に含めた。121は壺の口縁部である。第IV群土器(第15図1~4、第16図5、8、9、第17図11、12、第18図18、第20図24~27、29、30、第21図49、50、53、54、第23図138~142、図版13、14、16、17、19)

磨削縄文手法によって、三角形や方形を基調とする幾何学的文様や曲線的な渦巻き状入組文等が描かれ、文様が横位に展開する土器群である。基本的には3本の沈線が単位となって文様が描かれる。器形は緩く外反する波状口縁をもつ深鉢が多く、文様は口縁部や体部上半に施される。SK949からは本群の土器がまとまって出土した。次の2類に細分される。

1類：平行沈線によって三角形や方形等の文様が描かれるもの(1、5、9、11、24、25、29、30、49、50、53、54)を一括する。1は波状口縁を有する深鉢である。頸部に沈線で楕円文が描かれ、沈線内は磨消される。体部上半はRL縄文が横位に施されるが、下部はミガキ調整により無文となる。5は壺の口縁部である。器形的には体部下半に最大径をもつと考えられる。頸部は沈線で区画され、沈線下には三角形の磨消縄文が描かれている。9は方形区画文をもつ壺である。器厚が他と比較して薄く、胎土も粗砂等の混入が少ない。11は口縁部を欠損するが小型の壺である。頸部には沈線を施し、体部は3本単位の沈線で方形に区画される。3本沈線の両端には竹管による刺突が施され、その刺突により、まわりに粘土粒が盛り上がる。10~12の3点は同一遺構内からの出土であった。

2類：渦巻き状入組文などの曲線的な文様を有する土器(2~4、8、12、18、26、27、138~142)を一括した。2、3は同一個体と思われる土器片であり、曲線的な入組文が描かれている。4は渦巻き状の入組文をもつ深鉢で、口縁上部にも文様帯をもつ。文様帯は沈線で楕円形に区画され、口縁の波頂下には円形の刺突や凹文が認められる。8はやや小型の体部から口縁にかけて直線的に外傾する深鉢である。文様は入組状にならないが一応、本類に含めた。12は小型の壺であり、頸部から口縁部を欠損する。体部には渦巻き状入組文が描かれる。18は波状口縁をもつ浅鉢である。波頂下に隆帯が貼付され、口縁部には楕円文が沈線で描かれている。体部には3本の沈線を単位とした、S字状に連結する渦巻き文が施される。尚、渦巻き文は波頂部に対応するものと考えられる。138は壺の口縁部である。

第V群土器(第16図6、7、第17図14、15、第18図20、第19図21、22、第20図31~34、37~43、45、47、第21図59~63、第24、25図、図版14~20)

土器の内面に格子目状の沈線をもつ土器、または地文のみの粗製土器群を一括した。地文は、縄文、捺糸文、無文の三種である。次の6類に細分される。

1類：土器の内面に沈線を有するもの（42、143～164）であり、その多くは格子目状を呈する。器厚は概して厚く、内外面の調整も粗雑である。外面に捺糸文を地文としてもつもの（143～151）と外面が無文のもの（152～155）、摩滅により不明のもの（152～164）とがある。また、外面だけでなく、内面に地文として捺糸文が施されるもの（143）もある。内面の沈線が格子目状にならず、櫛描状のもの（149、154、162）も、少ないが認められる。

2類：縄文を地文とするもの（6、7、14、21、31、165～176）を一括した。7は波状口縁を有する深鉢であり、RL縄文が横位に施文される。底部は木葉痕をもつ。21は口縁が外反する深鉢であり、口縁から頸部はナデにより無文となる。このような口縁上部に無文帯をもつ例には、167、171などがあげられる。縄文が複節のもの（174、175）もみられた。

3類：捺糸文を地文とするもの（20、38～41、45、47、177～190）である。口縁の形状として、外反し波状になるものと、直立ないしやや内傾するものがある。口唇部に刻目が施されるもの（43、180）や、口縁部を磨消して無文帯をもつもの（177～179、181、182）も認められた。18～20は深鉢の体部下半である。捺糸地文上に沈線で文様が描かれるが、文様構成が判然としないため、本群に含めておいた。底部には網代痕が見られる。また、網目状捺糸文（189）や、捺糸文が羽状に施されるもの（190）も認められる。

4類：櫛描文を地文とするもの（191～193）を一括した。縦位、斜位の方に櫛描文が施される。櫛描文が弧状を呈するもの（192）もある。

5類：表裏縄文のもの（15）を一括する。

6類：指などのナデにより地文が無文となるもの（22、37）を一括する。22は体部がやや膨らむがほぼ直線的に外傾する深鉢で、全体に指などでナデた痕跡が認められる。

第VI群土器（第26図194～199、図版20）

縄文時代後期末～晩期に帰属すると思われる土器群を一括した。194はコブ付きの蓋の頸部、195は突起をもつ深鉢の口縁部、196は三叉文を有する深鉢であり、縄文時代後期末から晩期初頭に属するものと考えられる。197は「 π 」字型の工字文をもつ深鉢の口縁部である。198も工字文を有し、大洞A～A'期に属するものと思われる。199は本群に含めたが、時期が判然としない。

以上のように津谷遺跡出土土器を第I～VI群に分類し、記述を行なったが、破片資料が多く、破片各々の器形や、文様構成までは把握しきれていない。そのため、分類にも不確実さを多分に残すものと思われるが、以上の土器群の時期的な位置付けを行なうと次のようになる。

第I群土器 縄文時代後期初頭

第II群土器 縄文時代後期初頭～前葉

第III群土器 縄文時代後期前葉

第IV群土器 縄文時代後期前葉

第V群土器 縄文時代後期初頭～前葉

第VI群土器 縄文時代後期末～晩期

第I群土器は連鎖状隆帯、ボタン状貼付文等の特徴から門前式に、第II群土器は、比較的大柄な磨消縄文や、S字状沈線文を特徴とする土器群であり、宮戸I b式に併行すると考えられる。第III群土器は多条沈線で文様が構成される土器群であり、壺ノ内1式に併行、第IV群土器は横位に展開する磨消縄文を特徴とするもので、壺ノ内1～2式、十腰内I式に併行するものと思われる。また、第V群土器は基本的に第I～IV群土器に伴う粗製土器群であるが、特に第V群I類としてあげた土器の内面に格子目状の沈線をもつ土器は周辺遺跡の調査成果から考えれば、第II～第IV群土器に伴っている。縄文時代後期前葉に大方、帰属する土器群であろう。土器の底部（第15～19図、26～200～216、図版21）

津谷遺跡で出土した縄文土器底部のうち、図示したのは17点である。底部に認められる圧痕文、調整等により大別すると以下のようになる。

200～206は網代痕を有するものである。編み方は「2本越え、2本滑り、1本送り」のもの（18～20、200、202～204）や、「3本越え、3本滑り、1本送り」のもの（201、205）が認められる。206は網代痕に分類したが、編み方が判然としない。

207～210、212、213は木葉痕を有するものである。木葉を1枚のみ使用しているものが多いが、22は笹の葉を重ねて利用している。

211、214～216は無文または摩滅などにより不明のものである。15～19図に図示した土器の底部の多くはナデやミガキ等により、無文である。214や216には線状の圧痕があるが、その内容は不明である。

土製品（第27図、第28図、図版21、21）

板状土製品（第27図1）

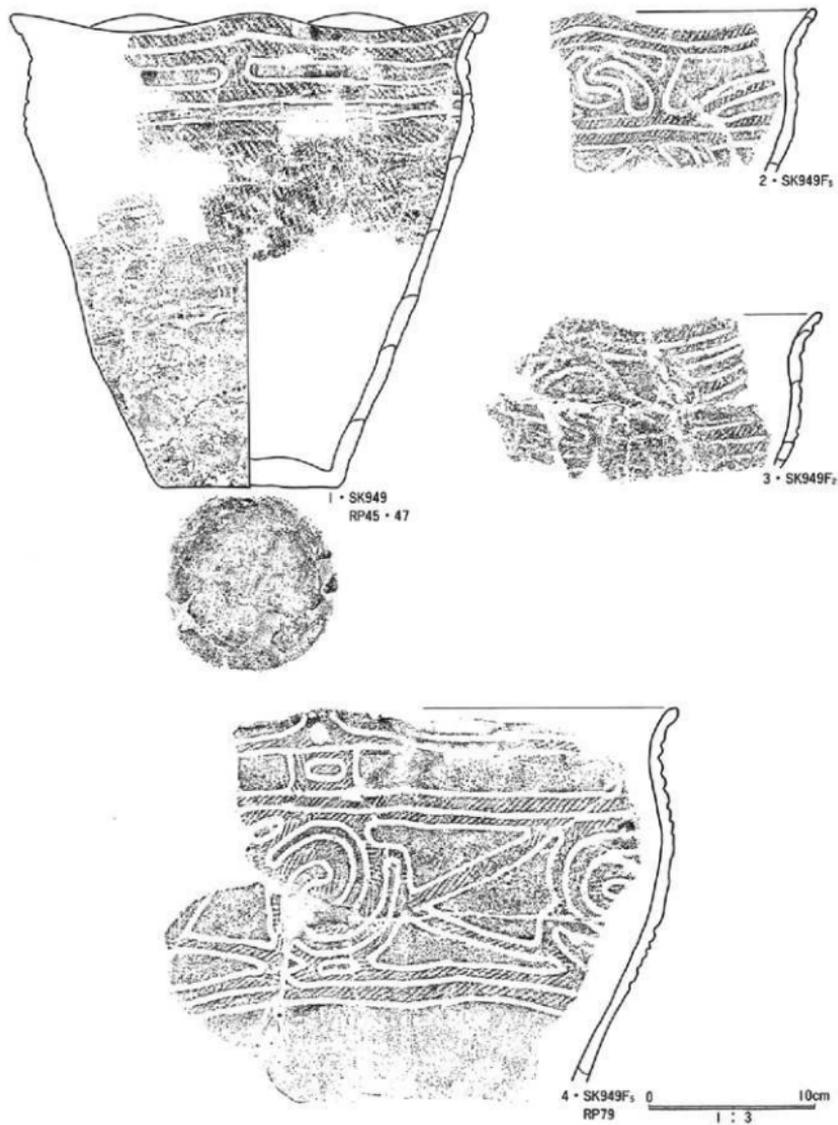
両端が欠けているため全体の形や大きさは不明である。表面は沈線で文様が描かれ、沈線間には縄文が充填される。裏面は指などによるナデで調整される。

円盤状土製品（第27図3～26、第28図27～57）

円盤状土製品は55点の出土である。土器片の周縁を敲打調整して、全体の形が作られている。大半はB区包含層からの出土であるが遺構からの出土数も少なくない。4、36、54は土器の底部を利用しているが、その他は土器の体部片を利用したものである。大きさは、長さ24mm～55mmにわたり、40mm前後のものに集中している。また重量は5.4～38.1gまでバラツキが大きい。文様は地文として捺承文をもつものが多くみられ、沈線などの文様をもつものは少ない。時期は29などの文様、津谷遺跡全体の出土土器からみて、縄文時代後期初頭から、同後期前葉に属するものと思われる。

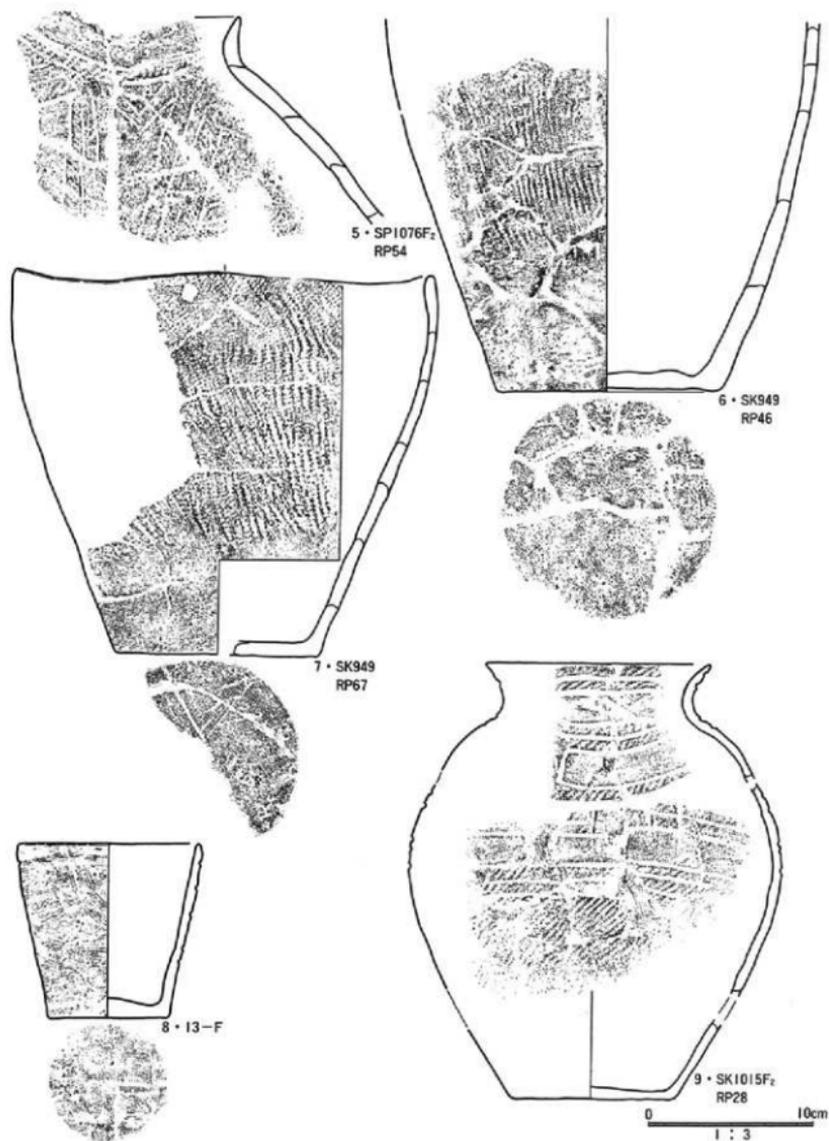
不明土製品（第27図2）

全体の形状は不明であるが、両面に竹管状の工具による円形の刺突文が施されており、土偶の体部とも考えられる。

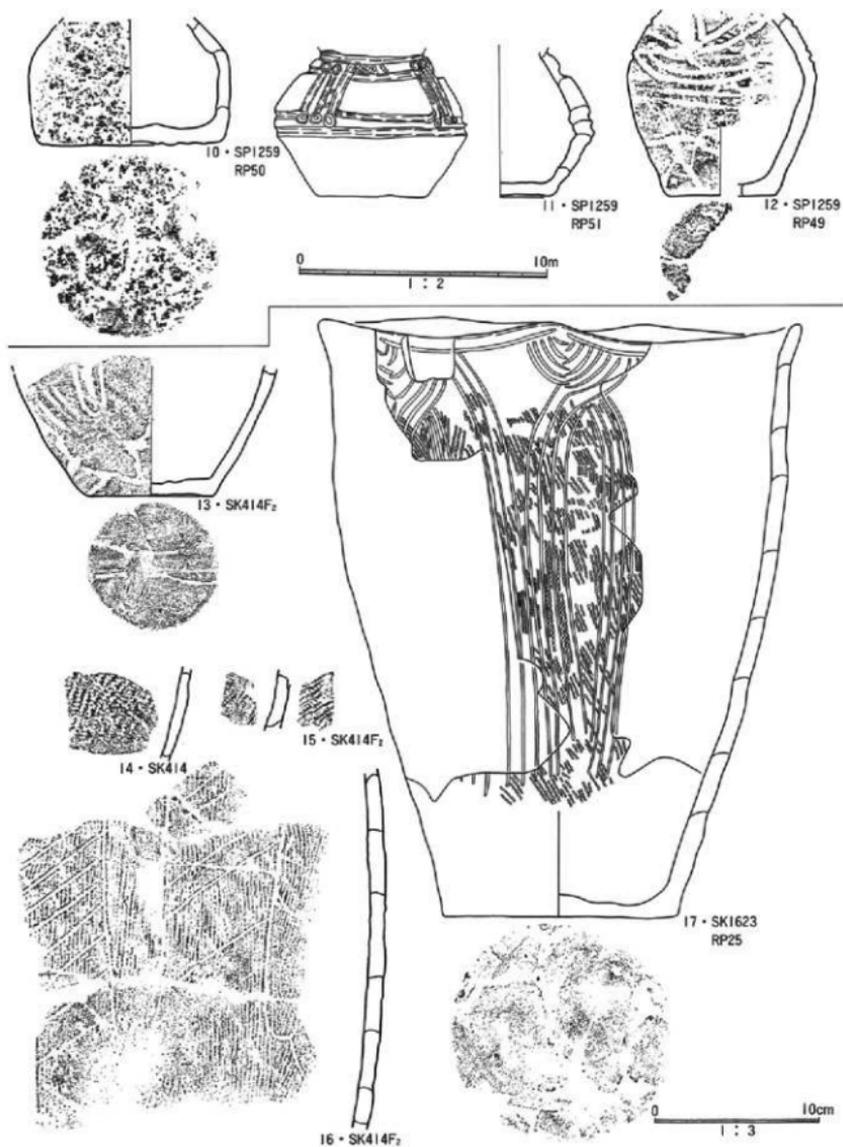


第15図 縄文土器(1)

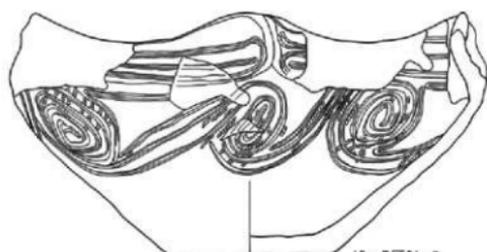
IV 出土した遺物



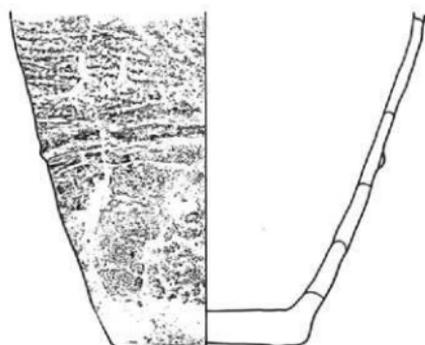
第16図 縄文土器(2)



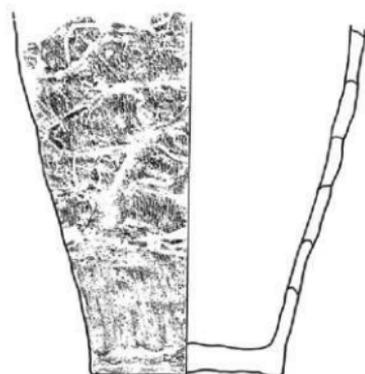
第17図 縄文土器(3)



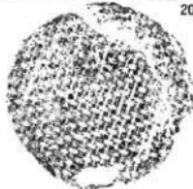
18・B区21-D
RP17



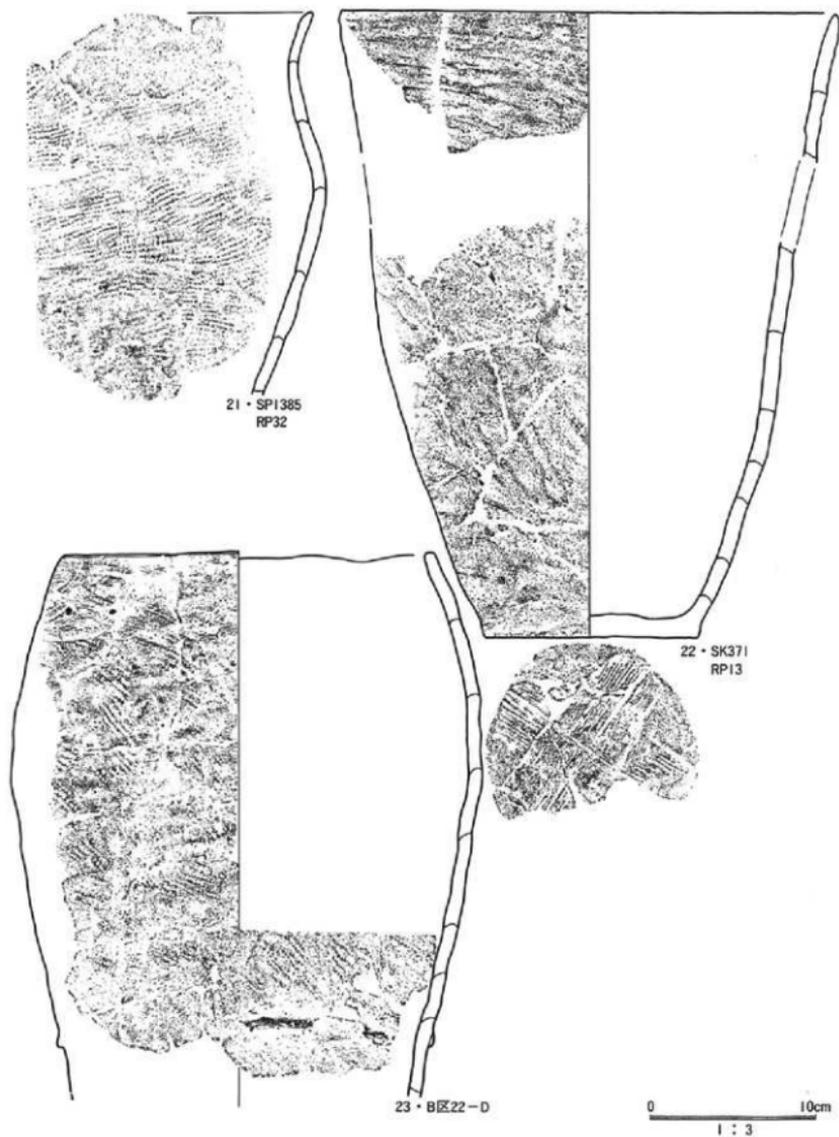
19・EU1024



20・EU1533

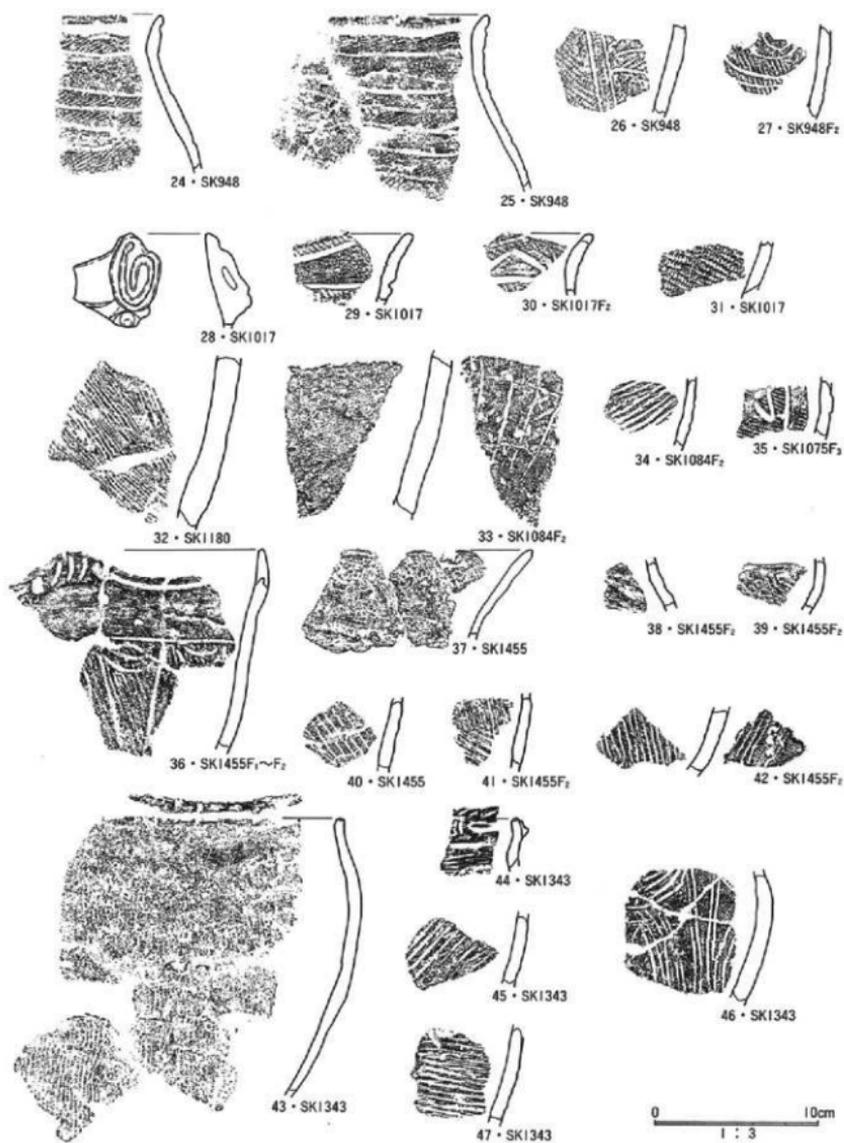


第18図 縄文土器 (4)

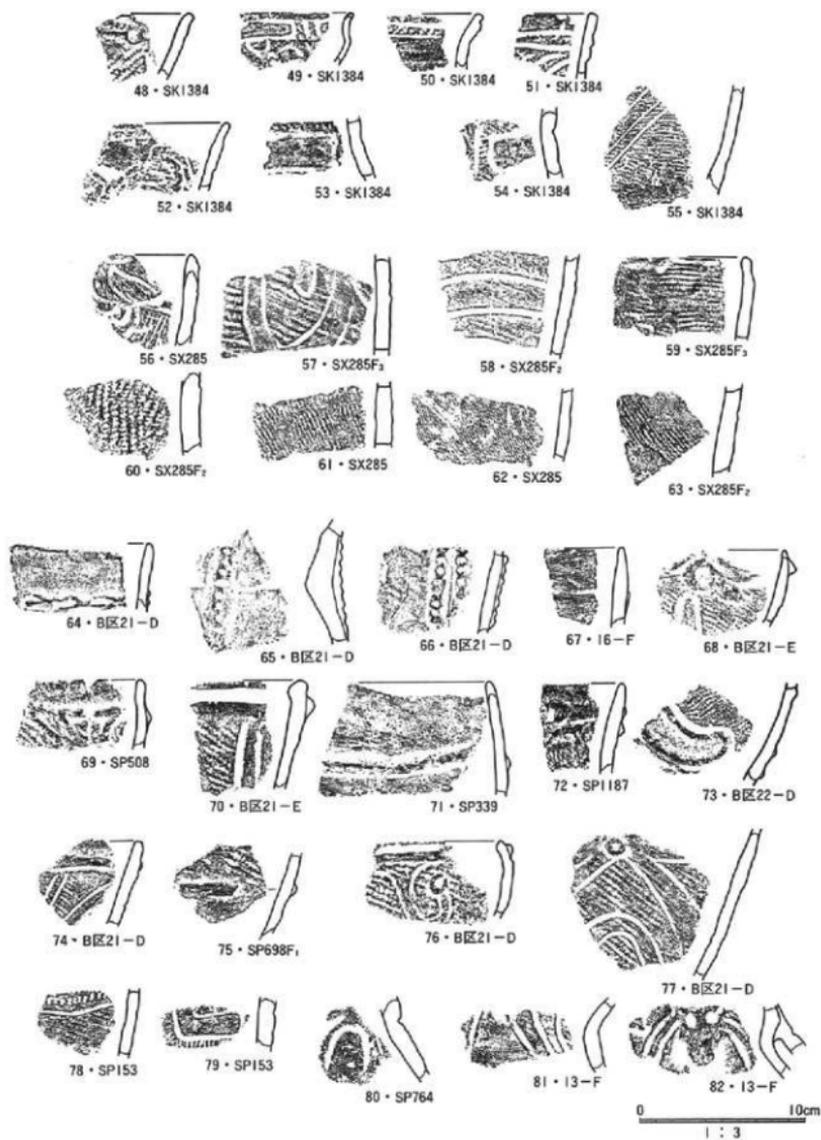


第19図 縄文土器 (5)

IV 出土した遺物

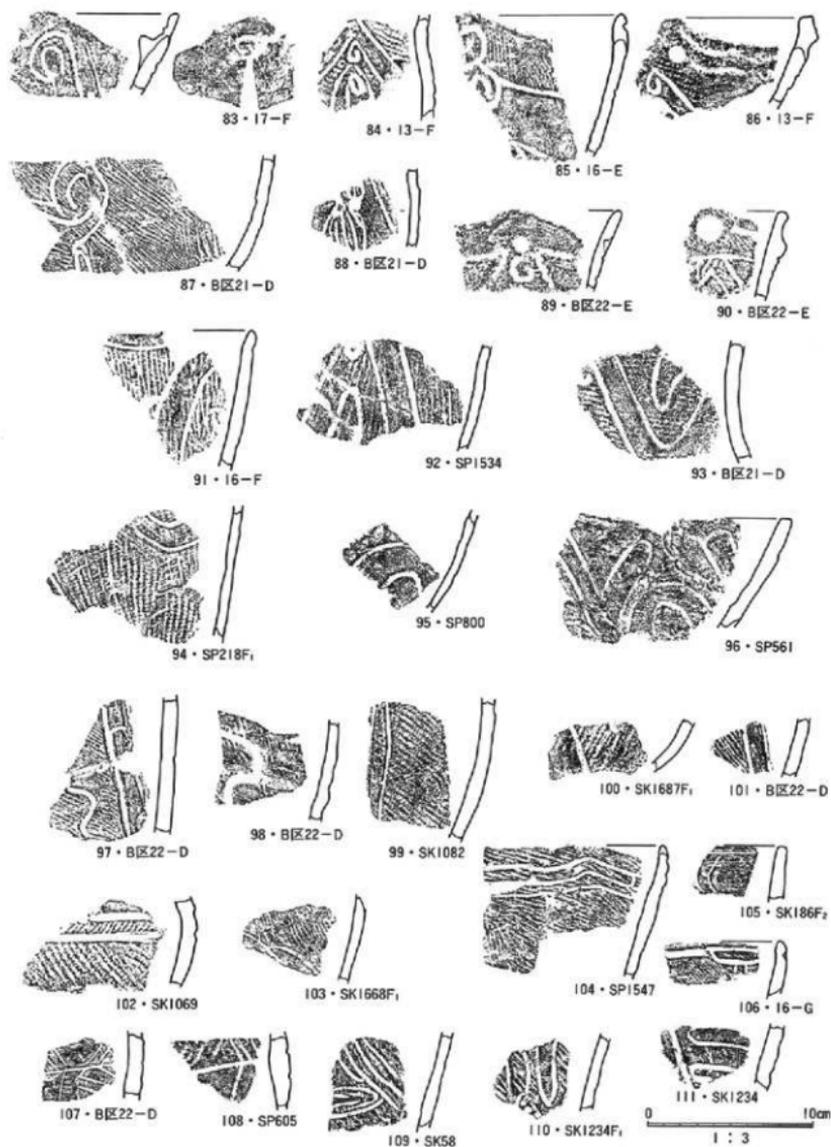


第20図 縄文土器（6）

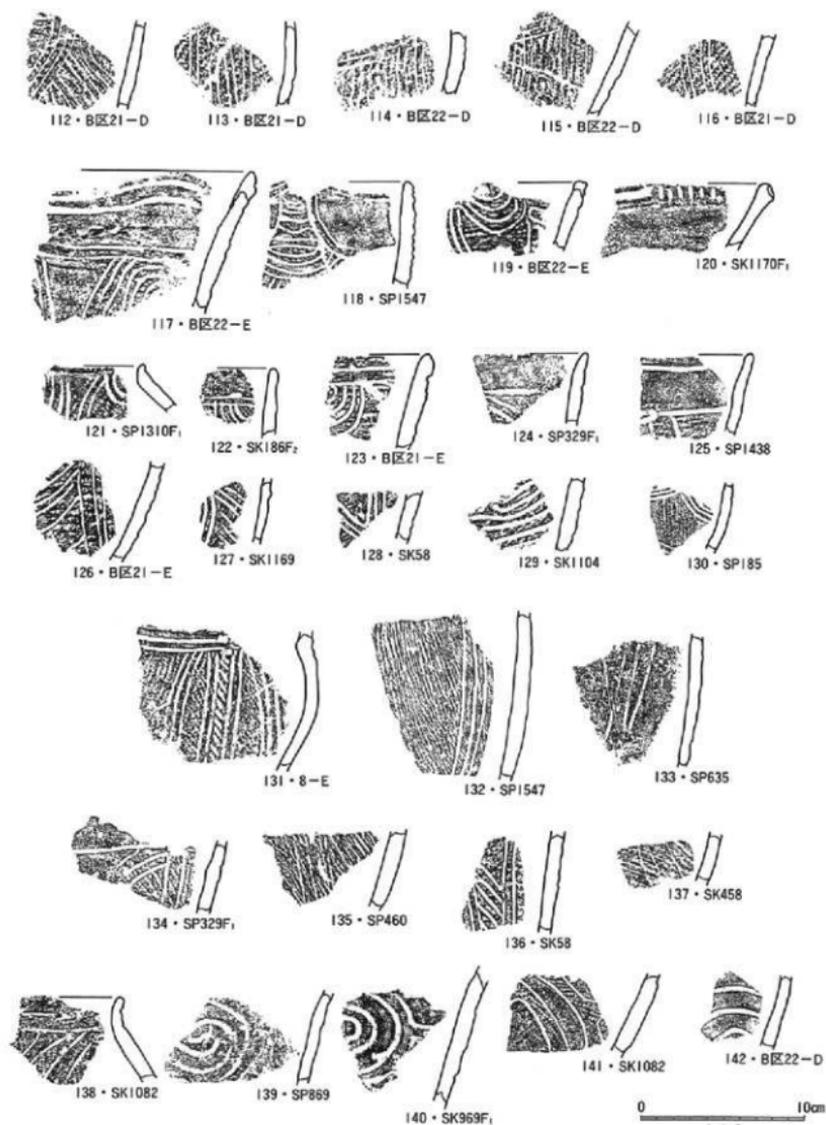


第21図 縄文土器(7)

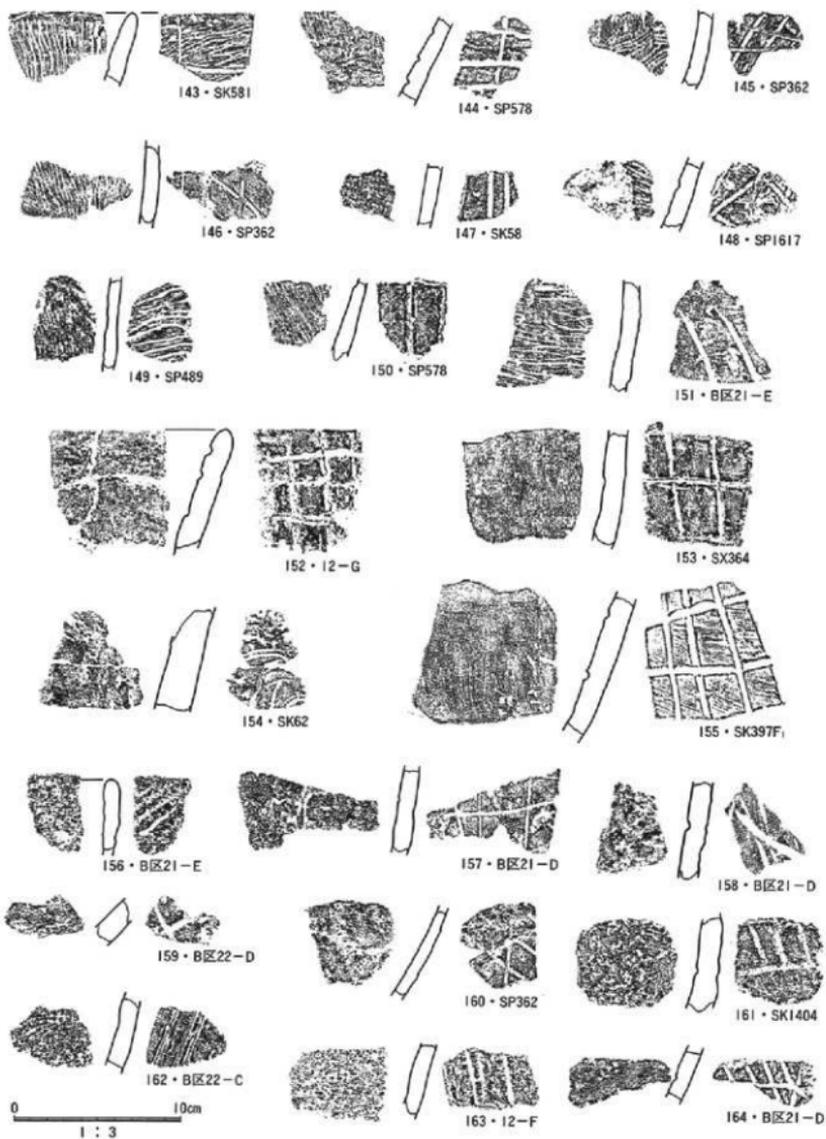
IV 出土した遺物



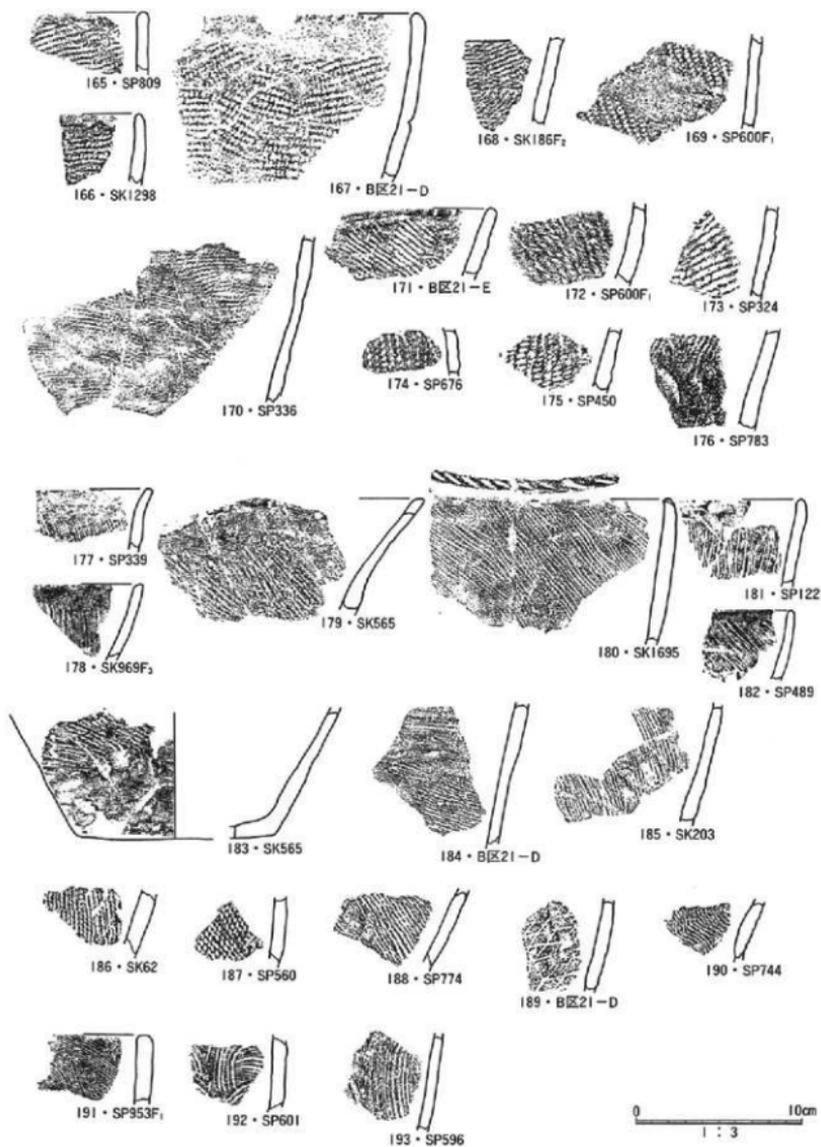
第22図 縄文土器(8)



第23図 縄文土器(9)

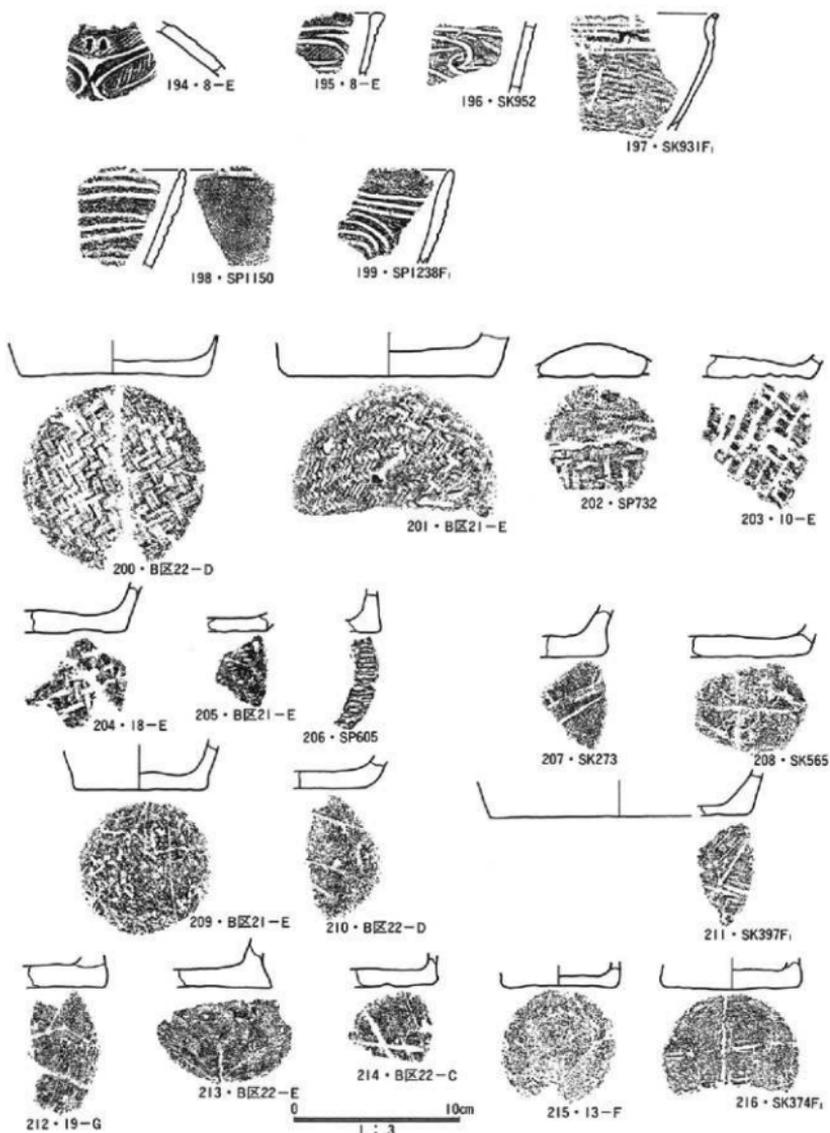


第24図 縄文土器 (10)

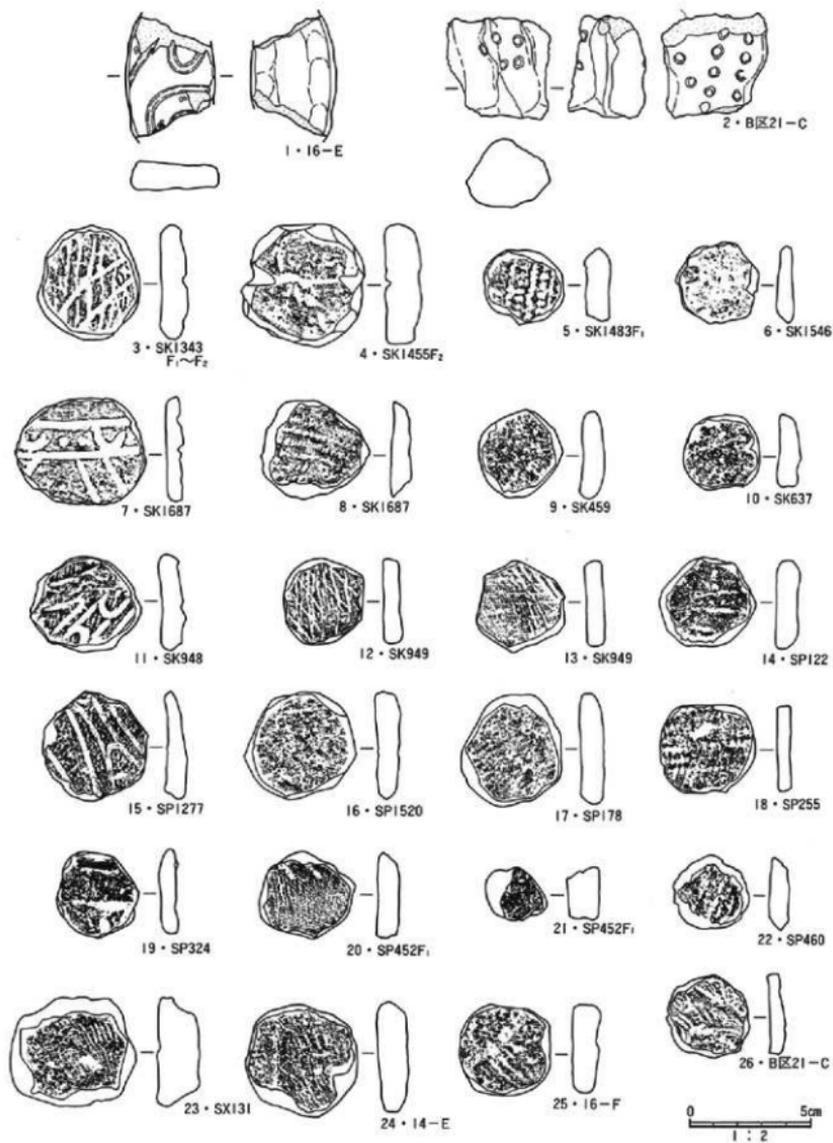


第25図 縄文土器 (11)

IV 出土した遺物

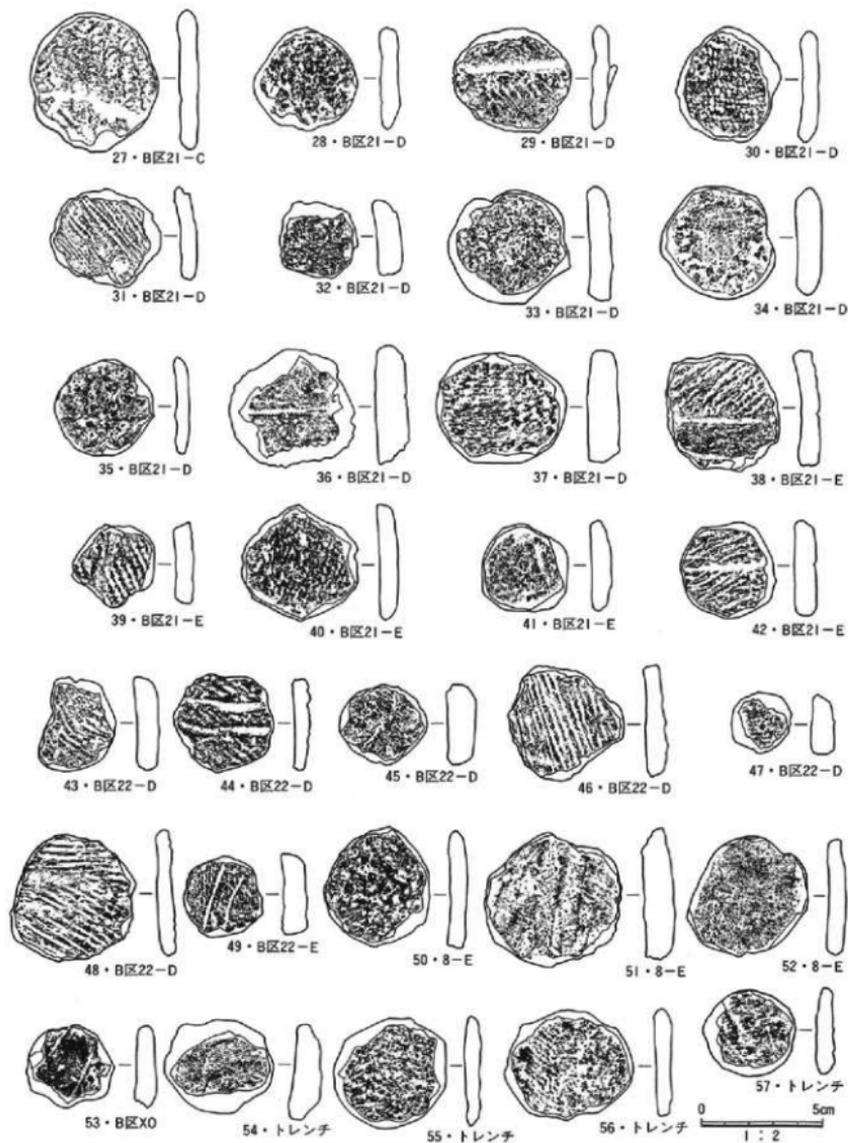


第26図 縄文土器 (12)



第27図 土製品 (1)

IV 出土した遺物



第28図 土製品(2)

表2 土器計測表

排 図	図版	器種・部位	出土地点・層位	大きさ(m/m)				分 類	備 考
				口 径	底 径	脚 高	脚 厚		
15	1	13 深鉢	S K949・F 1	(286)	110	(291)	9	IV-1	R P45・47
	2	13 深鉢・口縁部	S K949・F 5					IV-2	
	3	13 深鉢・口縁部	S K949・F 3					#	
	4	13 深鉢・体部上半	S K949					#	R P79
16	5	13 意・口縁部	S P1076・F 2					IV-1	R P54
	6	14 深鉢・体部下半	S K949・F 1		136	(223)	11	V-2	R P46
	7	14 深鉢	S K949	(251)	124	235	8	#	R P67
	8	14 深鉢	13-F	(108)	107	74	6	IV-2	
	9	14 甕	S K1015・F 2	138	97	(270)	6.5	IV-1	R P28
	10	17 小型土器	S P1259		44	(60)	7		R P51
	11	16 小型甕	S P1259		46	(74)	6	IV-1	R P49
	12	17 小型甕	S P1259		75	(50)	5	IV-2	R P50
	13	14 鉢・体部下半	S K414・F 2		78	(75)	7.5	II-4	
	14	深鉢・体部	S K414					V-2	
	15	深鉢・体部	S K414・F 2					V-5	
	16	15 深鉢・体部	S K414・F 2					III	
	17	15 深鉢	S K1623	(289)	142	365	10	III	R P25
	18	18	14 浅鉢	B区 21-D	(260)	100	147	9	IV-2
19		15 深鉢・体部下半	E U1024		118	(200)	10	I-1	下部に陰帯
20		15 深鉢・体部下半	E U1533		117	(220)	10	V-3	
21		17 深鉢・体部上半	S P1386					V-2	R P32
19	22	16 深鉢	S K371	(303)	132	(390)	10	V-6	R P13
	23	16 深鉢・体部上~下半	B区 22-D	233				I-1	下部に陰帯

表3 土器底部観察表

排 図	図版	器種・部位	出土地区・層位	分 類	備 考	
15	1	底部	S K949	無文	R P45・47	
16	6	#	#	#	R P46	
#	7	#	#	木葉痕	R P67	
#	8	#	13-F	無文		
#	9	#	S K1015・F 2	不明	R P28	
17	10	#	S P1259	#	R P50	
#	11	#	#	無文	R P51	
#	12	#	#	#	R P49	
#	13	#	S K414・F 2	#		
#	17	#	S K1623	#	R P25	
18	18	#	B区 21-D	#	R P17	
#	19	#	E U1024	#		
#	20	#	E U1533	網代痕	2本越え、2本磨り、1本送り	
19	22	#	S K371	木葉痕	甕の蓋	
25	183	#	S K565	無文		
26	21	200	B区 22-D	網代痕	2本越え、2本磨り、1本送り	
		201	B区 21-E	#	3本越え、3本磨り、1本送り	
		202	S P732	#	2本越え、2本磨り、1本送り	
		203	10-E	#	#	
		204	18-E	#	#	
		205	B区 21-E	#	3本越え、3本磨り、1本送り	
		206	S P605	#	読み方不明	
		207	#	S K273	木葉痕	
		208	#	S K565	#	
		209	#	B区 21-E	#	
		210	#	B区 22-D	#	
		211	#	S K397・F 1	無文	
		212	#	19-G	木葉痕	
		213	#	B区 22-E	#	
214	#	B区 22-C	無文			
215	#	13-F	#			
216	#	S K374・F 1	#			

表4 土製品計測表

排 回	図版	種 別	出土地点・層位	大 き さ (m/m)			重 量 (g)	備 考	
				長 さ	幅	厚 さ			
1	21	板状土製品	16-E	(49)	35	12	18.65		
2		土製品	B区 21-C	(41)	41.5	28	36.27	土偶片	
3		円盤状土製品	S K1343・F1~F2	47	40	9	17.4		
4		円盤状土製品	S K1455・F 2	49	47	13	31.9	底部	
5		円盤状土製品	S K1483・F 1	32.5	29.5	9	9.9		
6		円盤状土製品	S K1546	32	32	6	7.4		
7		円盤状土製品	S K1687	51	43	6	18.2		
8		円盤状土製品	S K1687	44	39	7	13.0		
9		円盤状土製品	S K459	35	35	9	9.7		
10		円盤状土製品	S K637	31	30	8	7.4		
11		円盤状土製品	S K946	44	39	9	13.6		
12	22	円盤状土製品	S K949	35	32	7	8.9		
13		円盤状土製品	S K949	36	35	7	8.8		
14		円盤状土製品	S P122	36	36	8	12.6		
15		円盤状土製品	S P1277	44	42	7	15.3		
16		円盤状土製品	S P1520	44.5	43.5	8	16.7		
17		円盤状土製品	S P178	45	41	9	16.2		
18		円盤状土製品	S P256	38.5	35	6	10.7		
19		円盤状土製品	S P324	34.5	33	6	7.1		
20		円盤状土製品	S P452・F I	38	36	8	9.9		
21		円盤状土製品	S P452・F I	24	21	13	4.8		
22		円盤状土製品	S P460	31	30	8	7.3		
23		円盤状土製品	S X131	51	44.5	16	38.1		
24		円盤状土製品	14-E	46	46	11	20.6		
25		円盤状土製品	16-F	38	36	11	17.0		
26		円盤状土製品	B区 21-C	33	33	5.5	6.2		
27	28	円盤状土製品	B区 21-C	57	52	8	26.9		
28		円盤状土製品	B区 21-D	42	41	7	10.9		
29		円盤状土製品	B区 21-D	48	42	9	15.3		
30		円盤状土製品	B区 21-D	47	41	7	16.1		
31		円盤状土製品	B区 21-D	44	39	6	11.5		
32		円盤状土製品	B区 21-D	31	31	10	10.1		
33		円盤状土製品	B区 21-D	47	46	9	18.9		
34		円盤状土製品	B区 21-D	45	46	10	20.2		
35		円盤状土製品	B区 21-D	40	39	5	8.2		
36		円盤状土製品	B区 21-D	50	47	12	31.6	底部	
37		円盤状土製品	B区 21-D	53	46	12	32.6		
38		円盤状土製品	B区 21-E	47	45	7	20.2		
39		円盤状土製品	B区 21-E	34	33	8	9.0		
40		円盤状土製品	B区 21-E	48	47	8	17.2		
41		円盤状土製品	B区 21-E	36	35	8	10.8		
42		22	円盤状土製品	B区 21-E	39	38.5	8	14.7	
43			円盤状土製品	B区 22-D	38	(28)	9	10.6	
44			円盤状土製品	B区 22-D	40	38	6	9.9	
45			円盤状土製品	B区 22-D	35	33	11	12.1	
46			円盤状土製品	B区 22-D	46	46	8	16.0	
47			円盤状土製品	B区 22-D	25	24	9	5.5	
48			円盤状土製品	B区 22-D	51	47	6	18.9	
49			円盤状土製品	B区 22-E	32	31	9	9.0	
50			円盤状土製品	8-E	48	42	7	14.6	
51			円盤状土製品	8-E	55	54	12	31.2	
52			円盤状土製品	8-E	48	46	7	17.0	
53			円盤状土製品	B区 X O	35	33	7	9.0	
54			円盤状土製品	トレンヂ	44	38.5	11	18.8	底部
55			円盤状土製品	トレンヂ	45	44	6	15.4	
56	円盤状土製品		トレンヂ	52	45	6	16.0		
57	円盤状土製品	トレンヂ	38	35	6	8.0			

2 石器・石製品

石鏃 (第29図1~24・巻頭図版2・図版23)

石鏃は24点出土した。使用石材は頁岩 (1・2・4・8・9・11・13・16・18・19・20・23)、鉄石英 (3・5・10・12・17)、黒耀石 (6・22・24)、玉髓質 (7・14)、蛋白石 (15)、碧玉質 (21) と多様である。中には蛋白石のように硬度的に不向きと思われようなものもあり、実用性以外に色や材質そのものに価値や意味があったのではないかと考えられる。22・24の黒耀石は濁りがあり、月山付近産出とも考えられるが、6は透明感があり質のよいもので交易品と思われる。24は1点のみ他と異なる加工の仕方、石材が黒耀石であることも含めて、秋田県八木遺跡で指摘された嘴状石器とも考えられる。基部の形態等により次のように分類した。

I類は茎がなく基部側に挟り込みの入るもの。細分するとa:丸みを帯びた挟り込みのもの (1・4)、b:半円形の浅い挟り込みのもの (5)、c:V字状の挟り込みのもの (2・3) に分けられる。

II類は基部側が直線上のもの。(23)

III類は基部に茎を持つもの。細分するとa:基部に挟り込みのあるもの (9・10・11・16)、b:基部が直線的なもの (6・7・8・12・13・14・15・17)、c:基部が突出するもの (18・19・20) に分けられる。

IV類は基部の作り出しが不明瞭で全体が菱形になるもの (21)。

V類は特殊な形態になるもの (24)。

VI類は折損して形態が不明のもの (22)。

石鏃 (第29図25~32・第30図33~36・図版23)

素材剥片の縁辺に調整加工を施して、その一端あるいは相対した両端に尖った先端部を作出した石器を石鏃とし、12点の出土をみた。石材は玉髓質 (27)、鉄石英 (29)、石英安山岩 (36) が各1点ずつ、他はすべて頁岩である。10・11は頁岩系統であるが珪酸分が低い。形態の特徴によって以下のように分類される。

I類は長い尖頭部を持つもの。細分するとa:平面形が左右対称になるもの (26・29) と、b:基部の片側が張り出して左右非対称になるもの (25・27・28・30・31・32・33) に分けられる。

II類は細長い棒状の形態になるもの。(34・35・36)

石匙 (第30図37~47・図版24)

相対する二つのノッチを入れることによって作出されたつまみを持つ石器を石匙とした。11点出土している。石材は1点 (44) 石英安山岩製のものがあるが、それ以外はすべて頁岩である。つまみと刃部の位置関係によって以下のように分類した。

I類はつまみを上方に置いたとき、縁側が刃部となる縦形のもので、さらに細分してa:尖った先端部を持つもの (37・38・45)、b:先端部にも加工があって刃部となり得るもの (41・42・47)、c:折損のため不明のもの (39・46) に分けられる。

II類は縦型ではあるが幅広い形態になるもの (40・43・44)。

播器 (第31図48・49・図版24)

主として縦長剥片の長軸端に急角度の調整加工によって刃部を作出した石器を播器とした。この範疇に当てはまる石器は2点のみで、材質は2点とも頁岩系であるが48は珪酸分がかなり低く分類上は泥岩とした。

削器 (第31図50～60・第32図61～74・図版24・25)

剥片の縁辺に連続的に調整加工を施して、刃部を作出した石器を削器とした。素材の形を大きく変えることがないため不定形である。石材は鉄石英が1点(64)。他は全て頁岩製である。68は使用による刃部の摩滅が明瞭に見られる。形態、刃部の作出方法と位置関係で分類した。

I類は打面を上にして置いた場合、その両側縁に調整加工を施し刃部を作出したもの(56・58・59・65・68)。

II類は両側縁から先端に調整加工を施し、先端部が尖った形態となるもの。(53・54・57・60・62・67・72・74)

III類は先端部が幅広になり、この部分にも調整加工が施されるもの。細分するとa:片面からのみの加工のもの(51・52・69・73)と、b:両面から加工が施されているもの(50・64)に分けられる。

IV類は一縁辺のみに調整加工が施されるもの。(55・61・66・70・71)

打製石斧 (第33図75・76・78・図版25)

扁平な礫を素材にして加工を施し、その長軸の一端に刃部を作出した石器を打製石斧とした。3点の出土で75は頁岩、76、78は細粒砂岩製である。76は作成途中とも考えられ、78は部分的に研磨加工が施されている。

磨製石斧 (第33図79～85・図版27)

磨製石斧は破片も含めて9点が出土しており、うち7点を掲載した。いずれも小型のものであるが、以前に調査区付近の道路工事が行われた際には、かなり大型の磨製石斧も採集されている。完形に近いものは1点(81)のみで、刃部資料が3点(80・84・85)、基部資料が3点(79・82・83)となっている。着柄部から刃部に至る中間部付近からの破損が目立つ。84は破損部分を再生加工した痕跡が見られる。両側縁を面取りする定角式磨製石斧の範疇に入るものが多いが、79は乳棒状石斧と考えられる。石材は石英安山岩、緑泥片岩等が見られる。

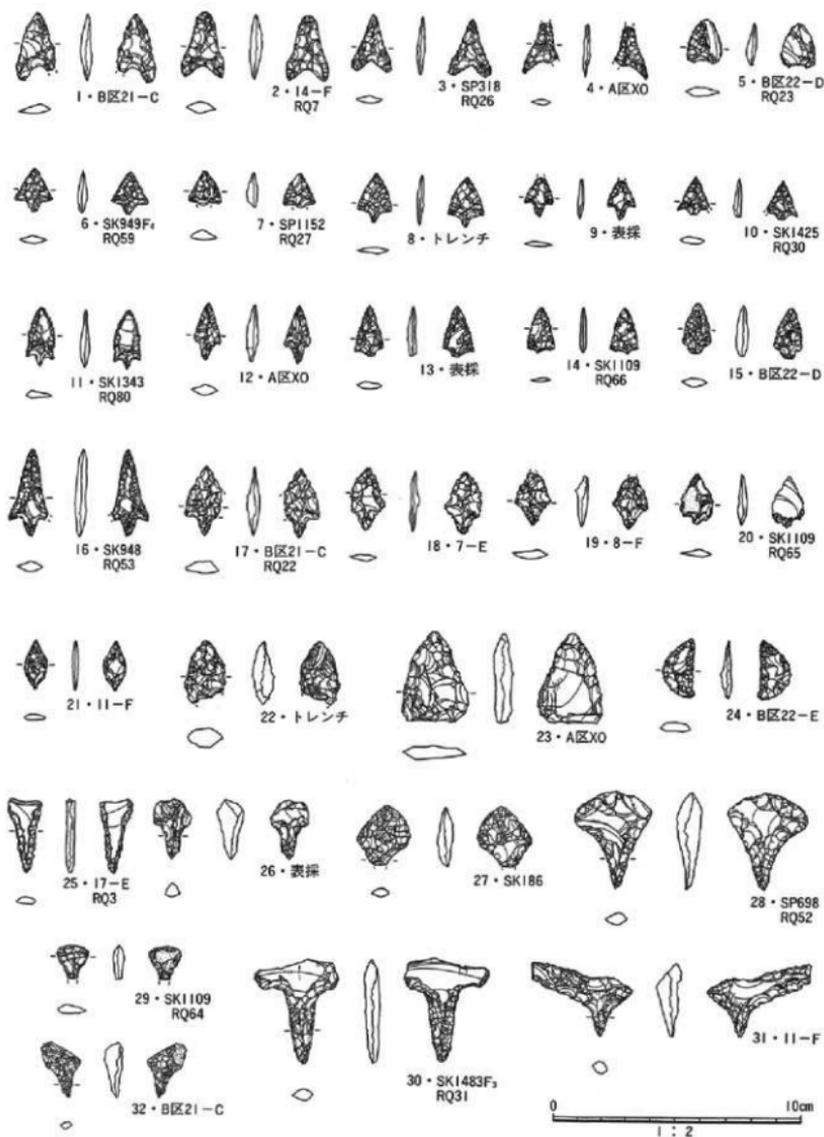
石錘 (第34図92～100・図版27)

扁平な円礫の相対する両端に打ち欠きをおこなって、挟り込みを入れた石器を石錘とした。津谷遺跡では9点の出土を見ている。いずれも礫の長軸側の上端、下端に挟り込みを入れている。同じ村内の出舟遺跡からも大量に出土しているもので、鮭川における漁労活動で使用する網の錘として使われたものと考えられる。

形態的に側面形が楕円形のもの(93・94・95・96・97・100)、上下に長いもの(92・99)、さらに極端で棒状といえるもの(98)に分けられる。

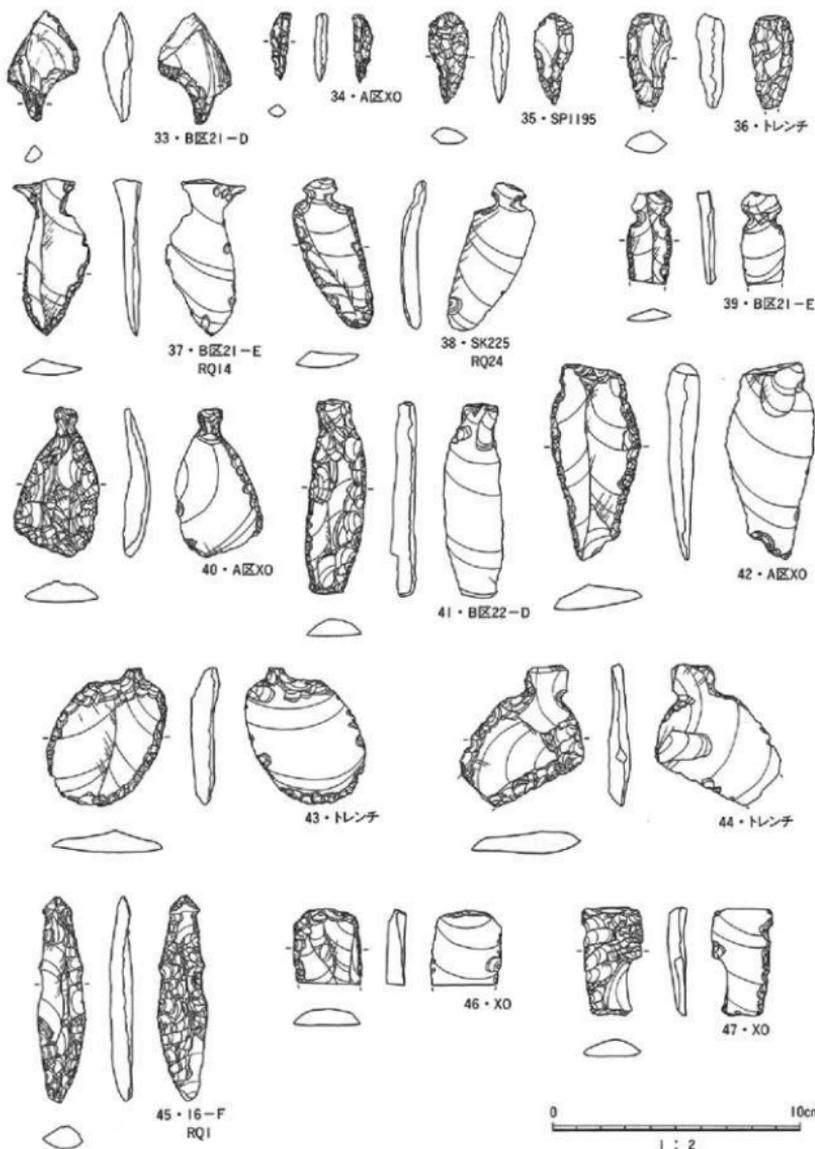
円盤状石製品 (第34図101～107・第35図108～117・図版26)

主として扁平な礫を素材とし、その縁辺全周にわたり急角度の調整加工を施している遺物を

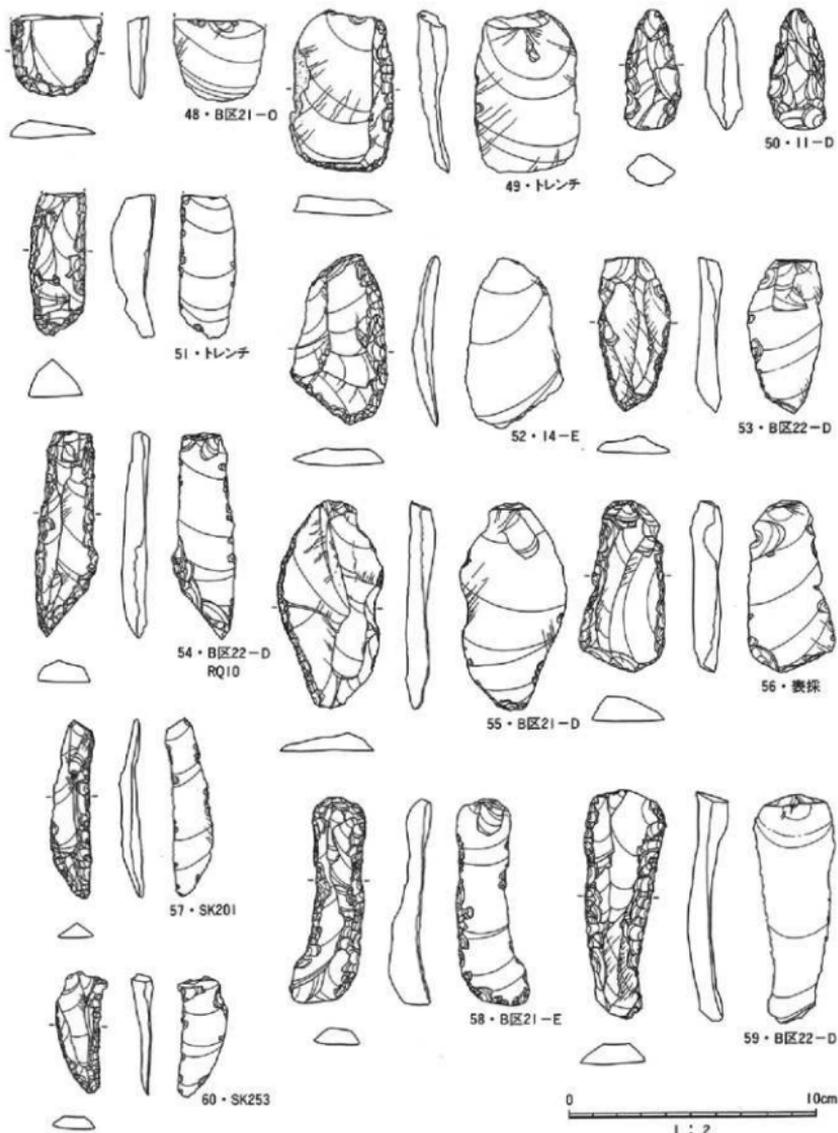


第29図 石鏃・石錐

IV 出土した遺物

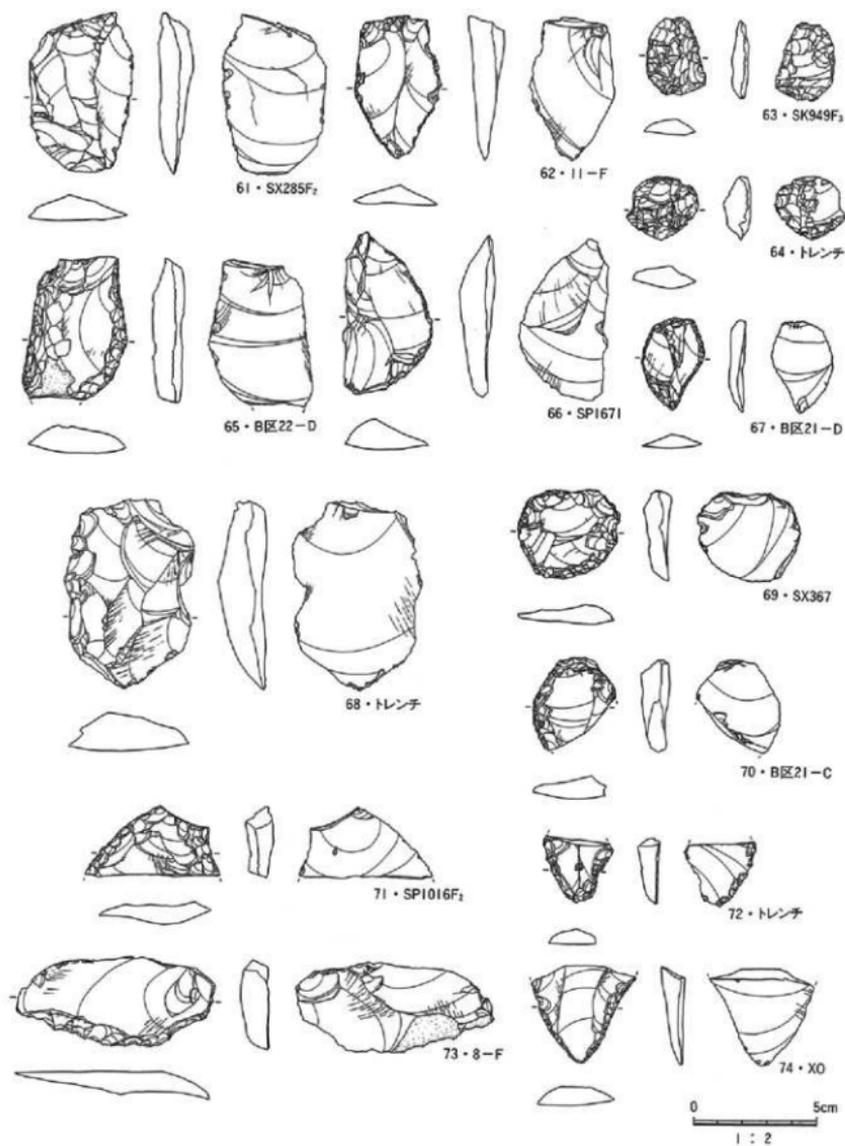


第30図 石鏃・石匙

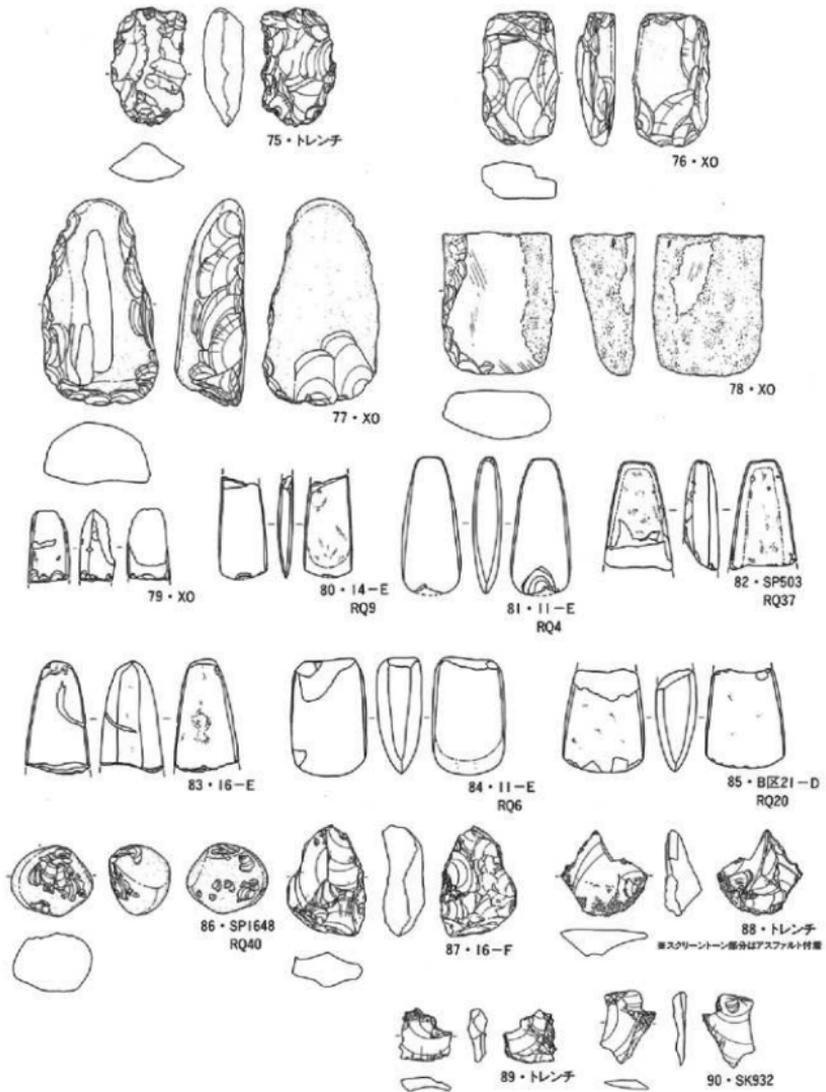


第31図 槌器・削器

IV 出土した遺物

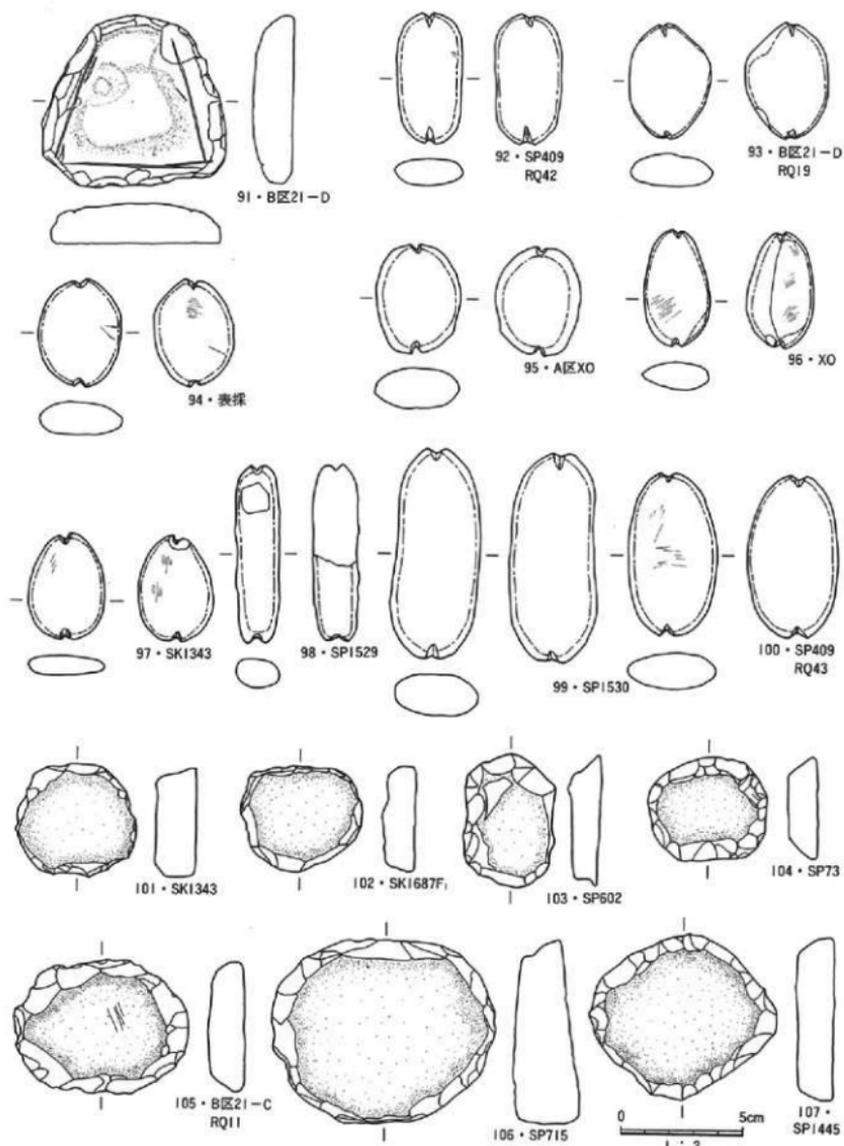


第32図 削器

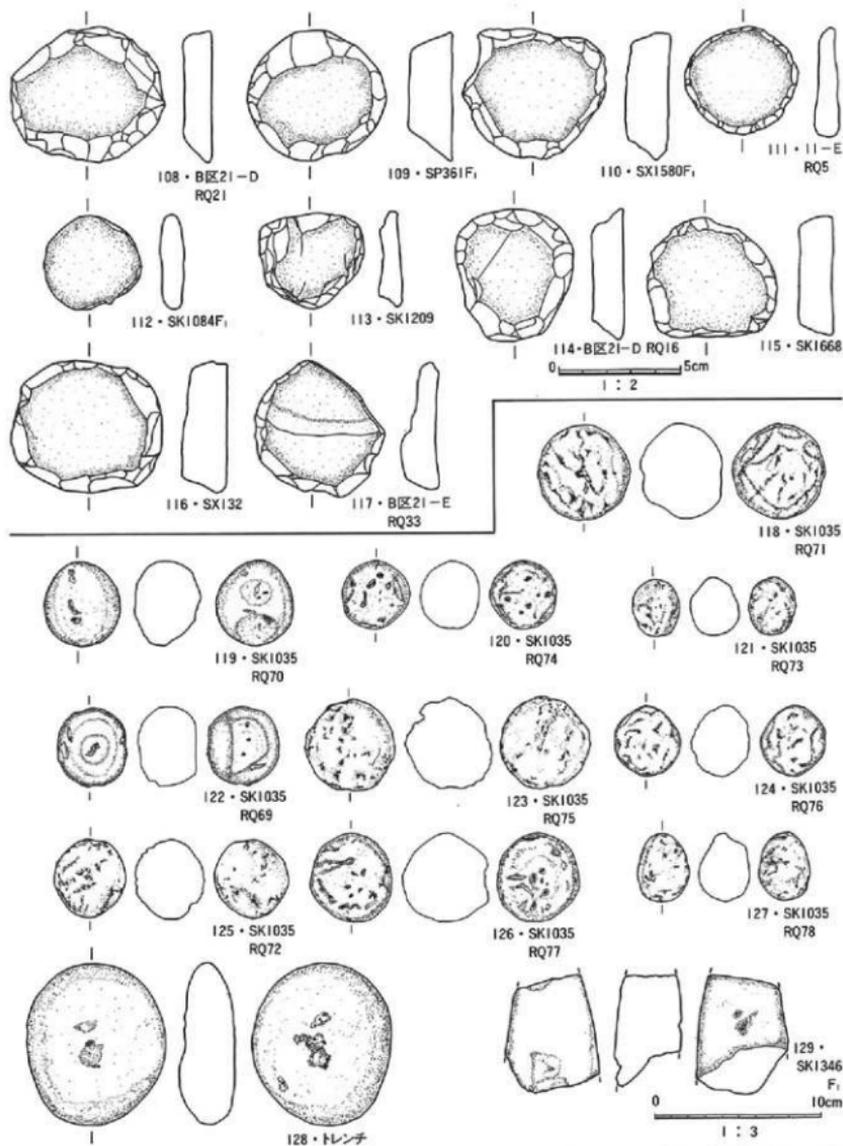


第33図 打製石斧・磨製石斧・黒曜石石片・アスファルト付着石片

IV 出土した遺物

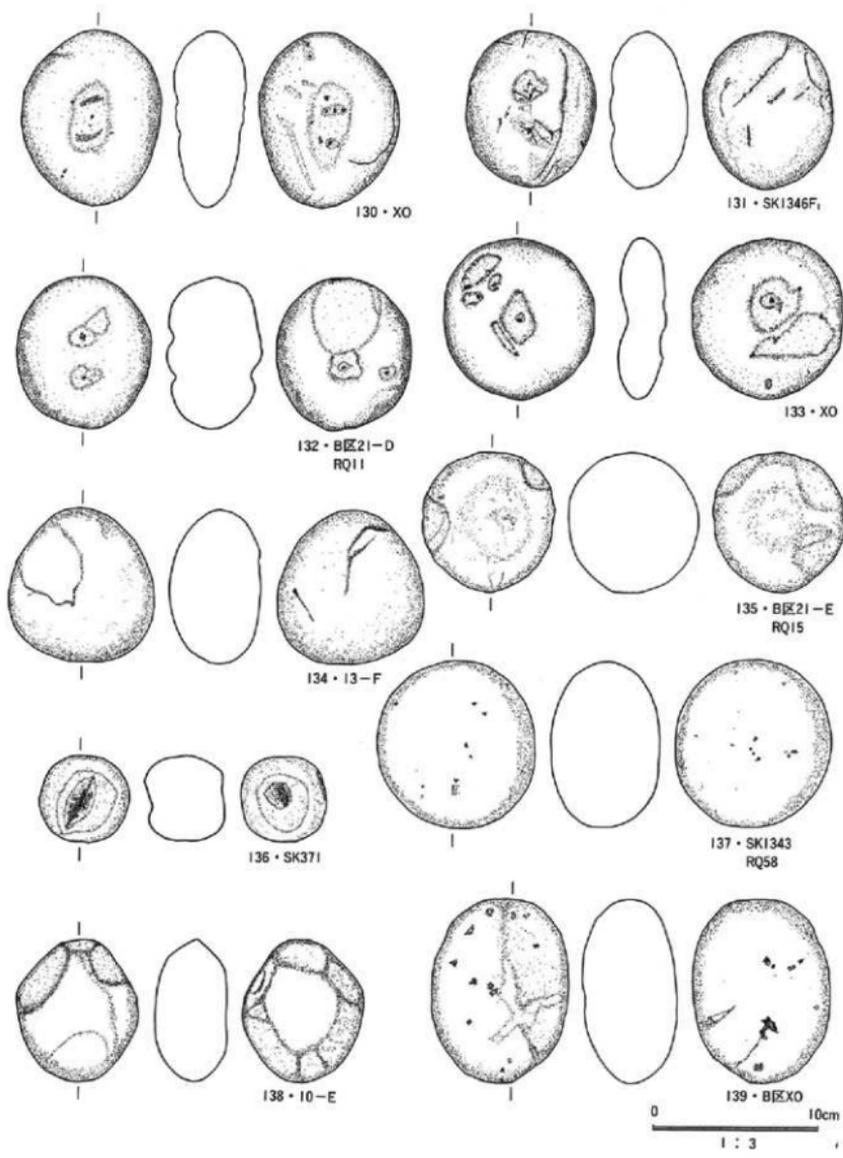


第34図 線刻石製品・石錘・円盤状石製品

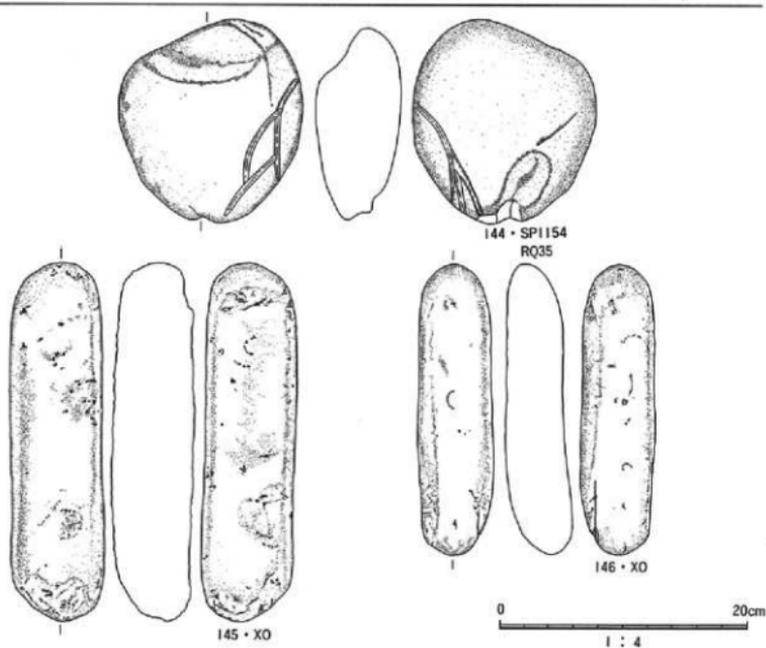
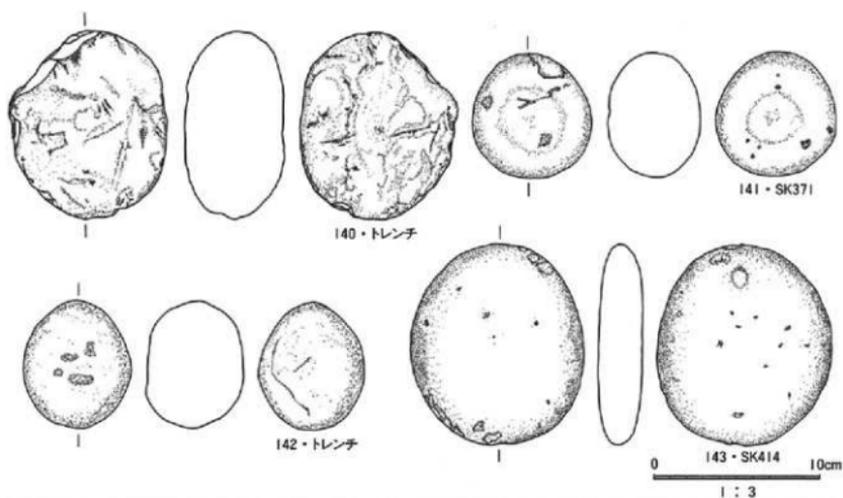


第35図 円盤状石製品・浮石・凹石

IV 出土した遺物

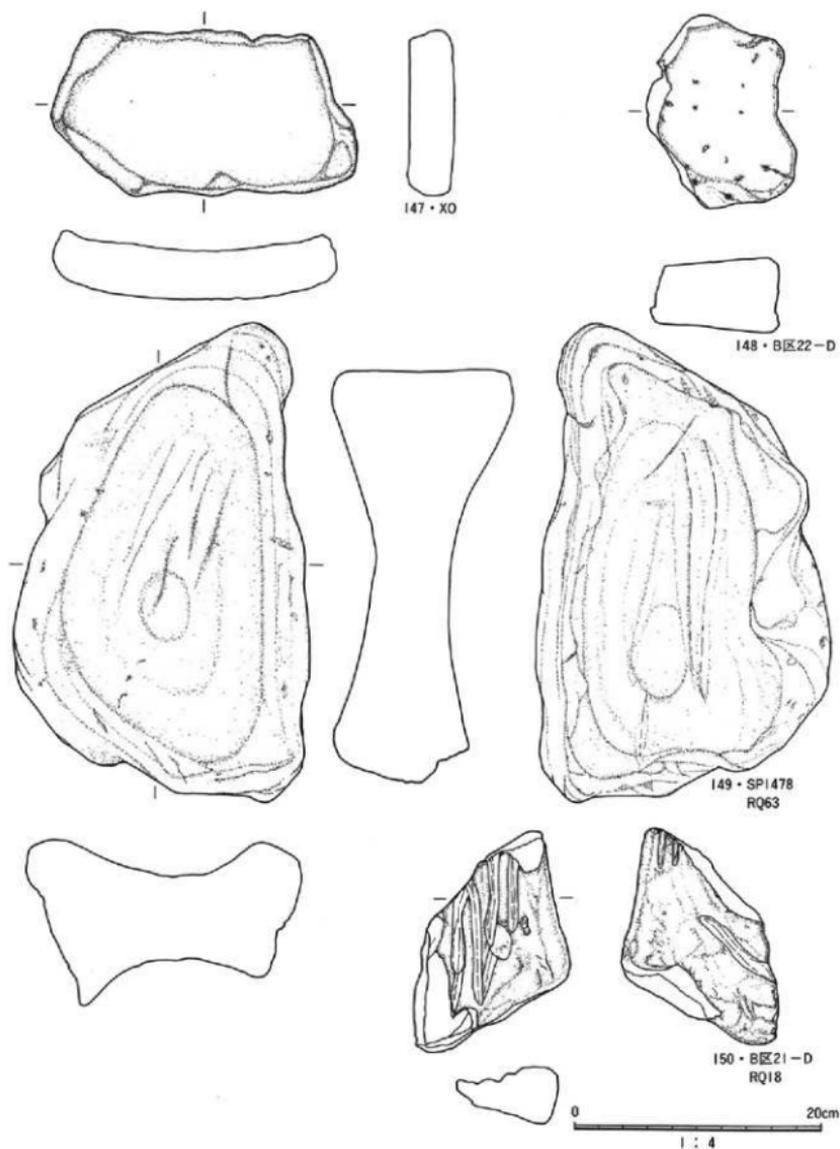


第36図 凹石・磨石



第37図 磨石・敲石

IV 出土した遺物



第38図 石皿・砥石

表5 石器属性表(1)

押出	図版	種類	出土地点	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	検出 深さ (cm)	最大 の位置	磨削			折損 部位	分類	備考		
					長	幅	厚				a	b	c					
29-01	巻物 2・23	石版	BK21-C	頁岩	27.7	(15.4)	4.8	(1.4)	-5.6	B	B	B	C	I-a				
29-02	巻物 2・23	石版	AR14-E	頁岩	26.7	17	4.2	1.6	-4.5	B	B	C		I-c	RQ7			
29-03	巻物 2・23	石版	SK21E	鉄石英	23.8	17.1	3	0.7	-4.8	B	B	C		I-c	RQ26			
29-04	巻物 2・23	石版	ARXO	頁岩	(21.3)	(13.7)	3	(0.5)	-5.5	B	B	C	C	I-a				
29-05	巻物 2・23	石版	22-D	鉄石英	18	13.5	3.7	0.8	-1.1	B	B	B		I-b	RQ23			
29-06	巻物 2・23	石版	SK949F	黒曜石	17.6	14.9	3.8	0.6	5	A	A	A		IIIb	RQ29交差点			
29-07	巻物 2・23	石版	SP1152F	玉髄質	(14.3)	12.9	4.6	(0.5)	(1.3)	A	A	B	D	IIIb	RQ27			
29-08	巻物 2・23	石版	トレンチ	頁岩	20.3	14.1	2.7	0.5	5	A	B	B		IIIb				
29-09	巻物 2・23	石版	BK21-C	頁岩	(15.9)	11.3	4.2	(0.3)	3	A	A	A	A	IIIa				
29-10	巻物 2・23	石版	SK1425F	鉄石英	15.4	(12.3)	2.4	(0.4)	1.2	A	A	C		IIIa	RQ20			
29-11	巻物 2・23	石版	SK1343	頁岩	24	11.6	3.5	0.9	3.7	A	B	B		IIIa	RQ20			
29-12	巻物 2・23	石版	ARXO	鉄石英	22.8	10.7	4.6	0.7	7	A	A	A		IIIa				
29-13	巻物 2・23	石版	表探	頁岩	20.5	11.7	3.9	0.7	3.4	A	A	A		IIIb				
29-14	巻物 2・23	石版	SK1109	玉髄質	18.7	11.6	2.5	0.4	2.2	A	A	A		IIIb	RQ66			
29-15	巻物 2・23	石版	BK22-D	薄白石	20.3	11.4	4.5	0.4	4.3	A	B	B		IIIa				
29-16	巻物 2・23	石版	SK948	頁岩	35.7	(15.2)	4.4	(1.6)	6.5	B	D	D	C	IIIb	RQ33			
29-17	巻物 2・23	石版	BK21-C	鉄石英	28.3	(14.3)	5	(1.4)	7	A	B	C		IIIb	RQ22			
29-18	巻物 2・23	石版	AR17-E	頁岩	25.1	14	3.4	0.8	11.2	A	B	A		IIIc				
29-19	巻物 2・23	石版	AR3-F	頁岩	(21.0)	14.7	5	(0.9)	8.6	A	A	A	A	IIIc				
29-20	巻物 2・23	石版	SK1109	頁岩	21	12.9	3.8	0.5	7.1	A	A	R	B	IIIc	RQ55			
29-21	巻物 2・23	石版	AR11-D	碧玉質	20.5	9.1	2.5	0.4	9.6	A	A	A		IV				
29-22	巻物 2・23	石版	トレンチ	黒曜石	(25.7)	15.9	8.8	(2.7)	8.3	A	B	B		VI				
29-23	巻物 2・23	石版	ARXO	頁岩	36.7	25.7	7.5	6.4	9.1	A	B	A		V				
29-24	巻物 2・23	石版	BK22-E	黒曜石	24.3	12.9	4.8	1	10	A	B	A		V				
押出	図版	種類	出土地点	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	検出 深さ (cm)	最大 の位置	磨削			折損 部位	分類	備考		
a	b	c	d	e	f	g	h				i	j	k				l	
29-25	23	石版	AR17-E	頁岩	39.3	12	3.3	1.4	22.1	6.5	3	凸レンザ	○	○	○	I-a	RQ3	
29-26	23	石版	表探	頁岩	32.8	15.4	10	2.4	13.4	6	5.2	変形	○	○	○	I-b		
29-27	23	石版	SK186F	玉髄質	(24.3)	22.1	6.1	2.6	(8.9)	6.7	3.7	凸レンザ	○	○	○	先頭	I-b	
29-28	23	石版	SP695F	頁岩	38.4	31.2	9.3	6.9	24	8.3	3.9	凸レンザ	○	○	○	○	I-b	RQ52
29-29	23	石版	SK1109	鉄石英	(13.3)	12.9	4.3	(0.7)	(4.8)	4.3	2.2	凸レンザ	○	○	○	先頭	I-b	RQ64
29-30	23	石版	SK1487F	頁岩	42.5	34	6.4	4.7	27.9	9.3	3.4	凸レンザ	○	○	○	○	I-b	RQ11
29-31	23	石版	AR11-D	頁岩	29.8	42	10.9	4.9	31.9	4.2	3.6	凸レンザ	○	○	○	○	I-b	
29-32	23	石版	BK21-C	頁岩	21.5	15.3	7.6	1.7	11.9	4.9	3.1	変形	○	○	○	○	I-b	
29-33	23	石版	BK21-D	頁岩	44.8	28.6	12	9.4	15.7	7.3	6	変形	○	○	○	○	I-b	
30-34	23	石版	ARXO	頁岩	27.5	17.9	5.3	1.1	18.6	5.7	4.6	凸レンザ	○	○	○	II	磨削部分欠い	
30-35	23	石版	SP1196	頁岩	35.9	16.1	6.6	3.4	18.8	8.7	4	凸レンザ	○	○	○	II	片断部分欠い	
30-36	23	石版	トレンチ	石版安山岩	(37.9)	17.4	11	(7.5)	(21.5)	12	6.6	凸レンザ	○	○	○	先頭	II	
押出	図版	種類	出土地点	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	検出 深さ (cm)	最大 の位置	磨削			折損 部位	分類	備考		
a	b	c	d	e	f	g	h				i	j	k				l	
30-37	24	石版	BK21-E	頁岩	43.8	32	11.7	11.3	1.8	1.8	3	C	×	×	I-a	RQ14		
30-38	24	石版	SK225F	頁岩	59.2F	35.9	35.9	10.7	1.4	1A	1C				I-a	RQ24		
30-39	24	石版	BK21-E	頁岩	38.4	18.1	5.6	(3.4)	3A	3A					上	II		
30-40	24	石版	ARXO	頁岩	60.6	34.6	11	17.3	QA	QA	1C	1A	1A			II		
30-41	24	石版	BK22-D	頁岩	78.9	23.9	9.6	19.7	QA	QA						I-b		
30-42	24	石版	ARXO	頁岩	79.9	35.7	12.9	30.1	1A	1A						1A	I-b	
30-43	24	石版	トレンチ	頁岩	51.2	48.6	10.7	24.8	QA	QA	1C	3B	1A	A		II		
30-44	24	石版	トレンチ	石版安山岩	57.1	(50.7)	8.6	(21.4)	1A	QA	1B	3C	1A	1C		II		
30-45	24	石版	AR16-F	頁岩	34	19.8	10	15.1	QB	QA	QA	QA	QA	QA		I-a	RQ1	
30-46	24	石版	XO	頁岩	(30.5)	28.9	7.4	(8.4)	1A	2A						A	I-c	
30-47	24	石版	XO	頁岩	45.6	24.3	7.3	7.9	QA	QA	1C	1C	3A			I-b		
31-48	24	彫刻	BK21-C	輝岩	(33.0)	37	8.3	(9.8)	1A	1A						-	C	
31-49	24	彫刻	トレンチ	頁岩	64.8	42.4	11	33.2	-	1A						-	I-a	
31-50	24	彫刻	AR11-D	頁岩	48.9	22.8	15.3	15.1	1A	QA	1A	QA	QA	QA			IIIb	
31-51	24	彫刻	トレンチ	頁岩	(59.1)	22.8	16.7	(24.1)	1A	1B	3B	3C	1A	3C			IIIa	
31-52	25	彫刻	AR14-E	頁岩	(68.7)	(39.5)	10.4	(20.2)	-	1A							IIIa	
31-53	24	彫刻	SK282F	頁岩	62.3	38	10.3	18.3	1A	3A	3C						IIIc	
31-54	24	彫刻	BK22-D	頁岩	83.5	25.2	10.6	25.8	1A	1A	3C	3C	QA	QA			RQ19	
31-55	25	彫刻	BK21-D	頁岩	83.5	41.7	10.7	35.1	1A	3C	3C	3C					I	
31-56	24	彫刻	表探	頁岩	69.1	34.7	12.3	35.1	1A	1A	1C	1C	1A	1C			I	
31-57	24	彫刻	SK201F	頁岩	72.1	18.2	8.8	7	1B	QA	3C	3C	×	×			II	
31-58	24	彫刻	BK21-E	頁岩	84	28.6	17.9	28.2	1A	QA	1B	3C					I	
31-59	24	彫刻	BK22-D	頁岩	80.2	32.5	12.7	34.6	QA	1A							I	
31-60	24	彫刻	SK253	頁岩	49.3	19.6	8.5	5.5	3A	1A	3C	1C	×	×			I	
32-61	24	彫刻	SK282F	頁岩	65.6	41.1	13.4	35.3	-	1B	3B	3C					IV	
32-62	25	彫刻	AR11-F	頁岩	67.7	34.8	14.3	18.9	3A	3A							II	
32-63	25	彫刻	SK949F	頁岩	31.7	23.4	6.9	5	QA	QA	QA	1A	1A				I	
32-64	25	彫刻	トレンチ	鉄石英	25.5	28	10.9	7.2	1A	QA	QA	1B	1A	1A			IIIb	
32-65	25	彫刻	BK22-D	頁岩	(57.9)	42.4	12.8	(36.8)	QA	1A							I	
32-66	25	彫刻	SP1671	頁岩	65.9	35.6	14.3	26	-	3A							IV	
32-67	25	彫刻	BK21-D	頁岩	37	24.6	6.6	5.4	3A	3A							II	
32-68	25	彫刻	トレンチ	頁岩	76.3	52.4	20.6	77.8	1A	3C							II	
32-69	25	彫刻	SK282F	頁岩	36.1	41.2	18.9	14.9	-	3B							IIIa	
32-70	25	彫刻	BK21-C	頁岩	28.4	33.4	11.3	12.5	1A	1C							II	
32-71	24	彫刻	SP1016F	頁岩	(28.5)	(53.9)	10.7	(14.8)	1A	3A							II	
32-72	25	彫刻	トレンチ	頁岩	(26.3)	25.5	8.6	(5.8)	1A	1A							3B	II
32-73	25	彫刻	AR 8-F	頁岩	35.7	79.7	12.1	33.2	-	3A							IIIa	
32-74	24	彫刻	XO	頁岩	(39.5)	(42.1)	9.3	(12.3)	3A	1A							×	II

円盤状石製品とした。津谷遺跡からは52点出土している。うち17点を挿図掲載した。(図版には全点掲載) 遺構内出土品が11点、B区包含層から28点出土している。径は4cm～6cmが多く、重量は20g～170gと材質による差が大きい。(表7)

線刻石製品 (第34図91・図版28)

板状の礫の周囲を打ち欠いて平面台形状にし、表裏を研磨(特に裏は平らに)したうえに、3条の線刻を施した石製品である。B区包含層からの出土である。

浮石 (第35図118～127・図版27)

SK1035から一括して出土した10点の石群で軽石のような材質で、空気を含む隙間が多く比重が軽い。千葉市立加曽利貝塚博物館の所蔵になる浮石とよく似た材質、形状であるためこの呼称を用いた。厳密には水没してしまうので浮石と呼ぶのには抵抗もあるが、他の磨石との特徴の違いを明示するために使用した。119のみは他の浮石より重い材質からできている。あたかも意図的に並べて置いてあったように出土した。(第6図)

凹石 (第35図128・129・第36図130～133・図版28)

河原石の表面に敲打によると考えられる凹痕を持つもので、そのほとんどが磨痕をあわせ持つ。津谷遺跡では6点出土した。131をのぞいて両面に凹痕を持っている。129は乳棒状磨製石斧の転用品ではないかと考えられる。

磨石・円盤状磨石 (第35図112・第36図134～139・第37図140～144・図版27・28)

河原石が石皿などと組み合わせ使用された結果、礫面に磨痕を持つに至った石器である。礫面に磨痕があっても、敲打による凹痕があるものは凹石に分類している。37点出土している。144は全体に整形痕がないため磨石としているが、表裏に線刻のような痕跡がある。極端に扁平な河原石を使用しているものを特に円盤状磨石とした(112・143)。6点出土している。

敲石 (第33図77・第37図145～146・図版25・28)

棒状あるいは楕円形の礫の端部等に敲打痕を持つ石器である。ハンマーとして使用されたものと考えられる。77は手に握って叩きつぶす用途に使ったものと思われ、スタンプ状石器的なものとも考えられる。

石皿 (第38図147～149・図版28)

扁平で大型の河原石の一面あるいは二面に磨面を持つ石器である。津谷遺跡からは3点出土している。147はSP1478に立石のような縦位置で入っていたものである。表裏ともに磨面があり、磨面内には砥石としても使用された痕跡がある、石皿砥石兼用品と考えられる。磨面の周囲には高まりがあるが、加工によるものか使用によるものか判別はつけにくい。石材は147・149が細粒砂岩、148は石英安山岩である。

砥石 (第38図150・図版28)

石皿の石材と共通した細粒砂岩であり、表面に条線が刻み込まれている。

その他の遺物 (第33図86～90・図版25)

86・87は黒曜石の石片である。86は未加工の礫で、県内の遺跡ではきわめて稀なものである。その石質から、県外産と考えられる。88～90はアスファルトの付着した石片である。津谷遺跡

の付近にアスファルトを産出する場所は現在のところ無く、交易品と考えるのが妥当であろう。

V まとめと考察

津谷遺跡は銚川左岸の鞭打野河岸段丘上に立地した集落跡である。遺跡推定面積50,000㎡のうち今回の調査区は2,080㎡とわずかな部分にすぎない。しかし出土遺物は整理箱にして64箱に上った。うち土器片、土製品40箱、石器、石製品23箱、その他(炭など)1箱となる。県内においては縄文時代後期前半の資料そのものの蓄積が少ない現状を見れば、貴重な資料といえよう。

遺構の特徴として珍しい数のピットがあげられる。調査区全体で土坑130基に対してピット1,575基というのは、2,080㎡という調査面積と照らしても極めて多いと考えられる。これらが住居跡に伴うものなのか、掘立柱建物跡、あるいは柵などの構造物なのかは、現在のところはっきりしない。

E U1024埋設土器は上部をすっぱり切られており、E U1533埋設土器はIV層まで面整理すると、高く残ってしまった。これらの状態から生活面、あるいは住居の床面はIV層より上層にあったと考えられる。耕地整備などのために上部は削平されてしまい、より深い層まで続いていたピットや土坑だけが残ったのである。E U1533の付近は包含層III層が残存していた可能性のある地点なので、あるいはIII層に生活面があったのかもしれない。また理化学分析ではII層にも生活面の痕跡が考えられるとしているが、実際は畑の耕作土の直下であり施肥の影響も考えなくてはならないだろう。

今回の調査で土壌のサンプリングを行った遺構は、全てリン酸の含有量が標準値を上回り、墓坑と推定できる可能性がでた。そのなかに立石遺構や覆土内に横に掘えられた河原石、小集石などを持つ遺構が含まれており、埋葬との関連が指摘できよう。S K1035より出土した浮石群は墓坑内に意図的に入れられた副葬品と推定でき、これらがきちんと並べられて添えられたことの精神的背景には興味深いものがある。条件が許せばさらに多くのサンプリングを行うことにより、より多くの墓坑が推定できたと考えられる。

土器の出土はB区包含層が多く、遺構からの出土はあまり多くない。また器形の判断できる土器が少なく土器片を多く手がかりにしているため、分類が明瞭でない部分もあるが、その中で遺物と遺構の関係について考察したい。

E U1024埋設土器は門前式に分類でき縄文後期初頭と考えられる。S K414からは宮戸I b式併行に分類できる鉢、堀之内1式併行の深鉢が出土しており、時期は後期初頭から前葉と考えられる。S K1623からは堀之内1式併行の深鉢が出土しており、後期前葉と考えられる。

S K949は貯蔵穴として使われやがて廃棄されたものと考えられるが、出土した土器は堀之内1～2式、十腰内I式に分類でき、この遺構の時期も後期前葉と考えられる。この土坑からは黒耀石でできた有茎の石鏃が供伴している(6)。S P1259からは小型土器、小型甕が出土して

おり、同じく堀之内1～2式、十腰内I式併行に分類できる。

後期末から晩期と思われる土器片も僅かに出土しているが、津谷遺跡の時期は、後期初頭から前葉（特に前葉、堀之内1式併行）と考えられる。津谷遺跡の山形県内周辺遺跡との位置づけを考えると、1：寒河江市富沢I遺跡 ～ 2：最上町水上遺跡 ～ 3：村山市川口遺跡という後期の流れの中で、主として1、2、一部3に併行したある程度幅の広い時期の遺跡と見ることが出来る。

石器関係で特徴的なこととしては、石鍬の石材の豊富さと、石錘の存在があげられる。津谷遺跡の石鍬は色とりどりで、他の遺跡に比べても際立っている（巻頭図版2）。単に実用性だけでは説明の付かないものである。しかも同じ津谷遺跡でも石鍬他の石器とも明確に違うのである。石鍬における頁岩以外の石材の割合は、50%に達するが、石錘では25%、石匙、搔器、削器に至っては5%にしかない。色や材質自体に力があると信じられた（獲物を捕らえる力）あるいはそのことによって持っていることが値打ちになった（他に見せる）、等とも考えられる。

一方石錘は漁労のための道具と考えられているが、津谷遺跡の立地は鮭川の河岸段丘上である。この川最大の蛋白源は秋川を遡上してくる鮭であったろう。石錘の存在は改めて津谷の集落と鮭川の密接な関係を物語っている。

参考文献

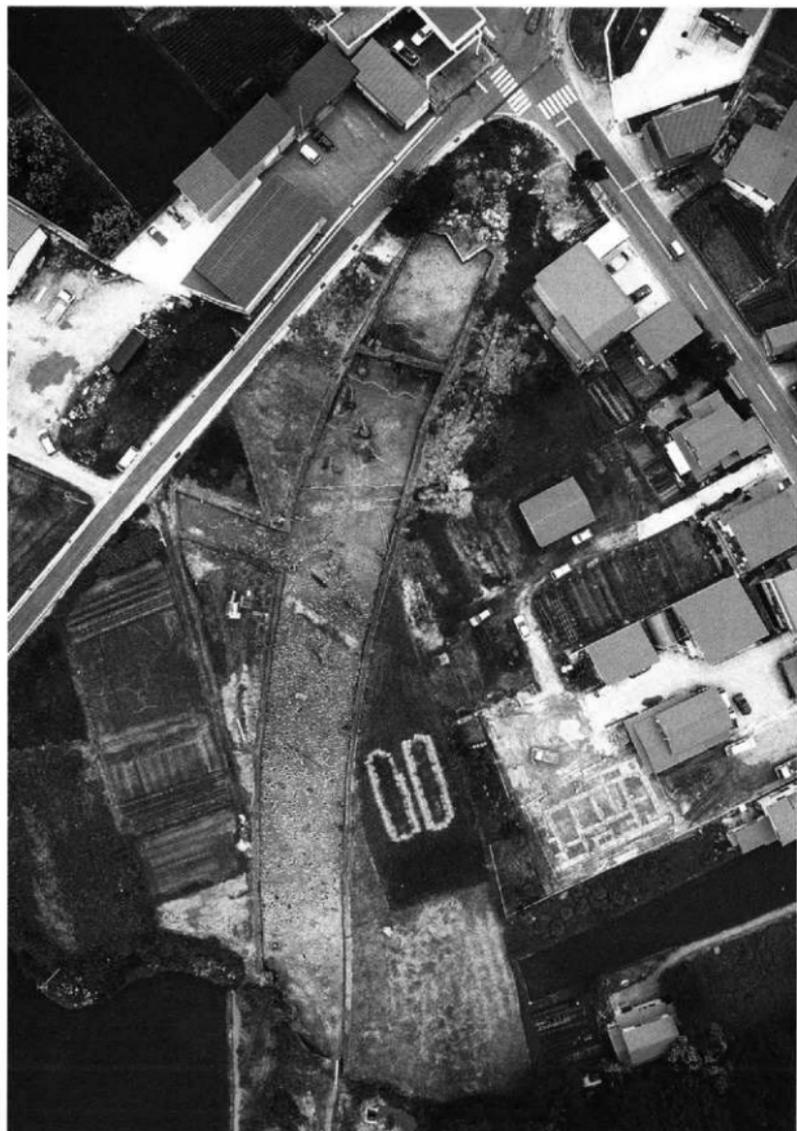
- 1 佐藤庄一他：『富沢I遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第30集 鶴山形県埋蔵文化財センター 1996年
- 2 山形県教育委員会：『分布調査報告書(23)』山形県埋蔵文化財調査報告書第197集 1996年
- 3 名和達朗他：『水上遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第40集 1981年
- 4 村山市史編纂委員会：『村山市史 原始・古代・中世編』 1991年
- 5 村山市史編纂委員会：『村山市史 考古資料編』 1991年
- 6 加藤道男他：『東北自動車道遺跡調査報告書IX』宮城県文化財調査報告書第99集 1984年
- 7 佐藤 洋他：『山口遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第33集 1981年
- 8 小林 克他：『八木遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第181集 1989年
- 9 田中剛和他：『六反田遺跡発掘調査報告書』仙台市教育委員会 1986年
- 10 高橋忠彦：『秋田県の縄文時代後期の土器』秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第4号 1989年
- 11 金子昭彦：『十腰内I式(新)に併行する東北地方中部の土器(1)』縄文時代7号 1996年
- 12 本間 宏：『東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態』よねしろ考古第1号 1985年

報告書抄録

ふりがな	つやいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	津谷遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第46集							
編著者名	小関真司・渡辺 薫							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
津谷	山形県最上郡 戸沢村 大字津谷 字磯打野 1330地	6367	1099	38度 44分 33秒	140度 11分 10秒	19960507 ～ 19960718	2,080	主要地方道 新庄戸沢線 道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
津谷	集落跡	縄文時代 後期	住居跡 1 土坑 130 ピット 1,575 埋設土器 2 河川跡 1	縄文土器 石器 土製品 石製品		鮎川の河岸段丘上に位置する。調査区からは墓塚と考えられる、立石や礫が入っている遺構、貯蔵穴が検出された。また、網の重りに使われた石鍾も出土。		
						64箱		

图

版



調査区全景（上空より・上が南）



遠構空中写真 (上が西)



遠構空中写真 (上が西)



B区包含層調査風景（西から）



トレンチ調査風景（北から）



重機による表土除去作業（南西から）



ジョレンによる面整理作業（南から）



小学校見学会（北西から）



調査区全景 (北から)



A区遺構検出状況 (南東から)



B区遺構検出状況 (北から)



A区基本層序 (北東から)



A区基本層序 (南から)



SP1697土層断面 (北から)



SP1697検出状況 (北から)



SP1695土層断面 (南から)



SP1350検出状況 (西から)



SP1350土層断面 (南から)

図版6



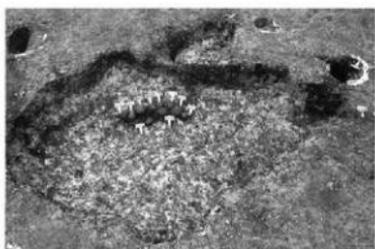
SK1180完掘状況 (南から)



SK1185完掘状況 (南から)



SK1035土層断面 (西から)



SK1035完掘状況 (東から)



SK1610土層断面 (北から)



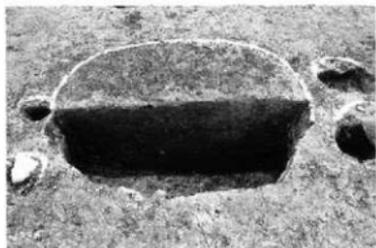
SPI154土層断面 (南から)



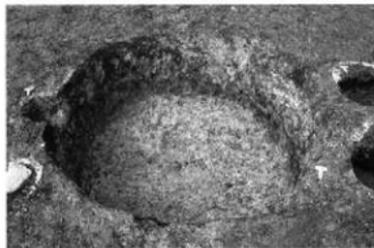
SK1210土層断面 (南から)



SPI478土層断面 (東から)



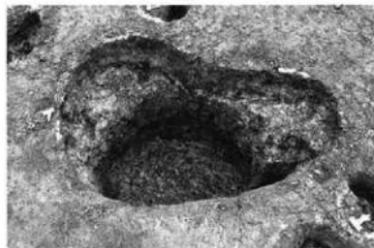
SK1483土層断面 (南から)



SK1483完掘状況 (南から)



SK1084土層断面 (西から)



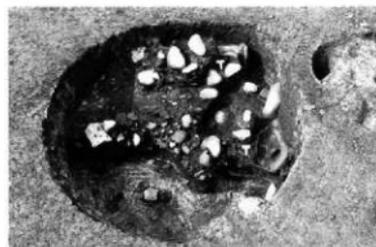
SK1084完掘状況 (西から)



SK949土層断面 (南西から)



SK948完掘状況 (南から)



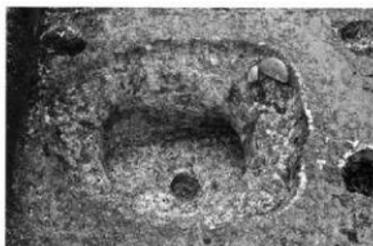
SK949遺物出土状況 (南から)



SK949完掘状況 (南から)



SK665土層断面 (南から)



SK665完掘状況 (南から)



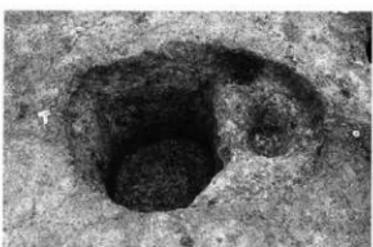
SK1075土層断面 (南から)



SK1075完掘状況 (南から)



SK1134土層断面 (西から)



SK1134完掘状況 (西から)



SK1455土層断面 (東から)



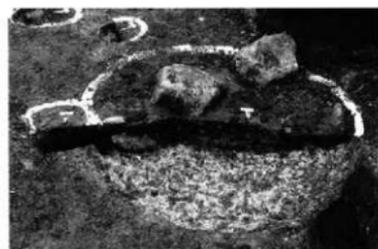
SK1343土層断面 (南西から)



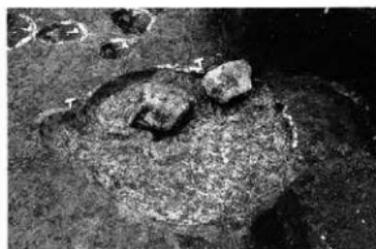
RP25(SK1623)出土状況(東から)



SP1259遺物出土状況(西から)



SK1623土層断面(東から)



SK1623発掘状況(東から)



RP13(SK371)出土状況(西から)



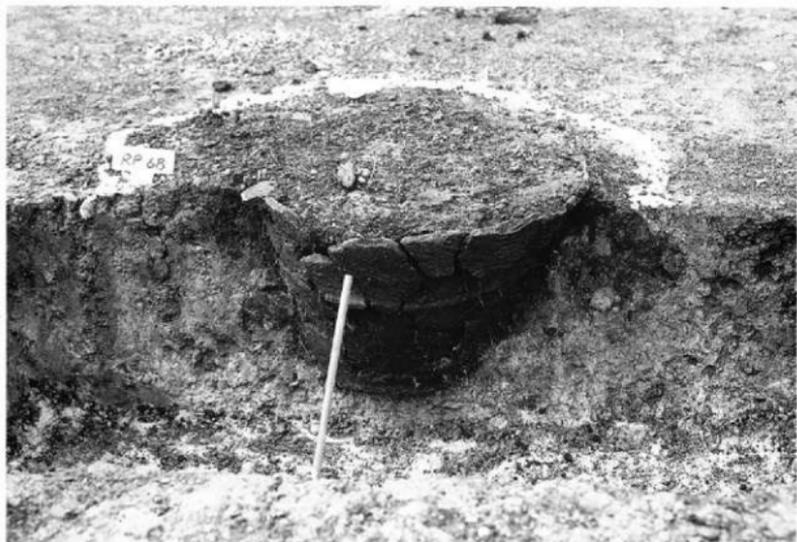
SK371土層断面(南から)



RP17出土状況(西から)



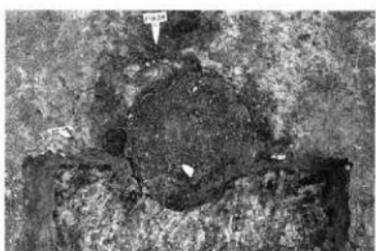
SK949遺物出土状況(西から)



EU1024埋設土器断面 (南から)



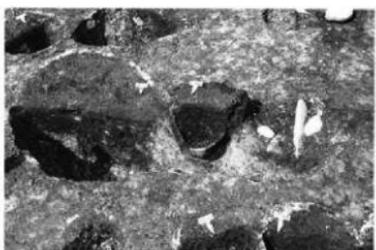
EU1533埋設土器断面 (南西から)



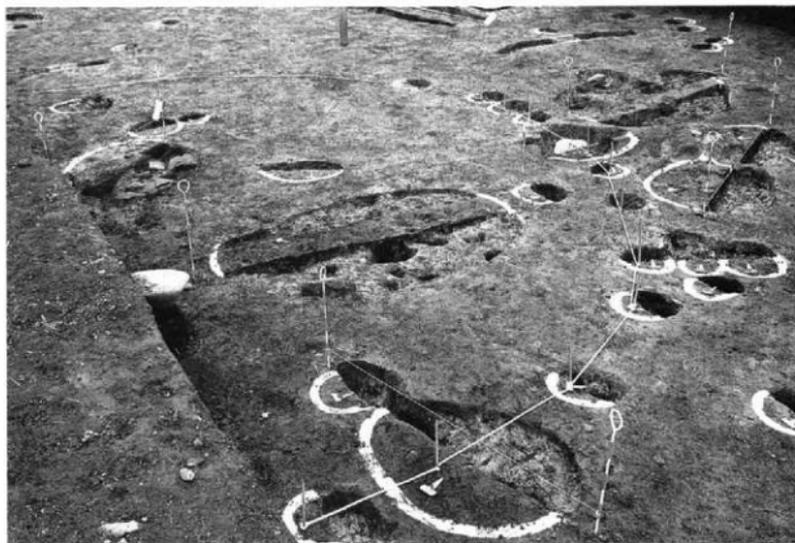
EU1024埋設土器 (上から)



EU1533埋設土器検出状況 (南から)



EU1533埋設土器断面 (南から)



ST1 竪穴住居跡 (北から)



ST1 竪穴住居跡土層断面 (南東から)



ST1 竪穴住居跡 (上が南西)



ST1 竪穴住居跡土層断面 (南から)



SG1川跡調査状況（西から）



SG1川跡トレンチ a-a' 土層断面（南東から）



SG1川跡トレンチ a-a' 土層断面（北東から）



SG1川跡トレンチ土層断面（南東から）



SG1川跡トレンチ土層断面（北東から）



13-1



13-2



15-1



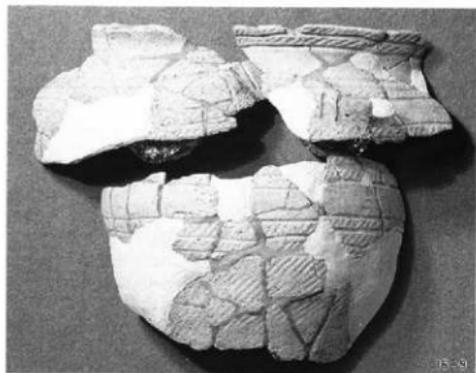
13-3

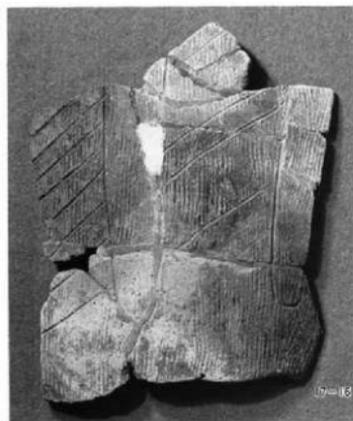


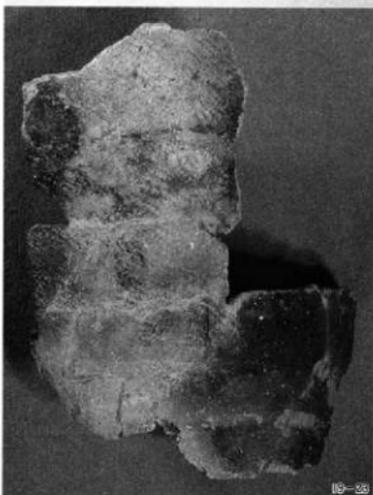
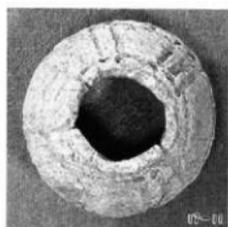
15-5

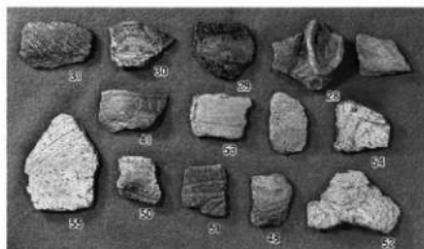
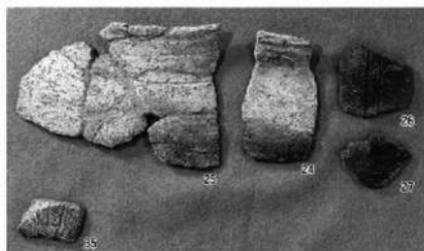


13-4

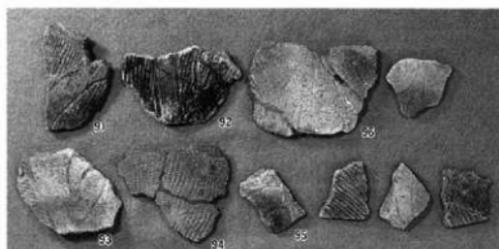
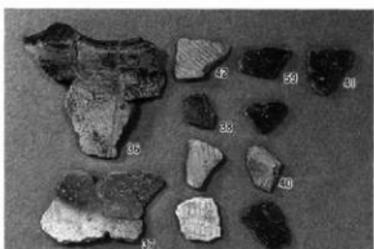
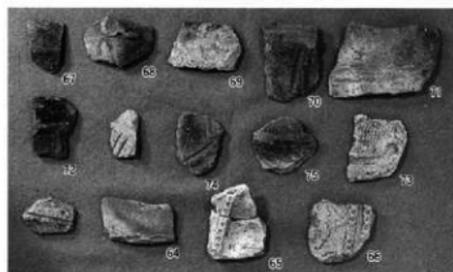
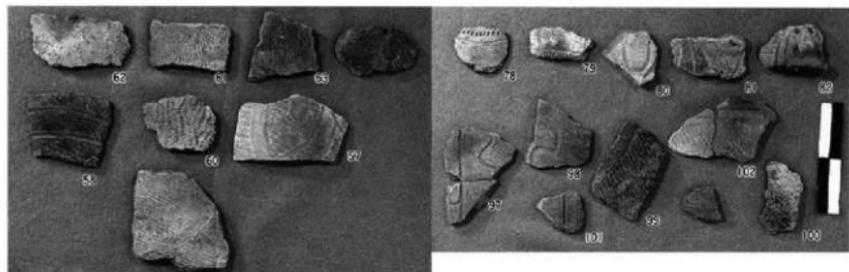


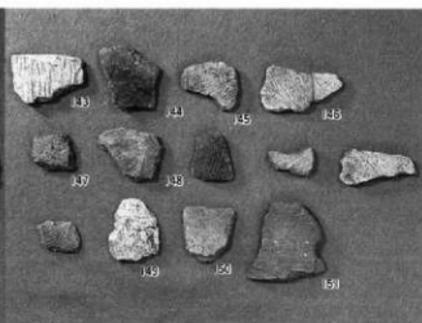
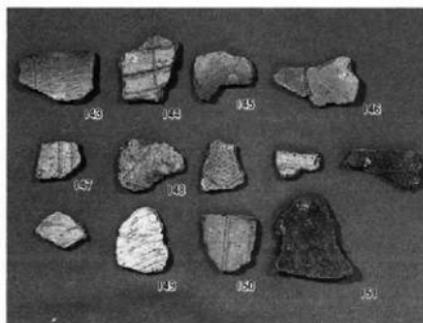
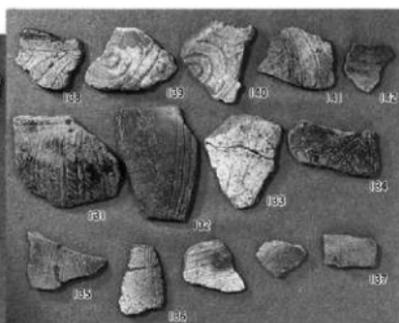
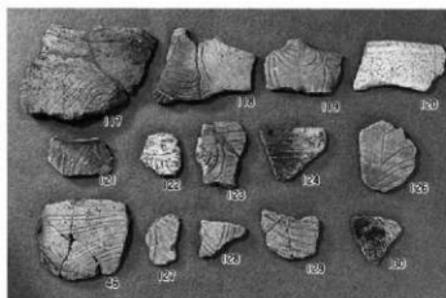
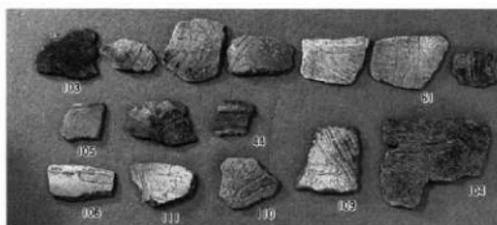
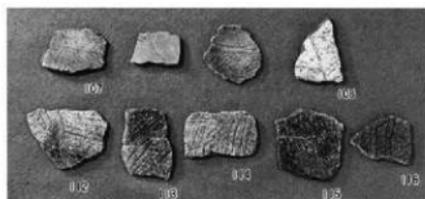




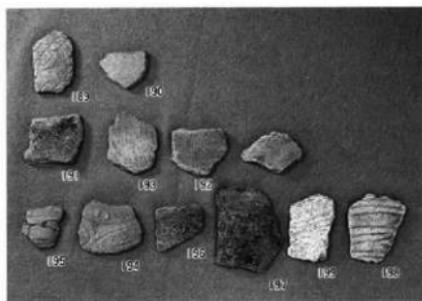
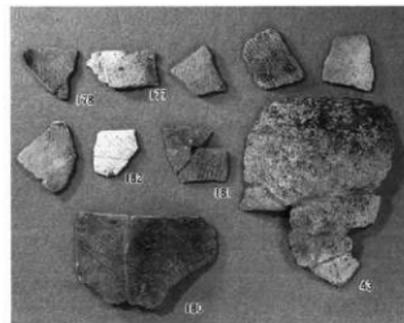
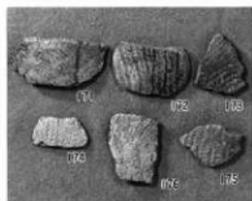
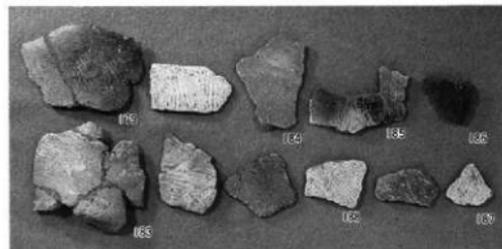
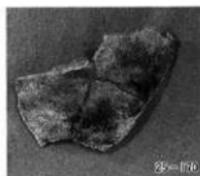
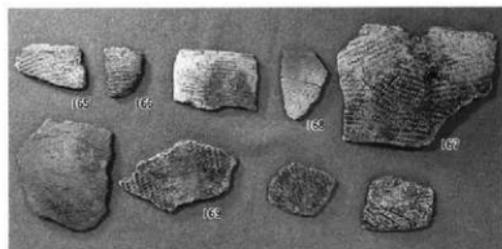
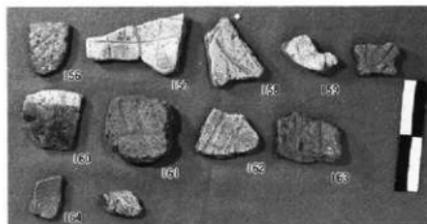


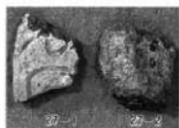
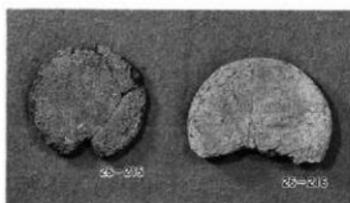
图版18





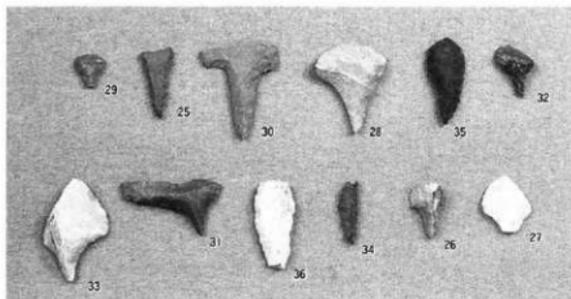
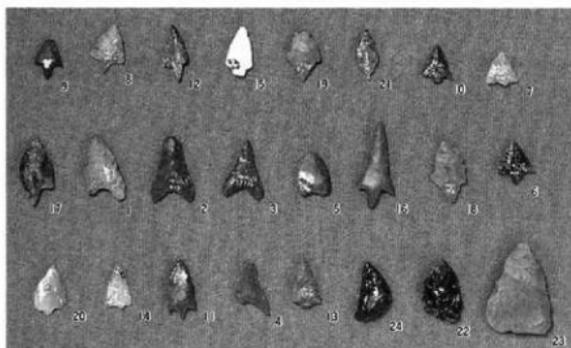
图版20





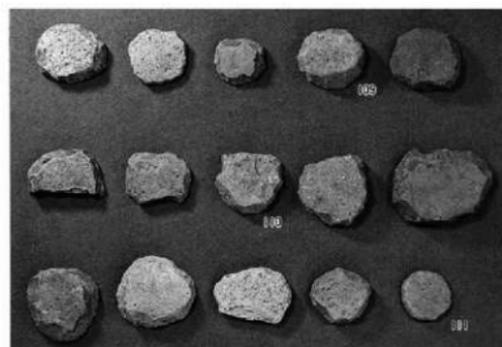
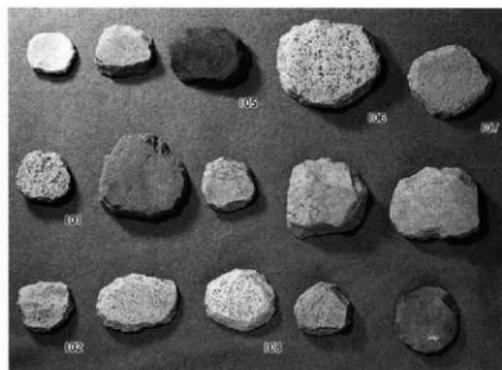
图版22

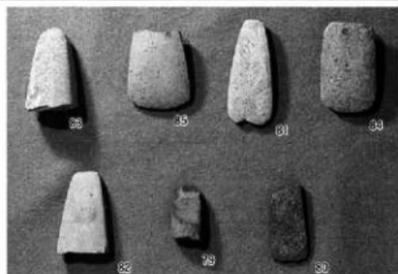
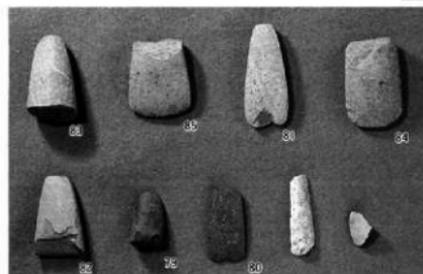
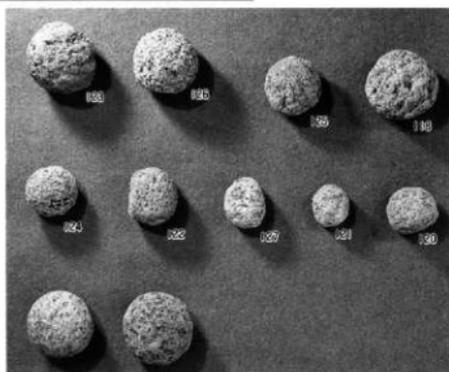
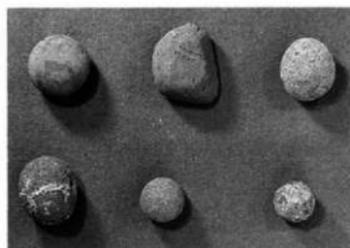
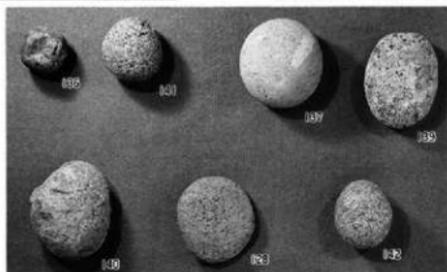
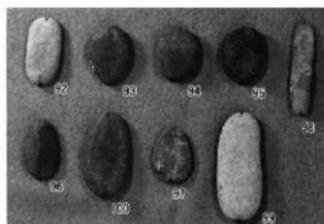
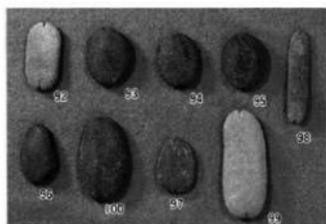




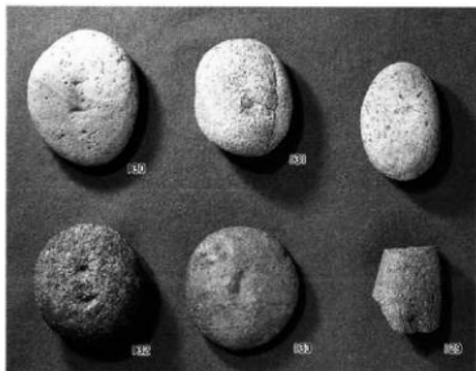
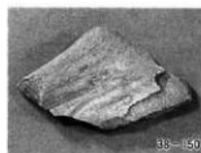
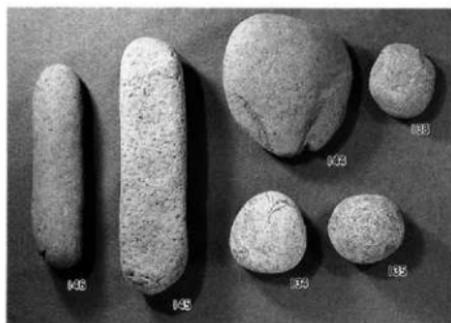
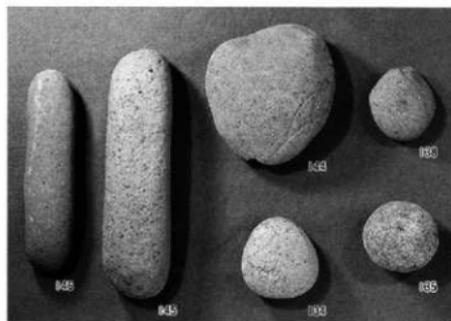








图版28



付 編

はじめに

津谷遺跡（山形県最上郡戸沢村所在）は、最上川と鮭川が合流する付近の完新世段丘上に立地する。この付近には多くの遺跡が分布するが、いずれも縄文時代晩期を主体とするものが多く、今のところ後期に属する遺跡は本遺跡以外少ない。今回の発掘調査では、縄文時代後期の河川跡、住居跡、埋設土器、土坑、柱穴などが検出されている。

土坑には、フラスコ状の貯蔵穴と考えられるものや、墓とみられる石を集めた遺構がみられる。また、埋設土器も検出されており、遺体や胎盤を埋めた可能性が指摘されている。遺構内の遺体の有無を確実に捉えるためには、まずは人骨など人体そのものの確認が必要であるが、これらは分解されやすく、長い年月にわたり土壌中にその形状を保つことは稀である。人骨などが肉眼的に確認できない場合に、遺体埋納の痕跡を検証する方法として、リン酸分析が知られている。リン酸分析は、人体（特に人骨）に多量に含まれしかも土壌中で比較的移動しにくいとされるリン酸の含量を測定し、その痕跡を定性的に把握する方法である。（竹迫ほか、1981）。リン酸は、動物の場合遺体や排泄によって狭い範囲に濃集すると考えられている（竹迫、1985；竹迫ほか、1981；竹迫、1985；板上、1983；バーンズほか、1986など）。例えば、東京都大田区の田園調布南遺跡では方形集溝墓の主体部から天然賦存量以上のリン酸量が検出され、埋葬位置が立体的に推定されている（中根、1992）。そこで今回は、人骨に多く含まれる成分であるリン酸とカルシウムについて測定し、その結果から遺体埋納の可能性を検討する。

1. 試料

試料は、基本層序ならびに各遺構から検出された試料計28点である。なお各遺構では遺構外の土壌を対照試料として採取している。試料の詳細は、結果とともに表に記す。

2. 方法

分析は、土壌標準分析・測定法委員会編（1986）、土壌養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）等を参考にして行った。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルゲールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（ HNO_3 ）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（ HClO_4 ）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（ P_2O_5 ）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム（ CaO ）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた分水量から乾土あたりのリン酸含量（ $\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ ）とカル

シウム含量 (CaOmg/g) を求める。

3. 結果

結果を表1に、結果から求めた基本統計量を表2に示す。

基本土層では、リン酸・カルシウムともにI層で最大値、III層で最小値をとる。したがって、上位の土層ほど数値が高い傾向にある。

対照試料(地山;表1には「周り」として記載されている)のリン酸は、EU1533を除いて非常に近い値をとり、 $1.0P_2O_5mg/g$ 前後に値が集中する。EU1533の対照試料はこれよりも高く、 $3.97P_2O_5mg/g$ という値を示す。一方、カルシウムも $1.0CaOmg/g$ 付近に値が集中する傾向にある。

表1 リン・カルシウム分析結果

番号	遺構名	属位	$P_2O_5(mg/g)$	CaO(mg/g)	備考
1	基本層序	I	5.56	3.15	
2		II	2.4	2.26	
3		III	1.19	1.6	
4	SP835	F1	2.78	1.12	立石
5		周り	1.2	0.43	
6	SK969	F1	2.35	0.52	覆土より石製品出土
7		F2	4.03	0.87	
8		周り	1.01	0.95	
9	SP1017	F1	2.02	0.79	覆土上部に河原石
10		F2	5.84	0.91	
11		周り	1.11	1.39	
12	SK1035	F1	2.51	0.61	底面に円礫(10個)
13		F2	1.78	0.58	
14		F3	2.9	0.52	
15		F4	2.51	1.25	
16		周り	0.82	1.27	
17	SK1109	F1	2.43	0.46	底面に石叢(3個)
18		周り	1.07	1.14	
19	SK1180	F1	4.23	0.92	集石
20		周り	1.45	0.9	
21	SP1350	F1	3.37	0.56	立石
22		周り	1.13	0.87	
23	EU1024	内部	2.51	0.47	埋設土器
24		周り	1.08	0.6	
25	EU1533	内部	7.61	1.36	埋設土器
26		周り	3.97	1.52	
27	SK374	F1	5.43	1.1	
28		F3	5.59	1.98	

表2 リン・カルシウム値の基本統計量

		P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO(mg/g)
基本層序			
検体数	3		
平均値	3.05	2.34	
最大値	5.56	3.15	
最小値	1.19	1.6	
分散	3.39	0.4	
対照試料 (地山)			
検体数	9		
平均値	1.43	1.01	
最大値	3.97	1.52	
最小値	0.82	0.43	
分散	0.83	0.11	
遺構			
検体数	16		
平均値	3.62	0.88	
最大値	7.61	1.98	
最小値	1.78	0.46	
分散	2.66	0.16	

にした解析を行う。

・対照試料

対照試料は、9点実施されている。平均値を、2σの範囲で区間推定を行うと、図1のようになる。したがって、遺構での値が最大値である2.17P₂O₅mg/gを越えれば、対照試料よりもリン酸が富化しているといえる。そこで、上記の含量値を一つの基準として遺体埋納の可能性を検討する。なお、EU1533の付近で採取された対照試料はほかに比べて高い値を示す。バーンズほか(1987)では、リン酸が粘土粒子とともに付近に移動する可能性が指摘されている。EU1533の内部ではリン酸値が際だって高いことから、リン酸の拡散が周囲にまで及び、対照試料のリン酸値が高くなったものと推定される。

・基本土層

基本土層は3点実施されている。特にI層が高いのは、表層からの施肥などの影響を受けているためと考えられる。III層は対照試料の平均値付近の値をとることから、リン酸の富化は考えにくい。II層は、対照試料の平均値を、2σの範囲で区間推定を行った最高値よりも高い値で示す(図1)。このことは、対照試料(地山)よりもリン酸の値が高いことを示している。土壤中でのリン酸の富化は、人間活動との関わりが指摘されており(バーンズほか, 1987)、II層中に過去の生活面があったことが示唆される。

・遺構

土壤中に自然に存在するリン酸含量、すなわち天然賦存量は3.0P₂O₅mg/gで、最大でも5.0 P₂

遺構試料のリン酸は、値のバランスが大きく、対照試料程度の値を示すものから、8.0P₂O₅mg/g付近に達するものまで存在する。一方、カルシウムは値のパラツキが小さく、対照試料と同様1.0CaO mg/g付近に値が集中する傾向にある。

4. 考 察

リン酸の値は、基本層序、対照試料、地山でそれぞれ特徴的な傾向を示すが、カルシウムの値は大きく変化しない。これは、リン酸に比べてカルシウムの方が土壤中で移動しやすいためとみられ、カルシウムが土壤中から流出してしまったことが考えられる。したがって、今回の場合、リン酸の方が当時の状況を反映していると推測されるので、リン酸を中心

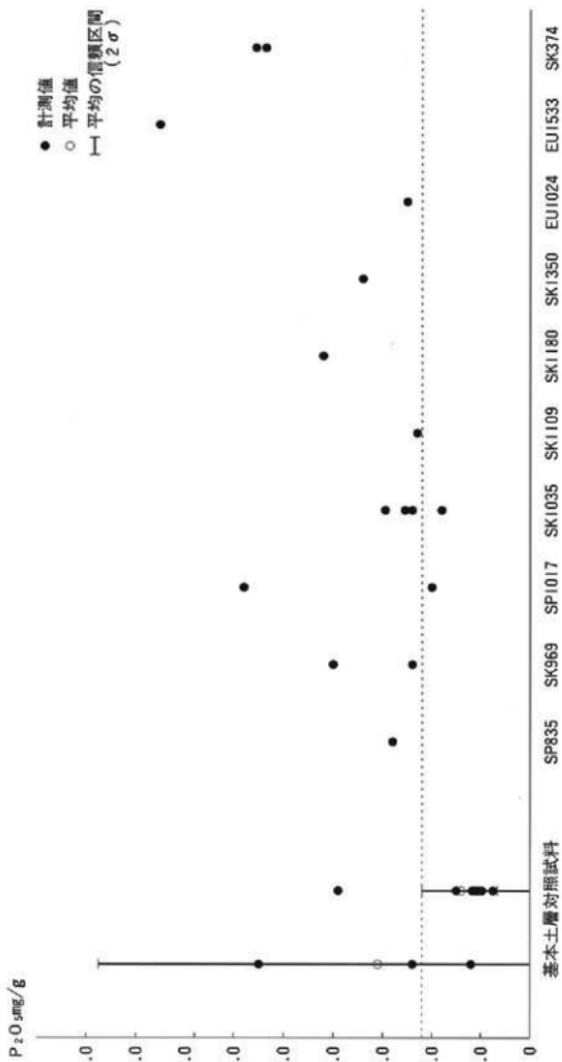


図1 リン酸分析結果

05mg/g推定されている (Bowen,1983; Bolt and Bruggenwert, 1980; 天野ら, 1991)。しかし、低地の遺跡は、リン酸を保持しにくい土壌であることが多く、リン酸値の値は全体的に低い場合が多い (東京都北区教育委員会, 1995など)。このことから、本遺跡の各遺構での天然賦存量は上記の値よりも少ないと考えられる。本遺跡の天然賦存量を表す目安として、先に述べた対照試料から割り出した値 ($2.17P_2O_5$ mg/g)がある。この値と各遺構のリン酸値とを比べると、いずれの遺構にもこの値を上回る試料が存在する。また遺構全体でみると、対照試料と比べ値のばらつきが大きい。これは、遺構内に遺体が存在した場合と、それ以外の場所とでリン酸の含量に差が出るためと思われる。これらのことから、今回分析を行った全ての遺構について、遺体埋納の可能性があると見える。特にリン酸値の高いEU1533、SK374、SP1017の各遺構はその可能性が高く、またリン酸の濃集している試料の採取位置が遺体の埋納されていた位置と一致していることが示唆される。

このように、今回は、いずれの土坑でも遺体が埋納されたことを示唆するような結果が得られている。良好な成果が得られた背景には、対照試料を各遺構毎に採取することにより、自然状態でのリン酸値を得ることができ、これを根拠に解析を進められたことがある。なお、今回は、1つの遺構で複数の箇所から空間的に試料を採取し分析を行うことが少なかった。遺構内の値のばらつきを調べることも、遺体埋納の可能性について検討するため一つの指標になる。おそらく、リン酸値がころうじて基準とした値を上回っているような遺構も、値のばらつきや最大、最小値を調べることによって、遺体埋納の可能性についてより詳細に検証できるものと期待される。

<引用文献>

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen, H. J. M. (1983) 環境無機化学-元素の循環と生化学-, 浅見輝男・茅野充男訳, 297 p., 博友社 [Bowen, H. J. M. (1979) *Environmental Chemistry of Elements*].
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M. (1980) 土壌の化学. 岩田進平・三輪書太郎・井上隆弘・関 捷行訳, 309 p., 学会出版センター [Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. (1976) *SOIL CHEMISTRY*], p.235B-236.
- 土壌標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壌標準分析・測定法, 354p., 博友社.
- 土壌養分測定法委員会編 (1981) 土壌養分分析法, 440p., 養賢堂.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上恒久 (1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p. : p.23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験所 第1巻, 411p., 産業図書.
- 中根秀二 (1992) 一号方形周溝墓の自然化学的分析。「田園調布南 2」, p.133-149, 都立学校遺跡調査会
- 坂上寛一 (1983) 小山田№23遺跡・土坑に関する若干の土壌学的考察。「東京都町田市 小山田遺跡群II」,

p.211-228, 小山田遺跡調査会。

ジナ・バーンス, ルール・プラント, サイモン・ケーナ, デイビット・ロリガー, 西田史朗 (1986) 日本の土壌中での燐酸塩の挙動。考古学と自然科学, 19, p.57-68.

竹迫 紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部 隆 (1981) 神谷原遺跡への土壌学的アプローチ。神谷原 I, p.412-416, 八王子市門田遺跡調査会。

竹迫 紘 (1981) 11号住居址内埋塞中の土壌リン酸分析。「横浜市道高速2号線文化財埋蔵文化材発掘調査報告」, p.156-158, 横浜市道高速2号線文化財埋蔵文化財発掘調査団。

竹迫 紘 (1985) L地区北壁土層のリン分析結果について。「武蔵国分寺跡発掘調査報告書」, p.103-105, 武蔵国分寺跡発掘調査会。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第46集

津谷遺跡発掘調査報告書

1997年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 山形印刷株式会社
